
小悪魔えくそしすた！

まーながるむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小悪魔えくそしすた！

【Nコード】

N9916U

【作者名】

まーながるむ

【あらすじ】

シスコン兄が頑張る話。

第一話（前書き）

予想以上に変態臭のする作品になってました。

第一話

さて、まずは自己紹介をしよう。

とは言っても話すことはそれほどないから……無難なのは俺の家族のことかな。

母親の名前は花氏千枝。はなうぢ ちえ職業は祓魔師エクソシストとかいう世間様的には占い師レベルに胡散臭いものだけど……まあ、わかりやすく言うと結局はちよつとパワフルで滅茶苦茶なただの母親だ。

父親はちよつと高給取りのサラリーマンで転勤中……結構、遠いところに行っているはずだけどどこにいるかはちよつと分からない。二人は大恋愛の末、周囲の反対を押しきって駆け落ち同然で結婚したらしい……まあ、反対してたのは母親側で、逆に父親側はよくやった！　みたいな空気だったなんてことを聞いたことがある。

それでも結婚二十数年目ともなると長期の転勤は単身赴任が当たり前になっているあたり夫婦間の愛情が冷めていく様子を見ているようでなんとも物悲しい。

そんな両親のおかげで一つ下の学年の妹も恋に恋する乙女な時期を三ヶ月で終わらせた。

そう、妹だ。

超可愛い、その一言に尽きる。いや、むしろ尽きない。褒めるだけで原稿用紙三百枚とか余裕だ。妹じゃなくてマイエンジェルでもいい。いや、やっぱり妹がいい。

とにかく一緒に入浴していた頃も、おにいたまーと俺にベッタリだった時も、ある事情から少し離れて暮らしていた間も、世間の兄妹のあり方を知って兄離れに挑戦しようとしていた時期も、その甲斐あってちよつと陰悪な兄妹の演技が出来るようになった今も、全部全部、ちよーかわいい！

ただ最近は普通に嫌われてるんじゃないかって一瞬だけ不安に思っ
てしまうくらい本格的に演じてる。

周りに誰もいないときは素直に甘えていいんだよ、というか甘え
てほしい……そう言ったら顔を真っ赤にして照れ隠しに殴られてし
まった。

……うーん、本当に可愛いよなあ。

そんな妹の名前は未咲^{みさき}、今まさに花咲かんとしている歳の割に精
神面で幼い妹をよく表していると思う。あんなんじゃない心配すぎて一
生お嫁にあげられないな。もちろんあげる気なんてさらさら無い。

そんなちょーかわいいマジ天使なマイシスターは勤勉で努力家だ。
学問だろうがなんだろうが苦手なものとことん克服していく。

そのための努力を厭わない未咲の姿を見てしまった世界中の男が惚
れちゃうのも仕方が無いのかもしれない。絶対に渡さないけど。

ただ、悪く言えば器用貧乏だ……でもそんな万能ではないところ
がまた可愛らしい。

もちろん仮に妹が天才で万能だったとしてもその可愛さが変わり
はない。

そんな我が愛しの妹だが残念ながら祓魔師の才能だけはなかった。
それも祓魔師の娘の割に、ということではなくて普通に無い。

俺も未咲も母親が有名な祓魔師である以上、将来的に祓魔師にな
るべく修行をしているのだが……俺には使える魔術が未咲にはまっ
たく使えない。

だから俺はもう最下級とはいえ公的に祓魔師を名乗れるのに妹は
まだ祓魔師見習いだし、これからもきつとそうだろう。

俺以上に祓魔師に憧れていたのにな……代われるものなら代わっ
てあげたいが、そういうことを言うとか切れ長の目に涙を溜めながら
怒るから下手なことは言えない。プライドの高い困った子猫ちゃん
なんだ。

さて、そんな超可愛い妹を持つ、世界一幸運な俺のことだけど……
……自分のことを話すのは恥ずかしいから普段から周りに言われるこ

とをそのまま言うだけにしたい。

学校の友人たちいわく、眉目秀麗、頭脳明晰、泰然自若……などなど色々な誉め言葉の冠に『微妙に』とつけると俺になるらしい。そこだけ見れば平均よりも微妙にいい人となりそうだが、ところがどっこい、悪鬼羅刹、極悪非道、冷酷無比という貶し言葉に『ちょっぴり』とつけるだけでもいいらしい。

結局のところ平均して凡人だと思うんだが……

まあ、先にも言ったように祓魔師ではあるから一般人ではないけど同時に大学受験を一年後に控えた高校生でもある。俺の通っている高校は大学までエスカレーター式だから特に焦ることはないが……勉強？ 何それ美味しいの？

と、そんな感じで日々をその日暮らしで生きている俺だけど学校での立場は割と堅実。適当に好き勝手すごしていたらいつのまにか生徒会長職についていた。

……とはいえ俺の学校は学校内に普通科や工業科など様々な学科があるため、俺はその中の第一普通科生徒会長ということになっている。権力というか指揮系統が分散して面倒なことも多いが全校生徒数が四桁を越すマンモス校だから仕方ないと言えば仕方ない。四桁の生徒からの要望やらなにやらを一人で解決するのはさすがに無理だ。

その四桁人数を纏めるための立場にいるのは俺を含めて八人ずついる生徒会長と同数の風紀委員長、そして四人の部活組合長だ。その中にも序列はあるものの、そもそも雑務をこなすだけの仕事だから序列なんて気にする必要がない。

ちなみに妹は第一普通科風紀委員長という立場をもって生徒の反面教師である俺をビシバシと指導している。

ビバ愛の鞭。

そんな俺たちの暮らす街だが……なんというか、悪魔や妖怪という人外に類するものが他の地域と比べて多い。

理由は知らないけどその関係で俺の家系の様に魔祓いを生業とし

ている家がいくつかあるのは確からしい。

俺の家系の専門は基本的に対悪魔のアレコレ。しかし、悪魔たちは見た目は人間なので一般人と混じって普通に暮らしている。だから祓魔師としての仕事を完遂するためにはその見分け方くらいは知っている必要がある。

母親が世界的に有名な祓魔師だからか、こう見えて俺もなかなかの才能の持ち主だ。悪魔を見分ける程度のが出来ない理由が無い。

そして俺たち祓魔師が知っておくべき悪魔の特徴とは……

「坊や、お姉さんとお茶してかない？」

一つは美男美女であるかモザイク処理をかけたくなる不細工であること。

「お茶じゃなくて、イイコトでもいいよ？」

一つは美人であればものすごい馴れ馴れしい、もといフレンドリーであり、ブサイクであればこっちが気ままずく思うほど腰が低いこと。

そして……

「あんた、何者だ？」

「えー？ 完璧に人間になってるはずなんだけど……どっからどう見たって人間だよ？ え、なにかおかしいかな？」

「まあ、まず第一に人間はそういうこと言わないな」

どこか少し間が抜けていて、

「というかだ、普通の人間は……」

「人間は……？」

「下着をちゃんと着けている」

「……えっと……その………見たの？」

……開放的な性格のためかパンツをはかないしズボンも嫌う。

なんでもはいていると気が滅入るらしい。

事実、悪魔、またはそれに類するものでパンツをはいている存在を俺は二人しか知らない。

そして何より面倒なのが、

「……えっち」

はいていないからといって羞恥心が無いわけではないことだ。

こうなると、俺も頬を赤らめる暫定悪魔の処断に困ってしまうわけ……最初にも言ったように悪魔、特に女性のものは八割ほどが美人、もしくは美少女なんだ。

嬉しさもあるけど気まずさとかのほうが大きい。



「花氏胤^{たね}。祓魔師だよ」

「ありやりや、タネ君ってエクソシストだったんだ……そりゃーバレちゃうわけだ」

「……ま、まあな」

発見した悪魔を連れてファミレスで一服する。

男の祓魔師は悪魔を見分ける能力が弱いなんてことは……知ってるだろうし改めて言わなくてもいいか。

男祓魔師と女祓魔師には基本的に得意な能力に違いがある。

男性は魔術で悪魔を攻撃する能力こそ強いものの悪魔に対する抵

抗力や悪魔を見分ける力は弱い。精々が自称・靈感の強い人程度だ。逆に女性は攻撃手段こそ限られているがその他のことに強い。凄腕の女祓魔師ともなると半径一キロ以内の悪魔の行動をもれなく監視できるらしい。

重要なのが各国の伝承にあるような銀の弾丸や杭など、悪魔に対して強い効果を示す武器も数多く存在するため、それらを使えば攻撃手段の強弱なんてあつてないようなものということだ……

そういう事情もあつて男性より女性の祓魔師の方が重宝されている。そもそも今の時代、祓魔師には戦うことよりも悪魔たちを人間社会に慣れさせることが求められている。

そして、もちろん能力が違えば特訓の方法も異なる。女性の方は知らないけど男性の特訓は単純だ。

最初にマスターする技能はたった二つ。さりげなく相手に触ることと相手に違和感を感じさせずにスカートをめくることだ。

……いや、本当に。

というのも感知力が弱いために、直接相手に触つてようやく「こいつ悪魔かも……？」と思える程度。その時点で相手がパンツルックだったら悪魔じゃないけど、スカートを着用していたらさらに下着を身に付けているかを確認、着用していたら悪魔以外だ。この瞬間に俺たちは犯罪者になるから絶対にバレちゃいけない。

下着が普及し、はくことが当たり前となった現代社会ではその下着の有無は悪魔を見定める上でもっとも有効な手段となっている。すっげー情けない、とか言わないでほしい。俺だってこんなリスクばかりの確認方法いやだよ。

「で、でもさ……男の子だからって、その、女の子のスカートはめくっちゃダメなんだからね？ タネ君、めっ！ だよ？」

顔を赤らめながらも年上のお姉さんというキャラを意識しているのか、わざとらしく人差し指を立てて注意してくる。

本人は妖艶なお姉さんを演出したいのかもしれないが……外見は精々少し大人びた高校生レベルだ。それも幼さを感じさせる言動のせいでほとんど中和……というより余計に幼く感じる。

初対面なのにもかかわらずタネ君などと呼ぶなんて馴れ馴れしいことこの上ないが、これが悪魔というもの。今までも何人かの悪魔と話したことがあるから今さら気にするようなことでもないんだ。

悪魔は古来より気紛れで人間を手伝ったり、夫婦になってみたり、はたまた死産してしまった赤ん坊に乗り移って息子になってみたり、彼らは基本的に人間が好きなのだ。

たまーに悪い奴等がいるが、それも人間と遊びたい！ という子供らしい感情の発露らしい。そういった連中を俺達祓魔師がシバいて矯正している。

……稀にぶっ飛んだやつが現れることもあるらしいけどそんなのは地球規模で見て一年に数十件程度。一人の祓魔師がそんなやつに会う確立なんて一生に一度あるかないか位だ。

「待て。俺が無差別にスカートをめくって楽しむ変態みたいな言い方はやめてくれ」

「えっ？」

まだ名前も知らない悪魔は少しあどけなさが残る反応で、その顔を本心から意外という形に変えた。

別に男性の祓魔師を代表する気はないが、少なくとも俺は好き好んでめくっているわけじゃない。

「なら、役得？」

「そうだな……って違う！」

「じゃ、じゃあ、まさかタネ君は男専門なの……？」

グラスの水を使って手の中に氷の薔薇を生み出して「こういう趣

味？」と聞いてきた。百合に対する薔薇、という意味だろう……
なんでもいいが、想像して顔を赤らめるのはやめてほしい。

「……魔法を堂々と使うな」

頭痛くなってきたぞ……

「ごめんなさい。それで、これなの？」

今度は薔薇を一旦溶かし、菊の花の形に凍らせてその中心に指を突き立てる。

氷結魔法だな……それもかなり精密な。

魔法は悪魔の使う特殊な技能。

それを人間でも使えるように体系化したのが魔術という技術だ。
祓魔術も一応は魔術の一部であり、もちろん悪魔から技術を伝えてもらうこともあるのだが……

菊の花を指で貫いたその表情は恥ずかしそうな反面、ワクワクしているようにも見える。菊が示すものは人間の特定の部位……その、形状が菊の花に似ているというかなんというか……

悪魔だろうが人間だろうが物好きはいるんだな……とにかく、この悪魔にはなにも教わりたくない。

「……少しはめくって興奮してる」

俺ももういい歳した男だし、スカートめくりを楽しむような奴と思われたくはないが……ホモだと思われる方がもっと嫌だ。

俺は、ちゃんと妹を始めとした女の子たちが好きだからな。

「少し？」

「……いや、結構」

「思春期だね？」

「……ああ、全力で興奮してるさ！ 夜のお供にしたことだってある！ これで満足か！？ 満足したな！？」

「……………面と向かってオカズにするなんて言われると……………困っちゃうな…………ポ」

「て れ る な ！」

「はぁーい」

考えてもみる。

めくったらはいてない、それが悪魔という生き物だ。

しかも顔を始め体は人間と同じ形をしている。無論、女性らしさというものを誇示する部分もだ。

健全な男子高校生としてはもうたまらん、というやつだ。

「あ、顔赤くなった……………も、もしかして、私の思い出してる……………？」

「……………悪い」

「あ、ううん。別に……………そうなんだ……………」

気まずい！

そりゃそうだ！

俺だって自分の息子を女性に見られたあとで顔を赤くされたら反応に困る！

……………ぐぬぬぬぬ。

「そ、そうだっ！」

喉の奥で唸っていると悪魔が思い付いた、というように顔を輝かせた。

俺もこの空気を払拭できる話題なら大歓迎だ。

さあこい。

今ならなんだって答えようじゃないか。

「そもそもなんで私が悪魔だと疑ったの？ 確か男の子は見ただけじゃ分らないって聞いたことがある様な……ないような？」

「……微妙に話変わってないな。まあいいか。理由は簡単、あんたが類稀な美少女だからだ」

何度も言うが、悪魔は美形が多い。信じられないほどの美少女はまず悪魔かどうかを疑うべきだ。

ああ、未咲も信じられないほどの美少女だけど正真正銘の人間の女の子だからな。

「そ、そっか……ありがと」

「だから照れるな。あとは、俺はここら一体の管理祓魔師の代行だからな。普段なら悪魔だと思ってても手は出さないけど……あんたは初めて見る顔だったし……大方、まだ契約してないだろ？」

管理祓魔師というのは地域の人外を把握し、抑制し、また彼らの生活をサポートするための責任者だ。とは言っても祓魔師の数も限られているため管理祓魔師が存在しない区域もあるが。

本来はうちの母親が管理祓魔師なのだが現在ヨーロッパに遠征中なので俺が代理人になっている。

最近では一年のうちの半分は俺が管理している気がしないでもない。

「うん。実は先週やっと認定試験に受かって魔界から出てきたばかりで……」

本来なら魔界で生活しているはずの悪魔たちがこちら側の世界に移住するにはそのための資格が必要になるらしい。

魔界での制度だから認定試験については詳しくないけど、要するにこの悪魔は人間と共に生きる許可を貰い受けたということだ。

許可の取得には様々な条件があり、それを持っているというだけで目の前の悪魔がそれなりのエリートであることが分かる。見た目からは予想もつかないけどな。

「さっきもタネ君の家に挨拶に行くところだったんだよ」

「なるほどな」

行き違いにならずにすんだのはお互いに運がよかったかな。

強制ではないけど悪魔としては管理祓魔師と契約をすれば金銭面や就職などで様々なサポートが受けられるし、管理祓魔師としても契約した人外生物が多いほど行政から支給される助成金も増える、ということだ。魔祓いの仕事など珍しいので大抵の祓魔師はこうして生計をたてている。その代わり、契約している悪魔が何か問題を起こすと祓魔師にも責任が発生してしまうのが難点といえば難点だが、そんなことはなかなか起きない。

「でもさっ、一目から、それも路上で会えたなんて運がいいよね！ 運命的っ！」

「そうか？」

目的地が俺の家な以上、そこまで確率が低いとも思わないが……

「そうだよっ……そ、それに、タネ君、私のこと可愛いって言うてくれたし……」

「……………」

雲行きが、怪しい。

急激乾いてきた唇を湿らそうとコーラに口を付ける。

「だからタネ君！ 私と結婚しよ！」

「ぶふう！？」

「わっ！？ きじゃない！」

「げほっ！ ごほっ、おま、いきなり、ごほっごほっ！」

よりによって結婚！？

そうぞうの遙か上をいくぶっ飛び方だなおい！？

そりゃ、国に認めてもらいさえすれば人間と悪魔の結婚も可能だけど……奔放な悪魔から求婚されるなんて初耳だ。

前人未踏の状況に俺はいるのではないだろうか……いや、前例はあるのだから前人未踏ではないんだが。

「ごめーんね？ でも、そんなに驚くとは思わなくて……」

「わざとだったら人心を惑わせた罪で魔界に蹴り返したからな……」

俺が嘔き出してしまったコーラを魔法で凍らせて払い落としながら悪魔が軽く謝ってきた。

「うう、気を付けます……でもね？ 私、人間界で人間と結婚するのがずっと夢だったの！ 魔界には結婚なんていう習慣もないし、祝ってくれる友達も少ないからさ……だから、こっちにきたのもそのためなの」

「……なら、結婚の前に祝ってくれる友人を増やせ」

なんともまあ、変わった悪魔もいるものだ。つまりは将来の夢がお嫁さんだということだろう？

人間ならそれが許されるのは小学生くらいまでだろうに。

そんな幼気な夢を恥いたずかしそうに笑いながら話す悪魔なんて有史以来初めてなんじゃないか？

「あーそだね！ やっぱり祝ってくれるのがタネ君の友達だけじゃ私も寂しいし……」

「いや、俺を巻き込むなよ」

「でも、タネ君、私のこと可愛いって言ってくれたし、タネ君も可愛いから私好みだし……」

「可愛い言うな」

「でもホントだよ？」

……世の中には真実だからこそ言われたくないってこともあるんだ。

これまで俺が女顔だったためにどれだけ苦労してきたことか……悪魔は根が正直すぎて困る。

「まあ、でも学校は魔界で決めてきたから友達もすぐできるよ！ 住む家も決まったし！」

「学校？ 家？」

そういうものは普通は管理祓魔師がサポートするものだが……また、果てしなく嫌な予感がするぞ。

「うん！ 明日から城南高校第一普通科の生徒になるんだ！ 学年は二年生！ クラスは六組！」

おーまいがっ！

よりによって同じ高校の同じ学年、しかも同じクラスだと？ なんの冗談だ……

「同じ教室なの！？ タネ君の名字は花氏だよね……なら、もしかしたら席も近いかもね」

きゃっきやと笑う悪魔。

そういえばまだ名前も聞いてなかったな。

「私の名前？　んと、人間の発音だと……ウエルミ・トリアス・フクティオニス・ハナ。学校にはウエルミ・ハナで登録したからやつぱり席は近いかも！」

残念ながらうちの学校は名前順で席を配置していないため名字が似通っていても席が近くとは限らない。

しかも何かの拍子に席が名前順になったとしてもハナと花氏の間には花井さんはないに花上さんはなうえがいたはずだ。

まあ、本当に残念ながら……俺の隣の席は空席なんだが……

「そんなことよりミドルネーム持ちで称号持ちと来たか……」

魔界でミドルネームを持っているのは王侯貴族、もしくはそれらと同じくらいの発言力を持つ限られた家系だけだったはず……

「それにフクティオニスって……確か魔界だと永久凍土って意味だよな？」

「そだよ？」

「氷結魔法の第二級称号じゃねえか……」

魔界の格付けで特級、第一級と次いで三番目だ。

同じ階級の悪魔もいるのだろうが簡単に言ってしまうえば、魔界で三番目に強力な氷結魔法の使い手だということだ。

そんな伝説級の大悪魔にも近い存在には思えないが……なんで人間界に……

「謎だ……」

「だから！ 結婚したいの！ タネ君と！」

だから、なんで巻き込むんだって！

というか俺と結婚することじゃなくて人間と結婚することが夢って言ってたじゃないか！

「今はもうタネ君がいいのっ！ でも、そこまで言うなら……じゃあ、いいよ……」

「そうそう、他の相手でも、」

急にしおらしくなったことに若干の戸惑いを覚えながらも、この機を逃したらいけないとたたみかけることにする。

否、しようとした。

「私の恥ずかしいところ見た責任取ってって今ここで叫ぶから！」

「……ちよつと待て、落ち着け、いいな？」

「……後ろの穴も前の穴も、余すところなく全部、穴が空くほど見られたって、」

「よし、ラマーズ法だ。ひっ、ひっ、ふうー。ひっ、ひっ、ふうー」

って、俺がやってどうする！

というか穴なんて見てないぞ！

それに穴が空くほどってすでに空いてるじゃねえか！

「えと……まずはタネ君が落ち着くべきだと思うの……」

「誰が慌てさせてると思ってる……まあ、それは置いて。家は？」

俺は知っている。

偉い人も言っていた。

曰く、

「タネ君のおうちだよ？ 結婚するんだもん。当然でしょ？」

二度あることは、三度ある。

ああ、未咲になんて説明しよう……

第二話（前書き）

実妹登場。

なんか長ーくなってたわ

第二話

「へー……ここがタネ君の家？」

「でかいだろ？」

青みがかった銀色の髪を翻しながら振り返ったウエルミが尋ねてくる。西日をキラキラと反射する銀髪が綺麗だったけど口に出すのは恥ずかしいし調子に乗りそうな気がしたので何も言わないことにした。

それでも母親は結構有名な祓魔師だからな。世界各地から依頼が飛んでくる関係で収入もなかなかだ。

そのお陰で俺達もこれだけ立派な家に住めている。

「んー？ お城じゃないんだね」

「……ここは日本だからな」

もちろん、日本でなくとも家が城だなんてやつは早々ないだろうが……そういえば、こいつの実家は貴族か。

貴族に対して家自慢って、俺は何て恥ずかしいことをしたんだ。

「ま、入りな」

「え、あ、いや……その、タネ君が先に入ってくれないと」

「……ん？ ああ、すまん。気がつかなかった」

「面倒でごめんねえ」

悪魔は家主が内側から扉を開いて招かない限り他人の家には入れない。例外は、家の持ち主と何らかの契約を交わしているときか、扉が開きっぱなしで家主が見ていないときだけだ。

とにかく俺が家に入って扉を閉め、もう一度扉を開けて招かない

といけない。

「タネ君」

「ん？」

「信じてるからね！ このまま私を中に入れないなんてこと、しないよね？」

く……先手を打たれた……

「しないしない」

いやまあ、俺はいいんだよ。悪魔と同居したって。

ただ、未咲がなあ……あいつ、悪魔のこと苦手っていうか遠ざけようとしがちだし。

学校の風紀委員の仕事でまだ帰ってきてないから今はいいとして……

「ほら、入れ。誰もいないけどご近所さんとのトラブルは嫌だから騒ぐなよ？」

「二人きりなの！？ お、おおお、お邪魔しましゅっ！ します！」

ただでさえ兄妹二人だけで住んでるから注目されてるんだ。目立つような真似はできるだけ避けたい……ん？

ウェルミの様子がおかしいな。緊張してるのか？

「お、おい、ウェルミ？ 右手と右足が同時に出てるぞ？」

ナンバ走りでもマスターする気かよ。

「な、にゃ、なまえ呼び……」

自分も俺の名前呼んでるだろうに……なんだ、どうしたんだコイツ？

まあ、とりあえず管理者代行として契約書とその説明のための書類持つてこないとな。

確かお袋が遠征に行ったときに未咲が書類を俺の部屋の机の引き出しに入れていた、とか言ってたはずだ。

気が利く妹を持てて俺は幸運だな。

ウエルミに声は……かけなくていいか。なんか空見て溜め息ついてるし。

「空になんかあるのかねえ？」

とりあえず二階の俺の部屋に行こう。

未咲の部屋の前を通りすぎて一部屋挟んだ端の部屋。そこが俺の部屋だ。

間の部屋は空き部屋。

無駄にデカイ家だから空き部屋が三個もあるんだよな。

ちなみに可愛い未咲と俺の部屋の間に一部屋挟まっているのは俺から未咲へ対する気遣いだ。未咲だって女の子だから恥ずかしい声が出てしまうような行為をすることもあるだろうという兄としての処世術。

これを言ったら殺されかけた上、そういうことは気にしないでいいなんて言われてしまったが。

「えーと、書類は……っと、これか？」

明らかに俺の趣味ではない、子猫をさらにデフォルメしたような絵が描かれたクリアファイルを取り出す。

未咲としては書類が汚れないようにという配慮なんだろうけど……

…正直、男子高校生の机にこんな可愛いものが入ってるってどうよ？

「かーわいー！　ねこちゃんだー♪」

「妹のだけど……って、なんでいる？」

……いつの間にかウエルミが部屋に来ていた。

いまは俺の背中に飛び付くみたいに絡み付いて俺の肩越しに猫フ
アイルを見ている。

目がキラッキラしてんぞ……

というか暑苦しいから離れ……

ふによん

「む……」

背中 で 形 を 変 える この 柔 ら か さ は …… ノーブラ か。

まあ、下もはいてないんだから上をつけていないのも当然といえ
ば当然……って違う！

「くつつくな。当たってる……」

「えっと……あててんのよ？」

定型句……！

というか魔界から出てきたばかりなのにどうしてそんなピンポイ
ントな知識を持ってるんだ。

って抱きつく力を強めるな！

「ウエルミ、離れ、」

「やあだ。んふ♪」

後ろから回された人差し指で唇を抑えられた。

そしてその自分の指をチロチロと舐めだす……え、これって間接フレンチキス？

ヤバい、ドキドキしてきた。

正直に言えば背中にウエルミの胸が押し付けられている時点でドキドキしてた！

「んー……かぷ♪」

「うひい！？」

耳を甘噛みするなあっ！？

変な声出たじゃないか……まったく、悪魔ってやつはこういうところか、

「ぺろ♪」

「ひゃん！」

って、舐めるのも、

「胤くん……このまま、き、キス、しちやおっか？」

「は？」

がしゅんと家の門扉を閉じる音がしたなー、と思ったが、そんな思考はすぐに隅に迫いやられ、俺はただウエルミの柔らかそうな唇を見ていた。

キス？

俺と、ウエルミが？

ウエルミの赤い舌がこれまた赤い唇をペロリと舐めあげる。するとリップもつけていないその唇が蠱惑的に光を反射しだした。

俺は思考能力を奪われてしまったかのように。ただただウエルミ

の怪しい微笑みだけを見るしかない。

「タネ君、きて」

呆然としたまま俺はウエルミに手を引かれ、ベッドに倒れ込む。何がどうなったのかウエルミは俺の下敷きになっていた。傍から見れば俺に押し倒されているように見えるだろう。

俺の手はいつの間にかウエルミの胸を掴み、ウエルミはそれを振り払わずに両腕を俺の首に回した。

「好きにしていんだよ……♪」

ごくり、と生唾を飲み込んだ音がやけに大きく聞こえた。

ウエルミもウエルミでやはり主導権を握っていても恥ずかしいのか首から頬にかけて全体的に淡く朱が差している。

それでも妖艶な女を感じさせる顔になっているウエルミを見て心臓が暴れだすのを自覚する。

別に……悪魔と人間が結ばれても問題はない。

前例も、ある。

「んはぁ……タネ君、優しいね」

右手でウエルミの豊満な胸を撫でながら、そろそろと互いに顔を近づけていく。

途中、敏感なところに俺の指が引っ掛かったのか、ウエルミは一瞬だけ体を硬直させた。

がちやり

「「っ!?!」」

「なんだ、兄さん、いるなら返事してください、」
「未咲……？」

おかえり。早かったな。

……………っは！？

俺は一体何を！？

いくらウエルミが美少女で好意を示してきたからって手を出すのが早すぎだろ！

というか俺には未咲という妹がだな……って未咲！？

「……兄様、気分はどうですか？」

「え？ ああ、悪くない」

……うん、やっぱり未咲はいい子だ。

こんな、端から見たら『家に帰ったら自分の兄が彼女を連れ込んで、まさに行為を始めるところだった』なんていう気まずい場面を見てしまったのに、俺の体調を気遣ってくれる。ただ、どうしてもこの場面で体調を気にするのはよくわからないが。

「まあ、そうですね」

「あれ？」

やっぱり、怒ってる？

「私がわざわざ暑い中、学校に行って仕事をしていたのに兄様は部屋で女性とせ……せっ、セック……」

その一単語だけ言えないまま未咲が首筋から赤くなっていく。

「ん？ ……俺が、女性となにかなあ……？」

うわあ、照れる未咲可愛い！

超可愛い！

ウエルミの両腕がいまだに俺の首に回されていなければすぐにでも抱きしめて頭を撫でて……？

むによん

「あん」

俺の右手もまだウエルミの胸の上……だと？

「んはっ……タネく、うん……あの子が、妹さん？」

「うえ！？ あ、ああ」

「そっか。確かに可愛い子だね」

そうだろ？

高校一年生とは思えないほど抜群のスタイルに光を程よく反射する長い金髪。少しつり目がちなのは気が強そうに見えるけど決してマイナスにはならないし、もうどこのパーツを見ても一級だ。

あんまり可愛いから悪魔と間違われることもあったりするくらいだ。

「……なら、ちょうどいいしさ……」

「ん？」

まだ蕩けた顔のウエルミはフタタビ唇を舐めあげ、とんでもないことを言い出した。

「見せつけちゃおっか……?」

「はっ、て、おお!？」

顔を両手で挟まれ、いきなり引き寄せられる。同時にウエルミも顔を持ち上げ、その唾液でテラテラと光る唇を近づけてきた。口は軽く開かれていて、その奥の真っ赤な舌が見えた気がする。

いや、未咲の前でキスをするわけには、

むにゅう

あ、柔らかか……って、謀られた!?

抵抗しようとするなら右腕でウエルミを押し留めるしかないのに力を込めるとウエルミの胸を揉むことになる。

な、なんて高度な罠だ……ウエルミどころか俺も損しない!

これじゃ抵抗もできないじゃないか……ウエルミ……恐ろしい子……!

「タネ君、キスしたい? それともおっぱ、」

ズガン!

ふわりとウエルミの髪の毛が一瞬だけ空中を漂う。

「ふえ……?」

俺は俺で耳を掠めた衝撃に冷静になった。

……確かにウエルミは策士だ。ただ、ウエルミの誤算は未咲の性格を見誤ったことだろう。未咲はこういう光景を目撃しても赤面してショートしてしまうほど純情でもなければ、興味深げに観察するほど変態でもない。

きつと、振り返って未咲を見れば両手にゴツい拳銃を構え、冷やかな目でこちらを見ているに違いない……怖くて見れないが。

IMIデザートイーグルのミサキモデル。

イスラエルのIMI社が生産している流通品を親父が未咲のために改造したものだ。

従来のデザートイーグルはハンドキャノンとも呼ばれ、ハンドガンの中でも随一という威力を誇っているものの、その影響で女子供が撃つには反動が強すぎた。

しかし、ミサキモデルにはその反動をさらに増加させる代わりに威力にも上方修正がかけられている。火力至上主義の親父に似つかわしい改造だ。

当然、そんな無茶な改造が施されているから未咲が片手で軽々と扱っているそれは引き金を引いた瞬間に普通なら男が両手で構えて使っても肩が脱臼してしまう程の反動を生み出す。

……それは俺が実証済みだから信じてくれていい。

その威力は、それなりの太さがある樹木を数発で根本から折ることができるほどだ。人間の頭なんて一発で床に叩きつけられたトマトのようになってしまいうだろう。

未咲がそれを楽し々と使うのは反動を受け流す技術がずば抜けていることと、体質的に筋肉が異常発達しているから。さすが俺の妹。

……で、そのミサキモデルが俺とウエルミの頭に向けられている俺、大ピンチ。頭の中につぶれたトマトの映像が流れ出す。

「だいたい、その方は悪魔じゃないですか！　なんで家に悪魔がいるんですか!？」

「そりゃ、私とタネ君が男女の関係だから、」

ズガン!

ウエルミ、冗談を言うなら腕か足を失う覚悟をした方がいいぞ？

ただ、未咲も相手の話しは最後まで聞こうな？ 我慢ができない子は社会に出てから足元見られるぞ？

「……貴女のお名前を尋ねてもよろしいですか？」

「ウエルミだよ。ウエルミ・トリアス・フクティオニス・ハナ。言っておくけどどんなに改造したって銃なんかじゃ私は怪我もしないよ？」

ウエルミが少し馬鹿にしたような顔で未咲を見るけど……ウエルミ、それは誤解だ。

「“悪魔殺し”って知ってます？」

「え？ うん……」

依然として堂々とした態度の未咲に今度はウエルミが気圧される。いや、そもそも未咲は最初から優位を譲ってなんてなかったけどな。悪魔殺し……本来、物質的な人間は霊的な悪魔を殺すことができない。どちらも同じような姿をしていても体の構成が異なるからだ。とはいっても人間も魂という霊的な一面を一応は持っているため悪魔に触ったり、殴りかかったりということはできる。

しかし、それでもただの銃やナイフでは傷一つ付かない。すり抜けるわけでもなく、銃弾やナイフが碎けるわけでもないが互いに干渉しないまま終わってしまうのだ。

だからこそ、銀の弾丸や杭など“効果があると信じられているもの”や魔術でしか悪魔には干渉できず、また、それでも完全に霊的なものではないため殺すには至らない。

ただし、逆に悪魔が人間を殺すことができないかと言われるとそうでもない。確かに悪魔の魔法は人間を怪我させる程度だけど、人間界には物質的な凶器が数多く存在する。つまり、悪魔は銃やナイフを使うだけで人間を殺せる。

そうやって、一方的に人間を殺せるということもあって悪魔は悪いものとして誤解されている。

「私と兄様はその“悪魔殺し”です」

「へ？ ……タネ君も？」

その関係を覆してしまうのが“悪魔殺し”と呼ばれる一部の人間。特殊な生まれの“悪魔殺し”は物質的な体に比べて霊的な魂の割合が非常に大きい。そのため、彼らがもともと悪魔に有効な武器を使うと霊的属性の絶対値が高まり、結果的に物質に攻撃であっても悪魔を殺すに至る、ということらしい。

純粋な霊的攻撃ではなくても、圧倒的な霊属性を叩き込めばいいんだ。とはいえ燃費が悪く悪魔の魔法に大きく影響されるというデメリットも存在するため、やはり悪魔が有利だけど。

「なので、私は貴女の頭を吹き飛ばすこともお腹の風通しをよくすることも可能ですよ？」

「いや、いくら“悪魔殺し”だってただの銃じゃ」

家まで来る途中でウェルミに未咲には祓魔師としての才能が無いと言ったのが原因だろう。

ウェルミはまだ未咲を過小評価している。

……俺が言ったのは生身での祓魔師としての才能の話であって、

「この銃、各金属部品は教会の十字架を再利用したもので、弾丸は聖水に漬け込んだ純銀弾です」

「……よし。未咲ちゃん、その物騒なもの下ろそうか。いや、下ろしてください。お願いします」

武装した未咲は“悪魔殺し”という特性も相まって殺傷力だけな

ら既に一流と言えるほどの力を持っている。

未咲が祓魔師として見習いなのは祓魔術が一つも使えないからだ……そのくせ悪魔はしっかり見分けるのは俺としてはズルいとか言いようがない。できればスカートなんてめくりたくないんだからな……

「……どうせ、兄様から私には才能がないと聞いていたから余裕をみせていたのでしょうか？」

「うゝ……」

「……だから、悪魔は嫌いなんです。すぐに騙される愚かな性格だから……」

銃を太もものホルスターに仕舞いながら未咲が溜め息を吐く。

未咲は悪魔に対して普段から偽悪的に振る舞うけど、その実誰よりも悪魔に優しい子だ。今のだって悪魔を心配しての一言。

未咲が本当に嫌っているのは悪魔を利用して富を築く人間だ。

「で、でも、タネ君は嘘をついてないよ！」

「いや、弁護しなくていいから。俺は確かに全部を伝えはしなかったしな」

未咲が銃を下ろしたのを確認したウエルミは俺の下から抜け出し、俺と未咲とちようど間に立った。

悪魔はすぐ騙される、と未咲は言うけどどちらかというと人をすぐに信じてしまうんだと思う。

例えば中世ヨーロッパにはこんな話がある。

ある農家が悪魔と契約し、収穫した作物の半分を与える代わりに一年の豊作を約束させた。

これだけならまあ普通の話だ。

しかし農家は契約の際に上半分か下半分かを悪魔に選ばせ、悪魔

は上半分を選んだ。

それを聞いた農家はカブを植えて、収穫したカブの葉だけを悪魔に与えたのだ。

結局、悪魔は契約に縛られていたため泣く泣くそれをもって帰ったという民衆の間での笑い話。

これを聞いたとき、俺は悪魔も右半分って言えばよかったのに……など単純な感想を思っただけだが、未咲は農家に対して涙を浮かべるほど激怒した。ノンフィクションだったら農家を殺しに行くのではないかというほどの怒りようだったのを覚えている。

「……悪魔は正直すぎます。貴女たちは狡賢い人間の間では暮らしていけません」

「正直なのはいいことでしょ？」

「……悪魔というだけで人間は貴女たちを恐れるんですよ？」

「誠意をもって接することができれば仲良くなれるよ！」

「無理です。悪魔という存在を知る人間にとって貴女たちは金儲けの道具です。人ではないからと自らの欲望を叶えるために貴女たちに酷いことを強制するでしょう」

……未咲の言う通り悪魔は美形が多いからな。使い道はいくらでもある。

「そ、そんな酷い人とは一切契約しないもん」

「へえ……ではもし兄様が貴女と名前での契約をしたいと言ったら出来ますか？」

未咲がここで始めてウエルミに微笑みかける。

俺にはその微笑がなにやらあくどいことを考えているようにしか見えなかったが……未咲はマイエンジェルだから見間違いに違いない。

「え!？　えと、タネ君が、良ければ……」

急にウエルミがもじもじした。

まあ、悪魔にとって名前での契約というのは同時に一人としか契約できず、ほぼ全ての契約よりも優先されるという大事なものの、つまり人間で言う婚約に近いから仕方がないのかもしれない。

名前での契約より優先される契約はただ一つしかないため、人間からしてみれば一生ついてくる都合のいい奴隷みたいなものだ。ただし、死んだときに魂をもっていかれるらしいけど……でも悪魔を使って私欲を満たそうとする連中は死後に興味なんてないだろう。

「そうですか。ですが兄様は既に六名の悪魔と名前での契約をし、その全ての悪魔の生活を縛ってしまうことを命令していますよ?」

「未咲っ!？」

「え……?　嘘、だよな?」

いや、嘘は言っていないけどさ!

……俺が彼らにした命令は嫌なことには嫌と言え、なんていう内容だ。この命令さえあれば悪魔は不当にこき使われない。

あとはそれを確実なものにするための命令をちょこちょことしているだけで、未咲が言外に含ませた悪そうなことは何もない。

……だからウエルミの不安そうな目が痛い。

「もし契約していたら貴女は兄様の性処理の道具になっていたかもしれないね。いえ、貴女は兄様に好意を抱いているようですからそれでもいいのかもしれませんが……」

「そんな……」

俺、そんなことしない!

というか未咲って俺のことそういう風に見てたのか……？
だとしたら、そうとう凹むぞ……

「ああ、もしかしたら誰か他人の“お世話”をするために売り飛ばされるかもしれませんね。実際、三人ほど兄様とは関係のない人のお世話をする事になってますし」
「えうっ……」

いや、確かに何人か老人介護とか看護師とかになって人の世話をしてるけどさ……その世話を性処理みたいにか聞こえるように言うのはどうかと思うぞ？

自分が見知らぬ人間にそんな道具として扱われる状況を想像したのか、それとも俺に裏切られたと思ったからか、ウエルミの目に涙が溜まっていく。

……泣きたいのは俺もだ。

「でも、私、タネ君しか頼れる人が……」

「兄様が契約した悪魔のうちの半分はそういうこちらに來たばかりの騙されやすい悪魔です」

「ちょ、」

「そんな……」

ウエルミの瞳が揺れる。

俺、悪いことしてないのに……というか悪魔の自由を助けてるのに……

やっぱり、俺って未咲に嫌われてるのか……？

「それで、まだ兄様と名前での契約をしたいと思いますか？」

「あ……あう……タネ君は、」

「ご自分の頭で判断してください」

救いを求めるように俺を振り向こうとしたウエルミの視線を未咲が声で遮る。

「いいですか？ 人間界で暮らそうと思うなら自分の考えを何よりも大事にしてください。そうでないと、また騙されますよ？」

……未咲みたいになやつにな。
いくら悪魔に注意を促すためとはいえ酷いぞ。お兄ちゃん泣いちやうぞ！

「んと……少し、考えてみるね。タネ君、今日はありがとう。未咲ちゃんも」

ウエルミも力がこもっていないような足取りで廊下へと向かっていく。

……大丈夫か？

俺とウエルミの関係が、ということではなくウエルミの今後が心配になった俺は未咲に目配せをする。

ウエルミはまだ管理祓魔師としての俺とも契約をしていない……それは悪意から身を守るための盾の一つがないということだ。今回のことで自暴自棄になったりしたら最悪の結果だってあるかもしれない。

未咲自身、それを理解しているのか深いため息をついてくれた。

「……まあ、ほとんど嘘ですけど」

「ええ！？」

そして無情なまでに平坦な声による未咲の暴露にウエルミがずっこけた。

いやー、よかった。

このまま放置してたら色々大変なことになってたぞ。

「え？ え？ 嘘ってどこからどこまでが？」

「兄様が悪い人物だと言うのは全部ウソです。そんな人だったらさつき躊躇わずに撃ち殺してましたよ。もちろん兄様を」

「ひい！」

……あれ？ 今の一言ちょっと嬉しい。

なんか、未咲が俺のことを悪くない人みたいに思ってくれてるって意味だったよな？

あの、未咲様？ それなのに、なんでそんなに鋭い眼で睨んでくるのでしょうか？

「兄様がこの人を襲っていたのは事実ですから」

「ええー……否定できないけど否定したい……」

「で、ですが、まあ、兄様が妹離れし始めたいいい兆候とも、」

「いや、それはないな」

少し俺から視線を逸らしてそんな天と地がひっくり返るよりもありえないことを言う未咲を間髪いれずに否定してやった。

どうだ、安心したか？

「……言い切らないでください」

す、澄ました顔してるけど実はほんのちょっぴりほっとしてるんだろ？

……してくれないと泣いちゃうぞ。

兄離れできないのは未咲もなくせに……

「まあ、そういうわけで。ウェルミさん。貴女は人間界で暮らすには純粹すぎますよ。すぐに帰ることをお勧めします」

「お、おい……」

「それは、嫌……夢があるもん」

「夢？」

……人間と結婚するってやつか。

男の俺にはよく分からないが……結婚式ってのは女の子にはキラキラして見えるんだってな。

未咲もブライダルシヨップの前なんかを歩くと貸衣装をチラチラと見ながら歩くし。

……男が刀とか戦闘機に憧れるのと似たようなものなのかもしれないな。

「私。結婚式を挙げたいの……でも悪魔はそういう習慣が無いから人間界で人間と結婚しないといけなくて……」

「……なるほど」

これが吉と出るか凶と出るか……

一人の女の子としての未咲は多分ウェルミを応援するだろう。

ただし、“悪魔殺し”としての未咲は反対するかもしれない。

まあ、十中八九、

「はあ……そんな真剣な目で言われてしまったら何も言えませんね。そもそも私は祓魔師でもなんでもないのでアドバイス以上のことを出来る立場にいませんし、最終的に選ぶのは貴女ですから」

未咲は優しい子だから、相手の夢を諦めさせるなんてことは出来なかっただろう。

ほんの少し、憎まれ口で話してしまうのは照れ隠しからかもしれない

ない。

「未咲ちゃん……ありがとう！」

「で、ですから、私はアドバイスをしただけで、」

「タネ君との結婚を認めてくれるってことだね！ 妹さんの許可は下りたからあととはご両親だけだね！ タネ君！ もうすぐ私たちの念願がきゅっ！？」

ずががががん！

「……誰が、なにを、認めたのでしょうか？」

床に六発分のクレーターを作った未咲はにっこりと、十人中十人が見とれてしまうような笑顔を浮かべながら未咲は俺とウェルミを交互に見つめる。

なんで俺まで……？

「えっ？ だって、私が結婚することには反対しないんだよね？」

「ええ」

「だったら私とタネ君が結婚でき、」

ずがん！

ああ、床に七個目のクレーターが……これ、直すの俺なんだろうなあ。

いっそのことコンクリ直打ちにしようかな。それなら直すのも簡単だ。

「兄様！？ どういうことなんですか！？ 十秒で答えないと撃ちますよ！？」

「え!?! や、えっと、ええ!?!」

なんでここで俺に振るんだ!?!

まあ、待て。

クールになって事態を一度冷静に見つめ直そう。

ウエルミは結婚を反対されなかったー×↓俺とウエルミが結婚できる。

当然つながるわけがない……まあ待て。もっと落ち着こうじゃないか。

ウエルミは結婚を反対されなかった↓なぜなら未咲が優しかったからだ↓未咲マジ天使↓超可愛いー×↓俺とウエルミが結婚できる。ダメだ……どう工夫しても繋がらないぞ。

「十秒です。兄様、説明して下さいますか?」

「十秒貰って悩んだ結果、要するに、だ」

「はい」

「未咲が可愛いということを再確認した」

ずがん!

ぎゃあ!?!

ずがががががん!

え、ちょ、まっ、待って! まだ死にたくない!

なんだ、なにを間違えたんだ?

……あ、そうか。

「兄様。もう一度だけ聞きます。どうぞ」

「未咲は可愛いんじゃないかった。超可愛いんだ」

「なっ!？」

なんで俺の眉間に銃を当てるんだ!？

って躊躇いなく引き金を引かないぎゃー!ー!ー!ーっ!？

かちん

……っほ。

……た、弾切れか。

ま、まあ、未咲だって俺を本気で殺そうとしてたわけじゃないんだし、もちろん弾切れだってことを分かって引き金を引いたんだよな？

な？

「……ちくしょう」

「!？」

素! 素が!

未咲、お客様の前!

お客様の前で未咲は清楚で大人しい子になるって、そう自分で決めたんじゃないのか!？

……銃をぶっ放すのは……まあ、兄的には照れ屋さんな感じでギリギリセーフだ。

「お兄ちゃんの……」

「の……?」

「しすこん!！」

いえすあいあむ!

と口にする前に拳銃のグリップで殴られ、俺は意識を失った。

お兄ちゃん、つてのは久しぶりだったなあ……いつもは兄さんだ
ったし……我が生涯に一片の悔いなし。
がくっ

「タネ君!？」

目を閉じる前に未咲の足の裏側が見えたような気がした



ふーっ、ふーっ、ふーっ

……この、この、このお!

「ちょ、未咲ちゃ、そんなに踏んだらタネ君死んじゃ……死んじゃ
つてる?」

「兄様は、頑丈なので、これくらいじゃ、明日にでも、ピンピン、
してますっ!」

「いや、そんな渾身の力で踏んでも平気なの!？」

ええ、全力ですよ!?

それが何か!?

微妙に満足そうに気絶している兄さんのお腹を思い切り踏みつけ
る。

「だ、ダメだってば!」

「止めないでください!」

「ダメ! 人間界には未必の故意って言うのがあるって教わったも
ん! 死にそうな人がいるのに助けなかったら罰せられちゃうんだ
よお! 私まだ魔界には戻りたくないのっ!」

「う、うううう~~~~~!」

ウェルミさんが私を羽交い絞めにして止める。

この、実妹を可愛いとか超可愛いとか誉め殺そうとするバカ兄に天誅を下さないといけないんです！

ほんとに……兄さんも妹じゃなくて他の女の子に目を向けられねなりにモテるはずなのに……

このウェルミさんだって、悪魔とはいえ貴族で称号も持ってる、実際には私たちには手の届かない……こともないけど、そんな存在の人に好かれるくらいなんだし。

「……兄さんのバカ」

私のことなんて……あのことも、もう気にしなくていいのに。

「未咲ちゃん、顔真っ赤だよ？」

「だ、誰が！」

もう……昔のことなんて思いださなきゃよかった。

昔は、私も兄さんに懷いてたから思い出すだけで勝手に顔が赤くなる……

「はぁ……」

「未咲ちゃん？」

「ウェルミさん……名前での約束をしませんか？」

名前での約束。

名前での契約と似てるけど唯一違うのは守るべきものがその約束した内容だけという点。

契約だと、それ以降悪魔は逆らえなくなっちゃうから……ううん、逆らわなくなる、かな？

悪魔は、本当は悪魔なんて呼ばれていいものじゃないのに。

約束は絶対に破らないし、約束したことがどんなに無茶でも必ず果たそうと努力してくれる。

それは悪魔が人間との約束を果たすことに……人間の笑顔を見ることに幸福を感じてしまう生き物だから。

本当に、悪魔という文字の意味を体現してるのは、そういう悪魔を騙して無理難題を押し付ける人間の方。

「……いいよ」

「人のことを疑いましょうって行っただけじゃないですか……」

私が悪魔を心配するのはこういうところがあるから。

悪魔は、人の善性ばかりを信じようとして、自分の身に危険が降りかかるかもしれないなんてことを考えない。

考えても自分で否定しちゃう。

どんなに騙された悪魔だって、次こそは、きっと次は大丈夫って……悪魔はずっと希望に生きてる。

兄さんが名前での契約をして一方的に救ってしまったのも、そうやって騙され続けて傷ついた悪魔たちを見てたから……だから、私は悪魔が騙される前に護ってあげたい。

……まあ、そのくせ悪魔に約束って言葉を使って縛ろうとしてるのも私だけど。

「それで？ 何を約束したいの？」

「……その、本当に、本当に心から求めてしまうくらいになるまでは……言葉にしないでください」

子供でもないような目的語が無い約束。

本当なら、悪魔相手にこんな約束はしちゃいけない。

後からいくらでも言葉の意味を変えて相手を縛ることが出来てし

もうから悪魔だって受け付けない。

「……うん。分かった。ウエルミ・トールリアス・フクティオニス・ハナは花氏未咲に約束するよ」

なのに、この人は……バカです。

「ありがとう……ウエルミ」

第二話（後書き）

次回は日付を変えて学校編。

……誰をメインヒロインに据えようかな

ガールズラブとかボーイズラブはあるけど近親相姦タグが無い……

第三話（前書き）

ヒロイン三人目登場。

この先の展開も固まったのでお試し外してみました！

第三話

ウエルミが家に住み着いてから六日目……とうとう転入生としてウエルミが学校に来た。

「ウエルミ・ハナです。まだ日本に来てから少ししか経っていないので分からないことばかりですが仲良くしてください。よろしくお願いします」

朝のショートホームルームでウエルミが転入生として自己紹介をし、ぺこりと頭を下げる。

……なんというか、雑だ。

仮にも貴族の令嬢というならもう少し洗練された所作とかあるんじゃないだろうか。こう、スカートの裾を持ち上げたり、みたいな？ まあ、うちの制服はスカートが短いがから無理だろうけど……ああ、ちなみに下着は未咲が無理矢理着けさせたから心配はないはずしかし……知ってるやつが転入してくると妙な気持ちになるな。

野球の試合で勝ったのに素直に喜べないベンチの気持ち……に近いだろうか？

周りの興奮についていけないで取り残されている気がする。

「うわぁ……」

「すっげえ美人！」

「……E。いやFだな」

そして、このクラスの反応だ。

最後のやつ……なかなか見所があるな。

でもウエルミはもう一サイズ上だ。下着を買いに行った未咲が呟

いてたから間違いない。俺の手にも手に収まらなかったしな。

しかし、やはり美人な上に抜群のスタイル、そして白磁のような肌と少し青みを帯びた銀髪はクラス全員の視線を独り占めにしていた。

ウエルミに注目している全員が、海のように深い蒼の瞳に見つめられることを望み、そのバラのように紅い唇が次に紡ぐ言葉を待っている。

今日はちょっと詩的な俺だ。

「あー、今聞いたように彼女は留学生だ。日本語自体には問題ないとホームステイ先の保護者から聞いているが、微妙なニュアンスの言葉は伝わらないだろうから注意してくれ」

俺達の担任——現国教師も務める鈴木——がウエルミの自己紹介に軽く補足した。

……あててんのよ、まで熟知しているウエルミに伝わらないニュアンスなんてないような気もするけどな。

まあ、この数日間でウエルミが真面目な小説やらマンガやらから言葉を学んでいたことも聞いたし、現代日本で暮らすにしても会話の表現では何の問題はないだろう。

そもそも悪魔は魔法を使って翻訳してるらしいしな。

「そうだよな、花氏？」

「へ？」

俺？

「へ？　　ってお前……親御さんから電話でお前の家にホームステイしていると聞いたぞ？」

お袋、いつのまにウエルミのこと知ったんだ？

普段はこっちから連絡しようと思ってても絶対につかまえられるんだが……

そこまで考えてようやく答えに思い当たった。

「あー……未咲か」

「お前は生徒会長の一人でもあるし、妹さんも優秀だからな。信用しているぞ」

未咲はお袋の声真似得意だったな……でも未咲がそこまでするのは意外だ。

むしろ目立つことが苦手な未咲のことだから住所や俺達とウエルミの関係は隠すものだとはかり思っていた。

「え、花氏の知り合いだったの？」

「というか同棲？」

「なんというエロゲ展開……花氏、餞別だ」

ん？

眩きに混じってなにか飛んできたぞ？

五センチ角の薄いメタリックな袋。業界最薄という印字の上にマジックで紳士の嗜み&（ムリヤリは）ダメ、ゼツタイと書かれている……余計な気遣いだよ！

袋が飛んできた方向をキッと睨み付け……そして、俺はその近藤さんをそっと財布にしまった。

紳士の嗜みだからな。うん。

「ところで、私の席は……？」

俺の隣の空席をじっと見つめながらウエルミが言った。

ウエルミはこの席に座れると思っっているんだろうけど……残念ながら確実に、とはいいがたい。いや、むしろ確率的には低い方かもしれない。

「む、そうだな……境、準備室から机一式持ってきてくれ」
「え？」

俺の隣の席が空席であるにもかかわらず、新たに机と椅子を運んでくるよう生徒に命じた鈴木の声にウエルミが……ウエルミだけが驚いたような声をあげた。

他の生徒は当然という顔かまたかという顔でいる。

俺の隣のこの席は、本当は誰かが座るための席ではない……全員がそれを知っているからこそその反応だった。
いわゆるいわく付きの席なのだ。

「せ、先生……あの席は、空いてないんですか？」

「え？ あ、いや、空いていないと言うわけではないんだが……」

「なら、タネ君の隣の方が安心できるのですが……ダメでしょうか？」

「むう、しかし……」

ウエルミが俺の隣の席を指して言う。

まさかウエルミから席のことを聞かれるとは思っていなかったのだろう。鈴木が不自然に口ごもった。

当然、それを見逃すウエルミではない。

勢いに乗ったウエルミがやんわりと、しかし見方を変えれば確実に退路を塞ぐようにして言葉を重ねていき、最後には堂々と俺の隣の席に座ることを認めさせた。

意外と押しが強いのか。

「ターネ君……きちゃった♪」

「いや、そういうのいいから」

上機嫌なウエルミが俺にギリギリ聞こえるか聞こえないか、という程度の声で話しかけてきた。

まあいわく付きといっても、もともとこの席に座っていた女子生徒が運悪く交通事故で命を失い、それ以降、その席に座った生徒は幽霊に取り憑かれて元気がなくなるっていう程度がよくある話だ。

仮にその噂が本物だったとしても悪魔であるウエルミには影響もないだろう。

本物、つまり人間の恨み辛みといった思念程度で悪魔がどうこうなるなら悪魔を処罰するという意味においては祓魔師は必要なくなる。

最近は人間から悪魔を護る仕事の方が多いからやっぱり必要だけど……：ようやく国も悪魔に対して非公式ながら人間と同じだけの権利を認めるよう法整備をしたし。

「ハナ、体調が悪くなったらすぐに言うように」

「わかりました」

鈴木が新入生を気遣う素振りを見せながら、いざという時になるべく早く対処できるよう布石を打つ……鈴木自身は一般人だけど、この席に何かがあることは特別でなくても気付く。

事実、このクラスの生徒は誰一人としてこの席に近寄りたがらない。

酷いときは座った瞬間に貧血を起こす生徒もいたわけだが……ウエルミは本当に大丈夫そうだな。

程良く蛍光灯の光を反射するウエルミの銀髪を何とはなしに眺める。少し蒼みがかった髪の毛は枝毛どころか癖さえない。背中側から見ればストンと一直線に下ろされているのが分かるだろう。

「んー？ タネ君、なにかな？」

「いや、別に」

「私のセーラー服に見惚れてたんだね！」

「それはセーラーじゃなくてブレザーだ……」

「……………た、タネ君を試しただけだよ！」

さいですか。

……まあ、少し安心だな。

美人過ぎるからって理由でウエルミを苛めたりするやつもないだろうし、むしろ化粧っ気のないウエルミを世話してくれたりするかもしれない。

女子ってそういう女の子ならではのテクニックの交換とか好きみたいだからな。未咲も家に友達が来るとそんな話をしていたような気がする。

「すぐ一時間目が始まるが……それまでに簡単に知り合っておくように。花氏、騒ぎすぎないように見ておけよ」

「あーい」

鈴木がそれだけ言って教室を出ていった。

俺たちの次の授業は鈴木が受け持っている現国だから本当は教室から出ていく必要はないし、普段もこのまま教室に居座っているのだが……わざわざ出て行ったということは一時間目は親交を深めるために使えということか。

鈴木は頑固なところもあるが、逆に今回みたいに柔軟な対応を試みせたりもする。

本人としてはどちらも教師としての本分と納得しているらしい。

「おーし、じゃあ花氏、仕切って」

どこからかそんな声が上がる。

まあ、いつもの役割というやつだから慌てたりはしない。

実際、これが発展して先月引退した三年生に代わって生徒会長なんてものになっていたわけだし。

じゃー、花氏バトンタッチ。頼んだよ♪

そんなことを前生徒会長に言われて。

「じゃあ青井夢から出席番号順に一回ずつ質問だ。一人一分。はい始め」

「え!?! えっと、ウェルミちゃんって呼んでいい?」

「うん……あ、でも男の子はダメー♪」

盛り上がりかけた男子のテンションが一瞬にして押し戻された。

……うん。

これは生徒側からの自己紹介にもなっていないな。俺がフルネームを呼んで向こうが馬鹿をやらかす。そんなノリになるはずだ。

これじゃ質問タイムというかアピールタイムだと思わなくもない。

「はい次、赤西賢太」

「俺と一生を浪費しないか?」

「えっ!?!」

いや、ウェルミ……期待しているような目でチラチラ俺を見るな。そして不満そうに眉を寄せるな。

意味が分からない……こともないが俺は引きとめたりする気は全くないぞ。ただイケメンだからと選ぶなら健太の顔をよく見てから決めた方がいいとは思うけどな。

「……脈は無さそうだな!」

すまん、賢太……お前もパツと見イケメンだから、いい人探してくれ。パツと見……まじまじと見るとそうでもない気がしてくる不思議な顔だ。

ただ、プロポーズに浪費って言葉を混ぜちゃダメだろ。せめて消費くらいにしておけ。

「次、阿久津亮」

「な、なにカップですか!？」

「はい次、石破雛里^{いしわ ひなり}」

「阿久津を殺していいですか？」

「許可する。宇都美拓也」

「雛里を止めるフリして胸を揉みしだくぞ？」

「真面目にやれ」

もはや質問ですらなくなってるぞ。

「オーケー、真面目に揉む」

「ひゃんっ!？」　ちょ、宇都美、ひいん!　ばかあ、ふざけんなよお……」

まったくだ……このクラス、大丈夫か？

まあ、今の三人は幼馴染だしいつものことだけど……石破の甘い声に何人か前屈みになっているが気にしない。

いや待て、そこのお前は女のはずだよな？

「えー……次、草野真昼^{まひる}……と草野深夜^{みや}」

「「私ら一纏めかつ!」」

「どうせ、どっちがどっちかって質問だろ？」

「「う……そうだよ。どっちだっ？」」

双子らしい一発ネタではあるが……そもそも初対面の相手にその質問は意味がないだろ……クラスに二人しかお前らがどっちか分かる奴いないんだぞ？

もちろん二人というのは本人同士のことだ。

「んー……こっちがまひるちゃん、こっちがみやちゃんだ！」

「「見破られた!？」」

なんて言っていたら三人目が生まれたらしい。

「二人とも名前が呼ばれたときにピクツとしてたから」

「「視力いくつなの!？」」

「わ、わかんないや……えへ」

と、まあこんな感じでそれなりに騒がしく転入生への質問タイムは進んでいく。

途中途中、好きな食べ物や趣味など普通の質問をした奴がつまんねえやつとか言われていたが概ね平和に進行していた。

「ラスト、渡辺みやび」

俺が危惧していた質問も飛び出してこなかったから一安心だ。
さすがに、

「ウェルミさんと花氏の関係はなに？」

なんてベタな質問するやつはいなかった……いな……ってちょっと待て!？

最後の最後で!？

クラスのやつらも目を爛々と妖しく光らせてるし……最初から最後に聞くつもりだったな!?

おのれ渡辺……! 六組の諸葛亮のあだ名は伊達じゃないな! というか、まずいぞ。

タネ君の未来のお嫁さん♪ とか言われたら……男子どもに殺される。自慢じゃないけど腕力は普通だ!

しかもウエルミはそういうの恥ずかしがらずに言うし……というか俺にはなにより未咲がいるし。

「えとえと……私は、タネ君の……」

「」「花氏の!?!」「」

お前ら、詰め寄るな!

確かに格好のネタだったのは分かるけど、

「あ……うん、少し遠い親戚かな?」

「」「なんだ」「」

「残念でしたー♪」

お?

ウエルミ、空気読んだのか?

おかげでクラスは拍子抜けな感じの空気になったけど……おい、花氏だし当然かって言ったやつ出てこい。健太、お前だな?

え? だって未咲ちゃんがいるだろ? なるほどなるほど。

……確かに大正解だが、人の妹を勝手にちゃん付け……それも名前で呼ぶとはいい度胸だ。

「ちょ、ギブ! 胤ギブだって!」

「ふん。どうしても名前で呼びたいなら未咲様って呼べよ?」

うちの妹に手を出したら……分かってるよな？

「じゃ、時間も余ってるし……あとは勝手に質問しとけ。俺は生徒会室行ってサボるからな」

「あ、タネ君！ 私も行く！」

「学生が授業をサボるな。というかお前がいなくなったら質問できないだろうが」

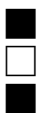
ええー、という声が教室全体から発せられたが無視だ無視。

それにお前らが好き勝手に出してくる要望とか十月の体育祭のことも纏めなきゃならないんだよ。まったく、お前らのために仕方なくサボってるんだからな！

「花氏、それは放課後にやれよ」

「やなこった」

なんで未咲と過ごせる貴重な一家団欒の時間を犠牲にせにやならん。



うちの高校の生徒会は複数あるが、それぞれが独立した校舎を仕切っているため、その一つ一つが別の高校だと考えても問題はない。その影響で、校舎によって校則が違ったりもする。

例えば普通科以外の科棟では制服を着なくていいし、隣の……何科かは忘れたが、そこでは始業時間が夜の九時、他の生徒が立ち入りを禁じられている時間に勉強をしている。

そして、基本的に生徒は自分の所属していない他棟に干渉することを許されていない。これも人の学校に遊びに行っただけいけないのと同じようなものだろう。

つまり何が言いたいかというと、この校舎の中では俺が生徒の代表ということであり、

「げ……なんだこの書類の山」

影で一番苦勞している生徒だということだ。

自習をサボって仕事をするくらいは許してほしい。

「えーと、なにに……購買のメニューを……自販機を……あの冷たい水が出る機械とか言われてもわかるかよ。あれなんて名前だよ」

……なるほど。

この束は先月に設置した目安箱の中身か。

中には女子更衣室に監視カメラを、なんていう悪戯としか思えないものもある。いや、悪戯であってくれよ……さすがに俺の代で生徒から犯罪者を出したくはない。

設置してからまだ日が浅いからやたらと要望がくるが、殆どが面白半分だろうからひと月もしたら皆飽きるだろうし、こっちが対応できるレベルも見極めてくれるだろう。

「あ……かいちよー、やっぱり来てました」

「んあ？」

「ひゃあっ！ の、覗くつもりはなくて……すいませんすいません
！」

ペコペコと謝りだしたのは、普通科生徒会書記の弓緋之ココゆびの。なぜか俺と未咲に対してだけ異常に怯える一年生だ。

まあ……怯えるからといって容赦しないのが俺たちの流儀だが……弓緋之自身、俺達のことを嫌ったり苦手だったりしているわけではないというのも容赦しない一因だ。いじると楽しいとも言える。

実際、未咲の友達であり生徒会で俺の片腕でもある弓緋之は、花氏家に遊びに来る回数が学校内で一番多いかもしれない。

ん？　なら、やっぱり怯えているというより低姿勢という方が正確か？

「出たな、不良キツネ……」

「キツネとか言わないでくださいっ！　神社のことバレたら……せつ、責任とってもらいますからね……？」

よし、黙ってよう……神主にはなりたくないからな。

まあ、こいつの家は稲荷神社だ。名前のココも本当は琥珀色の狐と書いて琥狐^{ココ}と読む……残念ながら琥珀色ではないけど。

歴史も結構長いらしいんだけど……巫女さんの服装を見られるのが嫌らしく本人は隠している。見られて減るもんじゃないし、それでお賽銭が増えるんだったらむしろガンガン見せた方がいいと思うんだけどな。未咲ほどとは言えなくても可愛いんだし。

「なら不良ピンクだ」

「あう……やっぱり、生徒会的には染めた方がいいですか？」

染める、というのは当然髪の毛のことだ。

弓緋之は遺伝なのか分からないが地毛がピンク色をしていて、生徒会にそんなやつがいていいのか、なんて一度だけ問題になった。

とはいえ校則には地毛がピンク色ではないいけない、なんていう記述もない上、校則違反を摘発する立場である風紀委員の未咲が金髪な時点でいろいろと手遅れだろう。あれも地毛だけど……なんで俺は黒いのかね？

そもそも俺たち生徒会や風紀委員が生徒の良き手本である必要は必ずしもないと思っている。

「いや、そのままでもいい。それより鞆を盾みたいにして俺に向けるのをやめろ」

「ひゃう……ごめんなさい……」

「や、だからって机の影に隠れたら同じだろ」

……やっぱり怯えられてるよな。

目立つ桃色の髪が机の陰からぴよこぴよこ覗いている。

まあ……生徒会は各自が生徒の代表なんだから、校舎全員の生徒
サンプルの見本になるのは自然なことだ。

つまり、授業をサボる生徒会長や書記がいるのはこの普通科全体の校風をよく示しているということに……さすがに無理あるな。
実はサボる生徒はあんまりいない。実はもなにも当たり前か。

「で、何しに来たんだ？」

「え……と、先輩が授業中に抜け出すのが見えたので、その……つい……」

「……目、良いんだな」

「両目ともに4・0です！」

アフリカ人かよ……

確かに普通科の校舎はコの字型だし、弓緋之のクラスは俺のクラス
の向かいにあるけど……当然、人の顔が簡単に見分けられるほど
近くない。

というか俺たちは自習だったけどこいつらのクラスは普通に授業
やってるんじゃないか？

「……不良娘め」

「な、なら言わせてもらいますけど！」

「ああ？」

「ひう……かいちよーは怖いです……」

いや、普通に聞き返したただけなんだが……まあ、クラスでも微妙に目付き悪いとか言われたからな……その癖、女顔で可愛いとか言う奴らも出る始末だ。あいつらは俺をどうしたいのか一度聞いてみたい。

怯えさせても話が進まないし、本気でビビられても傷つくし笑顔で話してやるか。

「弓緋之？」

ニコニコ

「はうっ……な、あ、うううっ！」

「……友好的に接してやってるのになぜ唸る」

なんだ、俺のこと嫌いなのか？

「かつ……かいちょーが笑うなんて正直不気味で……」

やっぱ嫌いだろう？

「でも珍しいところ見れちゃいました」

「ん、なんか言ったか？」

「いいえ！ なにも！？ ……お仕事、手伝いますね」

手伝うって言われても……読んで判子押すか捨てるかしかなるこ
とないしなあ。

うーん……

「じゃ、俺が判子したやつファイルに纏めてくれ」

「はい」

とてて、と小走りに寄ってきて隣に座ろうとしたところで弓緋之が止まる。

どうかしたのかと思って弓緋之を見ると目が合ったから見詰め合うこと数秒……すると弓緋之はいきなりターン、生徒会室から逃げ出した。

……なんだそれ。

新手の手伝う詐欺か？

「まあ、いてもいなくても仕事量は大して変わらないしな」

精々ファイリングが丁寧になるだけだ。俺は裏表も上下も気にしないで適当に突っ込むからな。

えーっと、図書館に同人誌を……却下。

女子トイレの便器に小型CCDを……却下。

前生徒会長×現生徒会長の十八禁本を夏のコミックパライスで……どうなるのかちょっと興味あるが却下……というか書く奴が一八歳じゃない可能性が高いんだが、そこら辺はどうなんだ？ 作る側は問題なし？

しかし……最初の三枚からして既にこの学校の腐敗加減がわかるぞ。というか二枚目、お前、学校中にカメラ設置しようとするな。

目安箱……撤去するか？

「ひとつは完全に犯罪だし……ん？」

あれ、弓緋之のやつ、鞆忘れてったのか……はあ、仕方ない。あとで届けてやるかな。

てか開いてるし……

「ただいま戻りあーっ!？」
「わっ!？」

ななな、なんだよ、弓緋之かよ驚かせんなよ!
って、その仕切り板なんだ?
そこまでして俺との間に壁を作りたいのか?

「か、かいちょーが、私の鞆、あさってる……?」

「は? いやいや、お前の鞆が開きっぱだったから、」

「きよ、今日、朝練で使った体操着とかブルマとかはいてた下着と
か……見たんですか?」

「見てねえよ……」

というか机の影に隠れながら目をうるませるな。
はたから見たら俺が襲おうとしてるみたいに見えるだろ。

「じゃ、じゃあ……嗅いだ、とか……? 朝練あったから汗の香り
とか……!」

「嗅がねえ!」

というか香りとか自分で言うんじゃない。

いや、香りじゃなくて臭いにおだろとまでは言わないけど、それでも
香りって言うのは図々しすぎるだろ。なんかいい匂いなニュアンス
があるじゃねえか。

「ひゃうっ……あ、あと! きよ、今日のブラジャーは昔のでカッ
プ数ひとつ小さくて……今はDカップなんですからね!」

「お、おう……」

「あっ! 信じてませんね! いいです! 脱ぎます! 見せます
!」

弓緋之は叫ぶやいなや立ち上がり、リボンを解き、上からブラウスのボタンを外していく。

って、ちょ、待て！

神聖な生徒会室でなにやらかしてんだよって無視するな！

そして弓緋之はあっさり第三ボタンまで外して、

「た、たた谷間、ありますよね！？ 信じました！？」

「だから、最初から誰も疑ってないし……気がすんだら早くボタンを」

「て、適当に返事してますね！？ とうかどこ見てるんですか！」

いや実際に脱ぎかけの弓緋之を見るわけにもいかないから窓の外見てるんだから問題ないだろ！？

いや、マジでブラジャーまで見えるから勘弁してください……と
うかピンク色の布が見えたから……！

「む」

あからさまに目を背けたのが癪に触ったのか、弓緋之の三日月型の眉がキリリと吊り上がった。

おかしい。

俺は間違ったことは何もしないはずなんだけど……

だんっ！

「おわっ!?!」

今まで会議用の長机の向こう側にいた弓緋之が机に飛び乗り、意外にも獣のような敏捷性を発揮して俺に詰め寄った挙句、胸ぐらを

掴んだ。

おい、お前、俺に対して怯えてたじゃないか。普段から間に何か挟まないとびくびくしてるじゃないか!?

「なんで疑うんですか!」

「疑ってねえ、ってうお!??」

つい、目線を下ろすと、狭められた弓緋之の両腕によってさらに強調された谷間が俺の視界にアップで映り込んだ。

肌、白いなあ……って危ね!?

見てない、俺は見えてないぞ!

「し、信じないなら……さ、触れば信じますよね!」

「や、意味わからん」

さすがに触ってカップ数分かるほどの経験はない。

「で、でも揉まれるのはちょっと……なので、私の谷間に指を入れてください」

……それも意味が分からない。

「……弓緋之」

「はい?」

……完全に自分のこと見えてないよな。

「えーと……激写! 第一普通科生徒会書記、授業中に生徒会室で生徒会長に迫る」

「はえ? ……………ひゃう!? きゃっ!? 痛っ…………たあゝゝ」

適当なゴシップ記事の見出しを考えてみてそれを弓緋之に伝える。
それでようやく現状のおかしさに気付いた弓緋之が思い切り跳び
退き、長机から落ちた。

うわ、派手にケツから落ちたけど大丈夫か？

「おい、弓緋之っ、」

「こ、ここ来ないでください！ ヘンタイ！ かいちょーのヘン
タイ！」

「いや、おま……」

「ううううっ！」

弓緋之、唸っても全然怖くないぞ。むしろ逆効果だ。

……待てよ？

ブラウスを手で合わせて胸元を隠している弓緋之に近付こうとし
て泣き声にも聞こえる唸り声をあげられている俺……性犯罪者だヘンタイと
言われても言い逃れできない！？

弓緋之は生徒会室での定位置、つまり机の向こう側に座り込み、
おまけに鞆を盾のようにかざしてフシャーッと威嚇してくる。猫か
よ。

というか座ったまま後ずさるからスカートがまくれて下着が丸見
えだ。

「黒か……背伸びし過ぎだろ。というか上下揃えとけよな……」

「ふぎゃあ！？ かいちょー！ へんたい！ 変態かいちょー！
それにクロッチの部分が黒いだけで他はピンク色なんです！ なに
言わせんですかヘンタイ！」

「いや、変態って勝手に脱ぎだしたのは弓緋之じゃ、」

いや、思わずマジマジと見た俺も悪い……か？

「ち、違いますっ！ 普段の私はこんなこと！」
「……いやまあ、それは知ってるけど」

さすがに普段から脱ぐようなやつがいたらさっさと退学にしている。

そうじゃなくても俺はなるべく関わらないように生きるだろう。

「あう……ごめんなさい……なんか、今朝、学校に着いてからずっと妙な感じで……」

「妙……？」

昨日と今日で学校にあった変化なんて、それこそウエルミの存在くらいしか……

「えと……なんというか、心をつつかれるというか……内側が、刺激されるんです。あとは周りからも圧迫されているような……それで、生徒会室に來なきゃって思ってた……」

本当にウエルミのことを感知してるのかも……神社の娘だし強い霊感があってもおかしくはないだろう。

生徒会室に來る理由は……俺の定期的なお祓いの効果で中の空気が微妙に神社の雰囲気に近いからとか？

まあ、ウエルミもあれで結構な力の持ち主みたいだし、周りに影響与えるのも自然なこと……なのかな？

というか結局、弓緋之が脱ぎ出したのにウエルミは全く関係無いやな？

「ま、仕事するか」

「はい……ん……あれ？」

「弓緋之？」

「いや、なんでも……痛っ」

ああ……さっきケツ打ったのが今頃痛んできたのか？

弓緋之も立とうと頑張ってるけど……痛くて力が入らないみたいだな。仕方ない……どうせ目安箱の中には急ぎの要望なんてないだろうし……

「よっ、と」

「きゃっ!？」 か、かいちょー、なにするんですか!？」

「動けないんだろ？ 保健室連れてってやるから大人しくしてろ」

「だ、だからっとお、お、お姫様だっこですかぁ？ ……うう。恥ずかしすぎますよう……」

ケツ打ってるんだから他の持ち上げ方じゃ痛むだろうが。

それにまだ授業中だし誰かに見られて恥かくこともないだろう。

「そ、そういう問題じゃ!」

おわっ!？

「あ、アホ! 暴れんなって……あんまり手間かけるとケツから落とすぞ?」

「あ、う……うううっ!」

「だから唸るなって……ほら、手しっかり回せ」

「は、はい……」

きゅっと俺の首に弓緋之の腕が回される。

っっかし、こいつ軽いなあ……しかも柔らかいし暖かい。

そういうえば未咲にはお姫様だっことかしたことはないしなあ……し

てあげたいなあ……

きつと未咲のことだから鳥の羽みたいに軽いんだろうけど……一通り暴れないと大人しくならないだろうから、そこで落とさないように筋トレするか。

「か、かいちょー……」

「んあ？」

「そ、そういえば、転入生来たって本当ですか？」

「ああ、うん。情報速いな」

「いえ、まあ、その……」

なんだ？

急におとなしくなったな。

まだ一時間目だったのにもう知られてるのか……まあ、ウエルミ、目立つしな。見れば誰でも転入生だって分かるだろ。

「び、美人さんって……本当ですか？」

「ん？ まあ、そだな」

「そ、そうですか」

なぜか弓緋之がホッとした顔をしてるけど……なんだ？ 美人がくるとこいつになんの得が……

ああ、そういえば未咲がなんか言ってたな……一年だと弓緋之が一番告白されてるとかなんとか。

未咲も可愛いが高値の華すぎて告白できないんだろう。だから親しみやすい弓緋之に流れる、と。そして二年に美人が来たとなれば自分が告白される回数も減るだろうってことか。

確かにウエルミは性格も社交的だしこれから先アタック多そうだな……変な約束とりつけられたりしないように気を付けてやらないと。

「どんな人でした？」

「んー……バカで正直で……まあ人好きする性格ではあるな」

「……意外としっかり見てるんですね」

まだ一時間も一緒にいないはずなのに、なんて呟いてくる。

今度は落ち込みだしたな。情緒不安定みたいだけど……ああ、女の子の日か。黙っておこう。

同じことを未咲に言ったらやっぱり殺されかけたし。

「まあ、お前に隠しても仕方ないから言うけどウェルミのホームステイ先、うちだからな」

「へー……ええ！？」

「今度紹介してやるよ。あいつも後輩って存在を知れば少しは大人しくなるだろ」

なんとなく、自分を目標にするかもしれない存在ができると成長するものだ。俺も高二になってからは……いや、俺は相変わらずサボってるけど未咲以外には大して興味が無いんだから仕方ない。

「と、着いたけど……弓緋之、開けられるか？」

保健室の扉、引き戸だからかもしれないけどやけに重いんだよな。さすがに弓緋之を抱き上げながらじゃ開けられない。足でも開けられないし。

「え、えと……手、離したく……離せないです」

まあ、俺に抱きついてる形になるわけだし、離したら落ちるかもって考えると怖いもんなあ。

ノックして開けてもらうか。
仕方なく扉を二回蹴る。

……冴島ちゃんの機嫌がよければ開けてくれるはずだ。

……………。

……………。

機嫌悪いのか忙しいのか……博打だが、仕方ない。
忙しいだけでありますように……！

「はーなーこちゃん、あーけーてー」

「か、かいちょー！？ それ禁句で、」

「花子って言うなあ！」

弓緋之の声を遮るようにして怒号が響き引き戸が物凄い勢いで開く。

そして必要以上の力で開けられた引き戸が開ききった後、反動で再び閉じた。

……まあ、確かにそうなるよなあ。

「……っぷ」

「か、かいちょー笑っちゃダメですよ……くふ」

いや、だって、鬼の形相で出てきたのにそのまま何事もなかったように閉じるんだぜ……笑うなって方が無茶だろ。

「冴島ちゃん、開けてってば」

俺の声に今度は普通に引き戸が開かれた。

開けた張本人が見えないが幽霊ってわけではなく……

「花子って言ったら殺す。ちっちゃいって言っても殺す。花氏胤！」

貴様はいつか殺す……」

「はいはい、ベッド借りるよ」

冴島ちゃん——養護教諭・冴島花子の身長が小学生並みと言うだけだ。あまりにも小さすぎるため抱き上げている弓緋之の陰に隠れてしまっている。

もちろん成人はしているはずだが冴島ちゃんの年齢は誰も知らない。

一度、校長に聞いてみたことがあるがダラダラと滝のような汗を流すだけで何も教えてはくれなかった。一体どんな秘密が隠されているのやら。

それ以来、冴島ちゃんの年齢は動く骨格標本などと並んで学校七不思議になっている。脱落したのは段数が増える階段だとか。

「よっと」

弓緋之をなるべく丁寧にベッドに下ろす。

「あの……ありがとうございます……」

「気にすんなって。痛むか？」

「ま、まあ……でも休んでれば大丈夫だと思います」

ケツは危ないから用心するに越したことはないが……

まあ、意識もしっかりしてるし、どこか骨折した、なんてことはないだろう。

「……む？ ははーん……若いなあ」

「冴島ちゃん？」

「いや、なにも言うな。確かに保健室でってのは興奮するからな」

「や、なにか勘違いを、」

「え？ やるんだろ？ 先生も経験あるぞ？」
「「やりません！」」

というか見た目幼女の分際でやるのか言うな！ じゃなくてその身体のサイズじゃ最後までできねえだろ！ でもなくて教師がそういうこと言うんじゃない！

だいたい普通に男が女を保健室に連れてきただけでどこまで妄想してるんだよ……

マジで誰かこの人にまともな大人つてものを教えてやってくれ。

「いや、だがな？」

「あん？」

「睨むな花氏胤。そんな、弓緋之の第三ボタンまで外して、制服も乱れてる。さらにお姫様だつこだろ？ 誰でも同じことを、」

「ひゃわ！ か、かいちよーずつと見てたんですか！？」

「ああ、もう……二人とも黙っててくれ」

そーですね。そう見えますね。

でもなにもしてないから必要ない波風たてようとしなくてほしい……弓緋之も慌てる必要ないだろ。

ということで冴島ちゃん退場。

「ちょ、おま、掴み上げるな！ 殺すぞ！」

「仮にも保健室のお姉さん目指してるなら物騒なこと言うな！」

「目指してるんじゃないくて保健室のお姉さんなんだよ！ お前はもつと年上をうやま、うわあ！？」

ぽいっと……少しの間鍵閉めところ。

まったく。

敬われたいなら性格か見た目くらい大人っぽくなれっての……

「バーカ！ 花氏胤のバーカ！ ごゆっくりだバーカ！ ちゃんと前戯忘れんなよ！ 痛い思いするのは女の子なんだからな！」

前戯で……というかごゆっくりじゃねえだろ。

と、弓緋之のこと放置してた。

「か、かかかかいちよー！ ……私たち、シチャうんですか？」
「お前もかよ！？」

俺の大声にビクとした弓緋之がそのままベッドに潜りこんでしまった……いや、今のは怒鳴ったわけじゃなくて、なんというかさ○あゝず的ツツコミでだな……

「ひやう！ や、でも、かいちよーと二人きりで、しかも鍵閉められちゃいましたし……」

弓緋之が再び目元までを布団から出してこちらを窺ってくる。

「はあ……何もしないから安心しろ。鍵も締めないとまた冴島ちゃんが騒ぐだろ。弓緋之、なんか飲むか？ 奢ってやる」

鞆から財布だけ取り出す。

今月は厳しくもないし飲み物奢るくらいなら問題ないだろう。

「あれ、かいちよー、なにか落ちましたけど……って、ええ！？」
「うん？」

足元に銀色の紙が見えた。

ん、紙じゃないな……ああ、さっき投げられた、

「それ！ こ、ここコンドー……ぎよ、業界最薄！？ 紳士の嗜み

！？ ムリヤリ！？ か、かいちよー、やっぱり！？」

「あ、いや、これは……」

というかなんでそこから見える！？

……って、そういえば視力4.0とか言ってたか。

さて、どうしたものか……

「弓緋之。一応、言っておくが……誤解だ」

「かつ」

か？

「かいちよーのヘンタイー……！！！！」

……ですよねえ。

第四話（前書き）

旅行からただいまー

今回は三人とも登場く

&ほんのちよっぴり異変も起き始めます。

第四話

バカとかヘンタイとか数分間言われ続けながらも必死に弁明して誤解だということを弓緋之に分かってもらった。

これも全て変なこと言った冴島ちゃんのせいだ……

「かいちよー、戻らないんですか？」

「ん？ まあ、要望用紙は持ってきてるからここでも仕事できるしな」

「してないじゃないですか」

……今からやろうと思ってたんだよ。しかも仕事が始められなかった理由はお前じゃないか。

というか弓緋之、癖なのかもしれないが俺と話すときに顔を隠そうとするのはやめてくれ。俺が怖いみたいじゃないか。

今だってベッドの掛け布団を引っ張って目から下は全部隠してるし……というか冷夏だったとはいえ羽毛布団はさすがに暑いだろ。

「まあ、大半の要望は悪戯だしやる気がでないのも仕方ないだろ。紙だってただじゃねえんだからな……まったく」

「でも、かいちよーは一つ一つちゃんと確認してるんですから偉いですよねえ」

「仕事だからな……というか大人しく寝てたらどうだ？ 見てて面白いのでもないだろ？」

内容を読み上げてやればなかなか面白いと思うが……例えば『我が科学部には潤いが足りない。美人の女性顧問……つまり数学の峰先生が欲しい。要求が認められなければ手作りC4が貴様が便座に座った瞬間に破裂するぞ』とか『プロレス研究会が部に昇格する際

には是非、峰先生を顧問に！ 任せたぜ、ブラザー』とか……いや、さっぱり笑えなかった。お前、不安で学校で大きい方できなくなるじゃねえか。

それにしても峰先生も学校一の美人教師だけあるな……なんて素直に思わせてくれない要望だ。

美人教師の人気具合よりもうちの学校の無法地帯ぶりが気になる。詳しくは知らんけどC4って爆弾だろ？ 警察も一回うちに仕事しにこい。

それにプロ研にはブラザーどころか知り合いすらいないし……というか小さく『無視をするなら月の無い帰り道は気をつけろ』とかありがちな脅迫文書いてんじゃねえ。

前会長はどうやってこの無駄に戦闘力が高そうな生徒たちがいる学校を纏めてたんだ……？

生徒会は引退したとは言ってもまだ在学中だし……時間があつたら聞いておいた方がいいかもしれない。

「別につまらなくはないですよ？」

「は？」

「え、あ、いえ、変な意味ではなくてですね！」

また、いつものようにわたわたと慌て始める弓緋之。はっきりにない奴は苦手なんだけど不思議とこいつだとイライラしないのは何でだ？

……慣れか。

「や、えっと、なんていうか生徒会の仕事をこなしているかいちょーは楽しそうですから……」

「そうか？」

まあ、確かにツツコミどころが多すぎて退屈はしないが……スト

レスは溜まるぞ？

「この学校が好きなんだなーというのが見ててよく分かります」

「……恥ずかしいこと言うな。怪我人は大人しく寝てろ」

「いえ、それって普通は病人では……というか湿布さえ貼ればいいんですけど……」

湿布？

ああ……そういえば尻打って動けなくなったから連れてきたんだっただか。

それなら早いとこ湿布を貼ってやって授業に戻らせないと……

「俺以外の生徒会役員がサボるのは許されてないし……」

「いえ、かいちよーも授業に出ないとダメなはずですけど……」

「仕事が無くなったらなー。よし！俺が湿布貼ってやるから弓緋之は早く授業に戻れ」

「あ、はい……って、ええ！？ か、かいちよーが貼るんですか！？」

「え？」

「だ、だって、お尻……ですよ？」

そりゃ、怪我人が自分で貼るのは難しいだろうし、尻ならなおさら……尻！？

いや、違うぞ。

俺、クールになるんだ。素数を数えるんだ。一は素数じゃないから二、四、六、八……ってこれ偶数だよ！

「……かいちよー？」

「ほら、湿布……カーテン閉めて自分で貼れ」

「は、はい……ありがとうございます」

弓緋之が湿布をしつかりと受け取ったのを確認してから、ベッドの周りを囲むようにして設置されているカーテンを閉じる。

さて、残りの要望も片付けるかな。

なにになに……

「弓緋之のスリーサイズを教えろ。教えなかったら二度と校庭の土を踏めない体にしてやるぞ……?」

「かつ、かいちょー!?!? そ、そんな、いきなりなんですかつ!?!?」

またストレートな要望……というか欲望だな。

しかし、普通科には脅迫ブームでもきてるのか? 既に三人に命狙われてるぞ。

それにしてもこんなことを書いてくる奴、誰なんだよ……匿名じゃないから誰からかはわかるが……えっと、要望用紙には……

「う、上から88・54・79……ですけど」

「一年の仮面紳士より……いいセンスだ……ってスマン、弓緋之なんか言ったか?」

がたあん!

「きゃっ!?!?」

「お? 弓緋之どうした? 大丈夫か?」

「や、いえ、なんでもありません……勘違いで……で、でも聞いてなかったみたいだし……」

「?」

てか、一枚ずつ見るのはさすがに効率悪いな。適当な数並べて一気に確認するか。

「えーまずは……弓緋之の……」

「はい？」

下着の色？

はい、却下。今日は黒とピンクだけで教えてやらん。

にしても二枚連続とは……弓緋之が人気だったのは本当みたいだな。

「トイレでの……」

「はぁ……？」

無駄話を禁止にしてください？

うん、珍しくまともな要望だな……とりあえず会議行き、と。

「写真を……」

「じゃ、写真！？」

現像する暗室を作れ？

写真部のやつらか……ご丁寧に脅迫までしてきてやがる……却下。
脅迫してこなければ考えてやるのに。

次は……美術室の蛍光灯が切れているので交換して、

「ください……まあ、まともな要望だな」

「まともじゃないです！　というか私のトイレの写真をくださいって……か、か、かいちよー、それって私がその……使ってる時の写真ってことですか！？」

うお、びっくりした！？

いきなりなんだ……って、

「弓緋之？ 湿布貼れたのか？」

でも湿布貼ったからって、そんな急にベッドから立ち上がると危ないと思うけど……というか何をそんなに慌ててるのが分からない。

「え？ あ、はい……貼れましたけど……じゃなくて、さっきみたいな要望出した人にはなにかしらの注意が必要だと思うんですけど！？」

ずずいと顔を近づけてくる弓緋之に気圧されつつ何の話をしているのかを考える。

さっきみたいな要望……っていうのは脅迫付きの要望だよな。

本気ではないとは思うけど……確かにこれ以上悪ふざけをする生徒が増えても困るよな。でも相手の名前が分からない場合のほうが多いから犯人を探し出すのはちょっと大変だぞ……となると、

「やる奴はやるから諦めるしかないだろ。当人の良識に期待するしかない」

「ええ！？ だ、だって、私の……というか完全に犯罪じゃないですかあ！ そんな……や、やる人が分からないからなんて……か、かいちよーは、私が嫌な思いしても仕方ないって言うんですか……？」

え？

なんで涙目なんだ？

いや、脅迫されてるのは俺だけだし、わざわざ弓緋之が嫌な思いしなくても……俺のことを気にしてくれてるのかもしれないが、たがが冗談だしなあ。

それに本気だったとしても多少なら荒事にも対応できるだろうし……いや、写真部以外は無理そうだな。爆弾とかプロ研とか相手にできるわけがない。

絳魔師って言っても体は普通の人間なんだよ。

……いや、俺と未咲は少し違うか。でも腕力はやっぱり一般人程度だ。

「まあ、実際に問題が起きたら、」

「なにかが起きてからじゃ遅いんですよ！ そんなことが起きたら……私、学校に来れなくなっちゃいます……写真で脅迫されて体育館の裏で無理矢理……ぐすっ」

いや、仮に俺が襲われてちょっとした怪我をしたとしても弓緋之がそこまで気にすることはないぞ？

……いや、この剣幕は違うか。弓緋之は生徒会の関係者全員が巻き込まれるかもしれないって思ってるんだな……？
確かにそれなら必死になるのも頷ける。

「弓緋之、少し落ち着け」

「……はい」

「仮に一度起きたとしても、二度目は絶対に起こさせない。だからあんまり気にするな。お前のことも守ってやるし」

「かいちょ……」

俺や弓緋之が本当に襲われたら……まあ、やりようはいくらでもある。

未咲も怒ってくれるだろうし、ここら辺の悪魔も協力してくれるだろ。

そう考えると俺達に牙を向いて生き残れる奴なんて人間やめたよ
うなやつらだけみたいだな。俺が何もせずとも万事解決だ。友達は

多いにこしたことはないな。

「だから一回起きたら遅いんですよ！ デ、データとか残ってたらくらいでも……！ もお！ か、かいちよーのバカあ！ 出てってくださいいい！」

「お、お、お？ ちょ、押すなって！」

「やです！ かいちよーなんて嫌いです！ かいちよーのばか！」

……おかしい。

俺はお前たちは守ってやるってことを伝えたはずなんだけどな。

思い返してみても誤解の余地なんてないし……

弓緋之にぐいぐい押されながら考えていたら目の前で扉が開いた。
ん？ 鍵は閉めたはずだから冴島ちゃんが鍵もって戻ってきたか？
そう考えて視線を下ろして見えたのはスカートの裾。

……むむ？ この脚は見たことあるぞ。

「……未咲か？」

「兄様、どうして顔も見ずに判断できたんですか？」

そりゃあ、未咲の脚は見慣れてるからな。別に腕でもうなじでも多分わかるぞ。

というか未咲が来たってことは一時間目が終わったのか。未咲は偉いから絶対に授業はサボらないからな。未咲がいい子でお兄ちゃんは嬉しいぞ。

「まあ、そんなことはどうでもいいのですが……というより、ココ、どうしたんですか？」

「ふえ、未咲ちゃん……」

「ん、ああ、なんか急に泣き出してな……」

「……ココ、兄様を借りますね？」

「おお!？」

急に未咲に腕を掴まれて廊下に放り出された。人間の腕が耐えられないような銃の反動に耐えられる腕力で、だ。

そして弓緋之だけを取り残して扉が閉められる。

俺は俺で保健室の扉がある方とは反対側の壁に対して情熱的なキスを交わしそうになったけどなんとか踏み止まった……危なかったな。俺がドジって転んで怪我なんてしたら未咲が気に病んでしまう……昔から自分の特異な体質を嫌ってたし……

「一応聞くけど……ココに何かしたの？」

「いや思い当たることは何も……でも同じ女の子の未咲にならなにか分かるかもな」

周りに誰もいないからか未咲が家での会話と同じような碎けた口調で聞いてきた。

……男の俺には分からなくても無神経なことを言っていた可能性はある。そう考えて、できる限り状況を思い出して未咲に伝える。むむむ、改めて整理しても弓緋之が泣いた原因が分からない。

「……ふうん。じゃあ、なにか、その、え、えっちなことはしなかった？」

「いや、してな……くもないかも……」
「えっ」

少し意外そうな顔をする未咲……ごめんな未咲……お前が信じるに値するような紳士なお兄ちゃんじゃなくて……俺だってわざとじやなかったが……そんなの言い訳だよな。

まあ、弓緋之が胸を見せようとしてきたりコンドームを落としたのはやっぱり俺の責任ではないと思うが、尻に湿布貼ってやるなん

て言ったのはさすがに俺の落ち度だ。

でも兄である俺が自分の罪を認めなかったら未咲が余計に恥ずかしいと思うから正直に言わないとな……

「こ、コンドーム……」

「あ、やっぱり事故でも不味かったか？」

「う、ううん！ いざというときに備えておくのはいい心掛けだけど！ ……って妹になに言わせるの！ じゃなくて、ココの勘違いかも……」

「え？」

「とりあえず兄さんは教室に戻って授業！ 生徒会長だからって見逃さないからね！」

未咲は俺にびしいっと左手の人差し指を突きつけて保健室の中に戻っていった。

……未咲に言われたら仕方ないな。

それに、あんまりウェルミを独りにすると不安になるかもしれないし、仕事は教室に戻ってやるか。

「……あ、要望の紙、保健室の中じゃん」

まあ、未咲か弓緋之が持ってきてくれるだろう……とにかく教室に戻るか。

未咲に言われた以上、二時間目に遅れるわけにはいかないな。



「ココ、兄様がなにかしましたか？」

「ううん……ただ、写真が。うう……」

「写真？」

「かいちよー……私がトイレで盗撮されても、どうしようもないから諦めろって……」

「盗撮？」

写真とか盗撮とか……どう考えても犯罪なんだけど、いきなりなに？

というか兄さんもなんだかんだで優しいから、そんな最初から突き放すようなこと言わないと思うけど……人の機微に疎いところはあるけど、人が困ってるのに気付いたら放つとけない人だから。

まあ、そんなこと考えなくても二人の会話が噛み合わなかっただけってのは今までの経験から予想できる。

この二人、いつもどこかの歯車がずれてるから……それなのに近くにいる嫌にならないってのも珍しいけど。

ただ、問題はこういう風に勘違いが起きたのか……かな。

「ココ、そもそもの始まりを話してください」

「ぐすっ……かいちよーが、変な要望をまともだって言い出したから」

要望というのがなんのことか分からなかったけれど、きっと机の上に置いてある書類の束だと予想する。

変な要望ね……脅迫混じりだったり冗談にしか思えない内容ばかり。ちよつと文頭を読んだだけで選別できそう。

見た感じではココが泣き出すような内容は書かれてないんだけど……盗撮なんてどこにも書いてないし……

「兄様はなんて？」

「えと、私の、トイレでの写真をくださいって……」
「はい？」

……兄さんがそんなこと言うはずがないんだけど。

もちろん私にも言わないけど……私以外の女の子に興味を持つ兄さんってのも想像しにくい……かな？

いやいやいやいや！

あのシスコンを矯正しなきゃいけない私がそんなこと考えてちゃダメでしょ！ だいたい兄さんは生徒からの要望を読み上げたただけだし！

……とにかくいつも通り誤解を解かないと……ココは兄さんのシスコンを直すために必要だから。

というか、ここまで可愛い娘と二人きりになってもなにも意識しない兄さんはやっぱりおかしい。

「まあ、とりあえずその要望の紙を探すことからですかね……」

とはいえ、机の上にあるだけの紙にはココが言ったようなことが書かれているものは無い。

机の脇にあるゴミ箱の中にも何枚か却下されただろう要望が捨てられてるけど……やっぱりない。

……あれ？

「弓緋之の下着の色を教えてください」

「み、未咲ちゃん？ いきなり言葉遣いが男の子みたいに……じゃなくて、えと、今日はピンクと黒……かな？」

名前は……赤西賢太？

たしか、兄さんのクラスの一瞬イケメンに見えるチャライ人……いや、重要なのはそこじゃなくて、さっきも確か……

「写真を現像する暗室をつくれ……」

やっぱり。

それに、机の上の方には……

「美術室の蛍光灯が切れてるので交換してください……トイレでの無駄話を禁止にしてください……なるほど」

多分、兄さんは全く意識しないで文面を呟いてたのかな。

並び変えて一部分を抜き出せば弓緋之のトイレでの写真をください……

「はぁ……まったく、よくここまで器用に……」

「未咲ちゃん？ 何か分かったの？」

「ほら、これですよ」

「え？ えっと……あれ？」

4枚の紙の抜き出す部分に丸を付けて順番に渡していく。

最初是要領を得ないような顔をしていたココがだんだんと、そして確実に慌てだす。

この子、怒ったりテンパったりすると強気になるから……多分、今さら兄さんに言ったことを後悔してるんじゃないかな。

兄さんはそういうのあんまり気にしないからココも気にしなくていいと思うけど……

「み、未咲ちゃん……私、かいちょーに謝らないとお……！」

「今日、放課後生徒会あるんでしょう？ その時に謝ればいいと思います……ついでにそろそろ授業始まるけど……私の前でサボるつもりですか？」

それなら風紀委員副長としてお仕置きしなきゃいけないんだけど……？

ああ、兄さんはいいいんです。私が言っても聞かないどころか喜ぶし、お仕置きしても喜ぶから……！

……本当に、兄さんのことはどうにかしないといけないかも。



キーンコーン

……ヤバイ！

二時間目の始業チャイムを聞いて歩きを猛ダッシュに変える。

未咲が俺に対して二時間目に出てと言ったのだから……可愛い妹の期待を裏切る兄なんて兄の風上にも……いや、風下にも置いてやらん。

だから俺は走る。それはもうメロス並みに走る。

教室までは残り10メートル。残りタイムはラストの『コーン』の分だけ……！

間に合うか？

いいや……間に合わせる！

ガタァンツ！

「よっしゃあ、間に合ったあ！俺、間に合いましたよね、先生！？」

「は、はなうじ花氏クン？」

教師はぐるぐるビン底メガネをかけた……えっと、通称おさげ女史！

確か授業は丁寧で分かりやすいけど夏休みの宿題が少なかったことを教務主任に叱られたオドオド系すっぴん女子のはず……女子じゃなくて女史か。おさげ女史がいるっていうことは今は化学の授業

だな。

「というか、若干間に合わなかったような気もするけど……ならば押し切るまでよ！」

「先生！ 俺、遅れてませんよね！？」

「は、花氏クン、どうしちゃったの？ 私の記憶では、花氏クンは授業に10分くらい遅れたって気にしないような生徒だと思っていたのだけど……生徒会長職ってそんなに大変なの？」

「なんだかいきなり先生の授業を完全に受けなくなったんです！ ああ化学！ 人間の英知の結晶！ 素晴らしいじゃないですか！ そんな化学を真面目に学びたくなったのですよ！」

「そ、そうですか……まあ、チャイムの鳴り終わりと同時に教室に入ってこれたので間に合っていたと思いますよ？」

よしっ！

押し切った！

「ですが、今は生物の授業ですよ？」

「……なん、だと……！？」

俺が愕然とした声を出した瞬間、教室が爆笑に包まれる。

「いやいや、そんな笑うことないだろ……まったく、たまに授業に出れないのは生徒会の仕事のためなんだからな！」

「つまり、お前たちがそうやって笑ってられるのも、全部、俺の陰なんだぞ！」

「や、花氏って生徒会長になってからまだ二週間しか経ってないっしょ。二学期からなんだから」

「……まあ、細かいことは気にするな」

俺達が通う城南高校第一普通科では、生徒会長は前生徒会長からの指名制。だから俺が生徒会に入ったのも前会長の任期が終わった夏休み後からだ。

生徒会外から生徒会長が選ばれるのは珍しいことらしいが……指名制に例外はないらしく俺は生徒会長に仕立てられていた。嫌というわけではないが微妙に微妙な気分になるのは仕方ないと思う。

まあ、なぜか生徒会長というだけで結構なことが許されるようになったから助かってるけどな。

ただ学校運営のための仕事の一部だからって単位とるための必要出席日数を三割も減らすってのも本末転倒だろ……

「えと、花氏くん？ そろそろ席に座ってもらえないかなー……って、思うんだけど……？」

「え？ ああ、はい」

いかんいかん。

考え事は席に座ってからにしよう。

「んあ……タネ君だあ……おかえりー」

「ウェルミ……初日の、それも実質最初の授業から居眠りする気か？ ……退学になったら下手すると魔界に強制送還だぞ？」

「それは困るなー……でも、なんだか疲れちゃって……えへへ」

疲れたというような声を出していながらもウェルミの顔は幸せそうに緩んでいる。

……俺が教室から出てってからずいぶん質問攻めにされたみたいだな。楽しかった反面、疲れもした……というところだろう。

それに昨夜もなかなか寝付けなかったみたいだし、平気な顔をして実は疲れがたまっていたのかもしれない。学校が楽しみで眠れないなんて子供かよ。

「タネくーん。教科書貸して？」
「ん？」

ああ、まだ受け取ってないのか……転入手続きも結構慌ただしかったみたいだな。

「あ、ハナちゃん教科書まだなん？　じゃあ俺の見せてあげるから、」

「ううん。タネ君に見せてもらうから……でも、ありがとう」
「そっかー、残念」

おい……俺はまだ見せてやるなんて一言も……まあ、いいけどな。

「ほら、使えよ……俺は寝るから」

少し離れたウエルミの机の上に教科書を放る。

これで授業中に寝る大義名分もできたし……

「ダメだよ！」

「いや、声でかいぞ」

いきなり大声——とは言ってもギリギリ教師に聞こえてしまう程度のアウトな声だけ——を出したウエルミに教室中が注目する……おい、俺まで巻き込まれてるぞ。

そして、そんな周りからの視線に気付いたウエルミがわざわざ立ち上がって謝ってから着席、俺に恨みがましそうな目を向けてくる。いや、今のは俺のせいではなかった気がするぞ？

理不尽だ。

「じゅ、授業は真面目に受けないと……」

「とは言ってもなあ……」

正直、授業は受けなくても問題ないしな。

自分、天才ですから。

学期末試験も学年トップだったんだぜ！

かなり汚い手を使ったけどな！

「ということで俺は……ん？」

寝る、と言おうとしてウエルミを見ると俺のことを睨みながら膨れっ面。そして涙目。

え、意味が分からない。

俺に意図が通じていないことに気付いたウエルミがさらに膨れながらビシッとある一点を指差す。

そこにはちょうどウエルミと同じように教科書を持っていない男子が隣の男子と席をくっつけて二人して教科書を覗き込んでいる光景があった。

おいおい……あいつら顔近付けすぎだろ。ホモだキモーい！ とか女の子に言われちゃっても知らないぞ？

「というかウエルミ、初めて会ったときにも言ったはずだけど俺はホモじゃないからな？」

「そうじゃなくてえ……もういいよお……」

そのままウエルミが拗ねて廊下の方を向いてしまった。

喧嘩のようにも見える俺たち二人の様子を周りの生徒たちが気にしているのが分かる。

……お節介どもめ……仕方ない。

これから自分のすることに対しての照れ臭さをどうにかしようと

頭を掻きながら覚悟を決める。

「ん、タネ君、頭痒いの？ 昨夜ちゃんとお風呂入った？」

「入ったしちげえよ！ ……机、付けるぞ」

「えっ？」

「だから……俺が教科書見えないから、机」

「あっ……うん！」

一瞬でウエルミの顔が喜色満面になる。

いやそんな喜ぶなよ。犬じゃあるまいし……高校生なんだしクルにいこうぜ？ ……その双子、ニヤニヤしてるんじゃない！

本当に俺は教科書なんて必要ないんだからな……それに俺は未咲を護らなきゃいけないから他に意識を向けるわけにはいかないんだって。

ちょんちょん

ん？

「た、タネ君……ここでは生物と一緒に外国語も勉強するの……？」

「アホ、日本語だよ」

「どうしよう！ 先生の話してる内容が意味分らないよ！？」

……ウエルミ、意外と頭弱い子なんだな。いや、本人の能天気さから考えると意外でもなんでもないんだが……

それでも悪魔は古来より天文学や数学などの知識を人間に授けるものとされていた。だからこそニュートンやらアインシュタインやらといった天才たちは悪魔と関わっていたなんていう与太話が多いのだ。

悪魔にはそれぞれ天文学や植物学などの得意分野があるとはいえ、

そうではない学問が不得意ということもない。だから悪魔なのに勉強が苦手な悪魔ってのも珍しいような……しかもミドルネームを持つてる奴なんだから教養もそれなりにあるはず……

そんな俺の疑問は他ならぬウエルミによって解決された。

「私、実は末っ子で勉強できなくても許されてたから……あはは。お父さんの跡継ぎも決まってたしね」

「ほー……でも、魔法を使うのには知識も必要なんだろ？」

少し寂しそうな顔をさせてしまったことに気まずさを覚えつつもさらに一步踏み込んでみる。

ウエルミの得意魔法は氷結。確かに生物は関係無いかもしれないが、永久凍土フクティオニスという第二級称号のひとつを名乗ることが許されるだけの魔法を使うには、やはりそれなりの知識が必要なはずだ。

「それが、私って感覚だけで魔法使ってるから……第二級なんてもらえたのも、氷の精密な操作ができたからなんだ」

少し恥ずかしそうにウエルミが笑った。

「へえ……魔法も判断基準は魔術と同じなのか」
「そなの？」

魔術も魔法に倣って一定以上のレベルに達した魔術師には称号が送られる。

その魔術師のレベルを測るときに重要視されるのは機関にもよるが大抵が三項目に纏められる。

ひとつは誰もが最初に思い浮かべるであろう威力の高さ。

これはどれだけ精神力を魔力へと効率よく変換できるかが大事になってくる。もちろん純粋な霊的存在である悪魔の方が適正が高い

のは言うまでもない。

二つ目はウエルミの言う精密さ。

同じ火の玉を打ち出すという行為でも、使用者の器用さによって追尾性を持たせたりすることもできる。

そして最後に応用性だ。

ひとつの魔法、魔術でどれだけ多くのことをできるか……というところだろうか。俺が使える祓魔術自体が応用性の低い魔術に分類されるため俺自身、この辺りへの理解は薄い。

多分、魔術のもとになった魔法も判断基準は似たようなものだろう。

「にしても感覚だけで魔法使えるなんて便利な奴だな」

俺は祓魔術を覚えるために結構広範囲な知識と経験が必要だったぞ？

「やっぱ、悪魔の方が魔法の適正は高いのか？」

「……………」

「ん？」

「くー……………」

寝てるし……………」

初日の、それも実質最初の授業で寝るとか度胸ありすぎじゃないか？

普通、初日でドキドキするとか、勉強ついていけないならハラハラするとか……………」寝る以外にするべき反応が色々あるだろう。

ぽふ

……………」しかも隣の生徒の肩によっかかるとか。

「ふぁ……ねむ……」

俺も少しだけ寝ようかな……

第五話（前書き）

時間がある時に纏めて改訂しますよー

今回は妹回

第五話

ふむ……結局、昼休みまで寝てしまった。まあ、未咲は授業に出ろとしか言っていないしいかな。

ウェルミに至っては未だに寝てるし、クラスの奴らも生暖かい目でニヤニヤと俺達を見ている……逆の立場なら俺も同じような反応をするから怒りはしない。

怒りはしないが……

「どうして、未咲がいる……？」

教壇とは反対側にある扉の前で未咲が仁王立ちしていた。

その表情は怒っているような呆れているような、しかし表面的には悪臭を放つ生ゴミを見るような目で俺を見ている……お兄ちゃん的には怒っているのを表面に出してもいいからゴミ扱いはしてほしくないかな……？

「まあ、タネの浮気だー……って俺が言って、」

「「それを私達が広めといた！」」

胸を言い張って言い張る三人。

双子はいつものことだから置いといて……阿久津、なんてことをしてくれたんだ！？

「石破……幼馴染の責任は飼い主の責任だよな……？」

「え、私なの！？」

「飼い主って自覚はあるのか……拓也、揉みしだいていいぞ」

あんまりぱっとしない顔の阿久津をいじるよりも隠れファンクラ

ブ『ひなりんラブ会』がある程度には可愛い石破の方が見てて楽しい。

もちろん未咲の方が数倍可愛いけどな。個人的に漁船とイージス艦以上の戦力差があると思っている。

「よし、まかせろ……って未咲ちゃんいるのにできるわけないだろう？」

「……しまった」

よりによって未咲の目の前でセクハラほうじょ幫助をしてしまうなんて……！

未咲の目が段々と吊り上がっているような気がする……可愛いなあ。

しかたない、俺が直々に制裁を……

「くー……」

ぐ……ウエルミ、いつまで人の肩に寄りかかって寝てる気だよ……これじゃ阿久津を懲らしめられないじゃないか！

というか未咲が見てる前でこういうことをだなあ……！

「……さすが普通科史上、最も素行が悪い生徒会長と噂される兄様のクラスですね。居眠り、セクハラ、暴力は日常茶飯事ですか」

「ぐうっ」

冷たい視線と共に放たれた未咲の言葉がダメージを伴って俺に突き刺さる。グサリ！　こうかはばつぐんだ！

……でも居眠りは置いとくにしてもセクハラと暴力が日常茶飯事ってどこの不良学校のクラスだよ。今のところ未咲の言葉には全面的に同意するしかないけど……いや、未咲の言うことが間違ってい

たとしても指摘する俺じゃないけどな。

未咲が白と言えば黒も白だ。パンダの模様も逆さまにしてみせよう。

「そんなことは聞いてません。とにかく兄様にはなにかしらの罰を……といっても気にする人じゃありませんし……」

今度は呆れたような声とため息。

そうそう。俺は気にしないぞー！

どんなに辛いことだって未咲の言いつけなら喜んでやるし、未咲以外からの命令だったら聞かないし。

「……ということで明後日まで兄様とは口をきいてあげません」

「なっ!？」

なん……だと……？

未咲が既に吊り上がっていた切れ長の目をさらに吊り上げて俺を見つめる……もとい睨み付ける。

「わかりましたね？ 仮に会話してしまった場合は……一回につき半日ずつ延長するというペナルティを課します」

「そ、そんなバカな……」

「おお、未咲ちゃ……未咲様が本気だ!」

「さ、様？」

お調子者の賢太の声に今度は混乱し始める未咲。声まで裏返らせて……可愛いなあ。

まあ、いきなり未咲様なんて呼ばれて平然と受け入れられるほど俺の妹は不遜ではない。

しかし賢太が律儀に守ってるのはいいんだけど……なんだろう、俺

が気安くちゃん付けするなって言ったのを踏まえてもなんかムカつく。

でも未咲がいるから制裁を加えることもできないし……！

「ふああ……ん……っ！」

お、ウエルミ、やっと起きたか！　これでようやく動ける！

「んう？　……！？　タネ君ごめん、ごめんね！」

俺の肩に寄りかかっていたことに気付いたウエルミが慌てて離れた。

うわ、久しぶりに重石がなくなると随分と肩が軽く感じるな。

「って、あれ？　未咲ちゃんもいる……？　……なにに、ひなりん！　どういう状況？」

寝起きはいい方なのか、ウエルミは寝ぼけ眼を一擦り二擦りした後はすぐに周りの野次馬の輪に加わり出した。

それに石破がニヤニヤと嫌な笑いを隠そうともしないで一言。

「んー……未咲ちゃんがウエルミちゃんに嫉妬？」

「私に？」

「違います！　……というかそういうことを言うと、」

なんだと！？

なるほどなるほど……なんだ、そういうことなら素直に言ってくれば良いものを……

「未咲、家に帰ったら肩枕どころか腕だって膝だって貸してやるか

らな！ ウエルミに嫉妬する必要ないぞ？ ん？」

「な、な、なにを！？ 調子に乗らないでくださいっ！」

「未咲ちゃん、顔真っ赤だよ？」

ウエルミの指摘で必要以上に意識してしまったのか、ただでさえ赤かった頬がさらに鮮やかに染まる。

「なってません！ と、とにかく兄さんはこれから私に話しかけちゃダメだからね！」

あー……行っちゃった……ま、まあ、冗談だよな！

今まで近所でも評判の仲良し兄妹だったんだ。こんなことで仲が悪くなんてことはない。ありえない。そう、未咲の対外的なポーズだよな！

未咲は仲がよすぎることを気にしてるみたいだし……そうに違いない。多分。

「「あーあー……花氏嫌われちゃったねえ」」

「そ、そんなわけない！ とうか草野！ お前らが広めなければ……」

「だって真昼が……」

「いや、深夜だよ！」

「とうかどっちがどっちだよ！」

「「こっちが真昼！」」

二人が互いに指差しあって罪を擦り付け……って両方真昼って混乱させようとしてるな！？

よし、こうなったら……

「ウエルミ、どっちが真昼だ？」

「……今、こっちがちょっと動揺した!」

「よし、じゃ動揺してない方にお仕置きだ」

「ちょ、私真昼だよ!」

「ううん、そっちが深夜であってるよ」

二人ともお互いに自分が真昼だと主張しているけどよく分からないし割とどうでもいい。

真昼のせいにしてしているということは真犯人は深夜なんだろう。この際その予想が間違っても構わない。それこそ両方とも責めたっていい気がする。

「というかそうだな。この際両方とも疑わしきは罰するってことで……」

「「あーっ! 花氏! ウェルミっちの歓迎パーティーやろうよ!」

うん、そうしよう!」

「は? ちょ、そんな急に……」

双子が俺の声を二倍の音量で押し流しながら突然な提案をした。しかし俺には生徒会のミーティングがだな……って、クラスの連中も双子の提案にのり始めてるし……

でも、歓迎パーティーか。

俺も特に反対はしないけど……当のウェルミ本人がどう考えてるかだよな。

まあ、十中八九……

「大賛成! みんなありがとー!」

「「よっしゃ、きまりい!」」

「こうなると思ってたけどな……となると、どこでやるかが重要か」

俺は用事があるし門限が厳しいやつだっているだろうから学校か

ら離れすぎても困る。でも一クラス分の生徒を丸々受け入れられる
キャパシティが必要となると都合のいい店はなかなかない……

だいたいコイツら全員が店に入るだけの金を持っているとは思え
ない。

でも気温も大分秋めいてきたし夜になると寒くて公園とかで騒ぐ
のは無理だろ……焚き火なんかしたら確実に怒られるだろうしな……

「タネんちでいいだろ？ リビング広いし未咲ちゃんもいるし」

「賢太、余計なこと言うな！ だいたい話してあげないって言われ
たばっかなのに許可とれるかよ……くそう」

今日を入れて二日間も未咲と話せないなんて……！

俺は何を楽しみに明日を生きればいいんだ！？

「な、泣くなよ……」

泣いてない！

……しかし、本当にどうしたもんかな。みんなは既にやる気にな
ってるし……こうやって考えてみると何人もの生徒を受け入れられ
る学校ってすげえ広いんだな……

「とはいっても放課後に教室でやるわけにはいかないしなあ……さ
すがに未咲が怒るだろうし」

「……いや、案外大丈夫かもよ？ ……草野姉妹、未咲ちゃんの様
子を探ってきたさい。特に本当に花氏と話す気がないのかどうか！」
「「よく分からんけど了解！」」

ちょ、渡辺？

まさか本当に学校でやる気か？

確かに教室でできるなら助かるけど……

「会費は一人五百円ね。ウエルミさん抜いて三十九人だから……うわ、半端。花氏は千円出しなさい。それで二万円。これだけあれば飾りもお菓子も買えるわよね？」

「ちょ、なんで俺が！？ だいたい部活動以外での教室利用は原則禁止だろ？ 未咲に怒られるのは俺、」

「仲直りの策も考えてあげるから。それに口きいてもらえないんだから怒られないでしょ？」

なるほど一理ある……………ん？

「それって俺が怒られるのが後回しになるだけじゃないか？」

「バレたか……………って冗談。そんな怖い顔しないでよ。原則禁止なだけで生徒会と風紀と担任に許可をもらえば平気なの。校則にはないから花氏が知らなくても仕方ないけどね。歓迎会なんだから担任の方は平気だろうし、あんた生徒会長だし」

ほー……………さすが我が組の諸葛亮。堅実そうな手を思い付いたな。俺はてつきり深夜まで息を潜めてそれから騒ぐんだとばかり思ってたぞ。

まあ、その辺りは了解した。

それで……………

「……………誰が風紀委員に言いにくんだ？」

「花氏しかいないじゃん。放課後のミーティングって風紀も一緒なんでしょ？」

「……………どうなっても知らないからな」

「信用してるわ」

むう……………渡辺め。相変わらず強引なやつだな。

これで未咲と話せない時間が延長されたら末代まで呪ってやるかな。

あ、でも、これって業務連絡なんだし……逆に考えれば未咲と話せるチャンスかもしれない！

よっし、あとは全て俺に任せろ！

今日は学校でウエルミの歓迎会だ！

「阿久津！ お前は買い出し行ってこい！」

「一人で……か？」

「もちろん」

爽やかさを意識して笑いかけてやったら阿久津は泣いた。

忘れかけてたがお前のせいで未咲が怒ったんだから当然の罰だ。

異論は認めん。

……どうせ石破と宇都美が仕方ないなーって顔で付き合ってるだろうこともわかってるし。

「「たっだいまー！ ミサキチ超機嫌悪そうだったよ！」」

「ミサキチ言うな」

「痛っ、なんで真昼だけ!？」

とりあえず双子の片割れにチョップ。さっきの仕返しだ。

にしてもこのクラスの奴らは未咲に対して馴れ馴れしすぎるだろ……まあ、ほぼ毎日のように未咲が顔を見せに来るんだから当たり前かもしれないけどな。

そうかそうか。

一瞬でもお兄ちゃんの顔を見ていたい。未咲は可愛いなあ。

「なるほどね……よし、花氏、未咲ちゃんが怒ってる理由はウエルミさんに嫉妬しているのか花氏と話せなくなったことなのか……ど

「うちだと思う？」

「うーん……俺と話せなくなったことかな」

「そっか。私はそんな妹にベツタリな兄に対してだと思うけど」

「そ、そんなことは……………」

「ないよな？」

「というか仁沢のどっちでもないじゃないか！」

「……いや、でも確かに未咲からしてみれば俺はなんてダメ兄貴なのだろう！」

「そうか、未咲は俺自身に怒ってたんだな？」

「それすら気付かないで俺は……ふっ、我ながら頭悪すぎるぜ。」

「……勝手にいい顔してるけど、仲直りは手伝った方がいいの？
それとも自分でできる？」

「是非に！」

「そ、なら未咲ちゃんとは話さないこと。二人とも何だかんだで仲いいし、きつと未咲ちゃんの方が先に折れるわ。教室利用手続きも私が……誰かにやらせるわ」

「そこは私がやるわくらい言えよ。」

「我が組の諸葛亮は頭以外を動かす気は全くないらしい。」

「しかし……」

「それだけ？」

「それだけ。さ、授業始まるし、花氏も今日くらいは真面目にしてみれば？」

「未咲ちゃんに見直してもらえるかもよ、と言い残して渡辺は自分の席に戻った。」

「……真面目にねえ。」

なーんか、真面目に授業受ける気にならないんだよなあ。教科書に書いてあることなんて口で説明されなくても分かるんだから、もっと生徒が興味持ちそうなことを教師は説明するべきだ。

「それ、完全に勉強できない奴の言い訳だよな」

前の席に座る賢太が背もたれに顎を乗せるようにして俺をからかう。

このなんちゃってイケメンめ……爽やかに笑ってるんじゃないか。

「こう見えて俺は成績いい方だぞ？」

「一夜漬けだろ？」

うっさい。

一夜漬けとか簡単に言うが教師にゴマすって範囲教えてもらったり色々コツがあるんだからな？

場合によっては職員室で問題を盗み見たりな。

「それは完全に不正だ」

「そんな細かいこと気にするな」

ようは点がとればいいんだよ。

ほら、チャイムも鳴るし前を向け。

「……………って、昼飯食えてねえし……寝るか」

「くく……………すび……………」

「ウェルミ、お前もまだ寝るのか…………？」

まあ、さっきと違って机に突っ伏してるだけかもしれませんが。

……寝てる奴らが固まってるが目立つんだよなあ……

「未咲が見直してくれる……ねえ」



「えーと、皆、集まってるか？ 皆つつても七人だが」

会議室の無駄にでかい机を中心に座っているのはたったの七人。生徒会から三人と風紀委員から四人だ。その内三人はもちろん俺と未咲と弓緋之。あとは知らん。だって全員集まるのって初めてだし。

「あの、その前にかいちょー、今朝はすいませんでした……」

「ん？ ……よく分からんけど俺が覚えてないんだから気にするな」

というか俺が弓緋之に謝ることはあったかもしれないけど謝られる覚えはないぞ。

で、どうして弓緋之は半泣きで未咲に抱き付く。そして未咲も抱き締め返すんだ？

うぬう……俺も未咲と抱き合いたい！ ……てまも渡辺は未咲と話さない方が、それどころか興味を向けることすらしない方がいいって言われたしな。

諸葛亮……もとい渡辺はあれで頼れる奴だし信じてみようと思う。

「……………」

……未咲が俺のことを見てる気がするけど無視だ無視！

未咲、ごめん！

「で、今日の議題ってなんだ？ 弓緋之、書類かなにか貰ってるか

？」

「いえ……」

「それなら僕が説明しましょう。会長の代わりに聞いてきました」

少しなよつちい体格のメガネ男子がスツと立ち上がった。

うむ……君は生徒会副会長だな。

メガネがキランと西日を反射したからキラン君だ。

「キラン君。頼んだ」

「はい！……今日の議題、というより目的はこれから一年間共に協力していくことになる生徒会と風紀委員との顔合わせということです」

キラン君、名前にツッコミ入れないままだな……真面目なガリベ
ン君かと思いきや結構ノリがいい少年なのかもしれない。

さすが俺の生徒会の役員だ。一癖も二癖もある奴ばかりだな……
良いことか悪いことかはこの際気にしないことにしよう。

「それと、時間が余れば来月の体育祭のことも……と言っていました
たが協力が必要なこともあまり無く、なにより面倒そうなのでやら
なくても問題ないでしょう。少なくとも僕はやりたくないです」

「うん。俺もキラン君の後回しプラン・β作戦に賛成するが……風紀委員の面
々はどうか？ とりあえず委員長から順に頼む」

「………風紀委員長の一二三四郎ひふみ しろうだ。生徒会長が議題を知らな
かったり、副会長がよりによって会議を面倒だと言ったり……思うに
君たちはふざけているのかな？」

………ふざけているのは委員長の名前だと思うぞ。なあ弓緋之？
一二三四っていくらなんでも狙いすぎだろ……

(えー!? あ の、ふふっ……わ、私に振らないでくださいよ!)

……いや、すまん。

確かにふざけているのは委員長の両親だよな。よりによって四郎はないだろう。さすがに委員長がかわいそ……待てよ? もしかして委員長の兄弟は全員数字の名前なのか……?

親父かお袋か知らないが名前をつけた方、もはや呆れを通り越して尊敬するぞ。

「それで、委員長はどうしたいんだ?」

「当然! 先生方から期待されている以上のことをこなしたい! つまり体育祭の打ち合わせもできるところまで進めようじゃないか」
「えー」

気炎を上げる委員長に向かってキラン君がすかさずブーイング。もしかしたら見た目がガリベン君だけで中身はむしろ俺に近いのかもしれない。

「あれ体育祭って、かいちよ、」

「弓緋之、静かに。えっと、次はみさ……風紀委員の副長はどうだ?」

「!?」

あえて未咲の名前は呼ばない。これも諸葛亮から賜った作戦だ。俺が未咲を役職名で呼んだことに対して弓緋之が過剰に驚いたけどそれも華麗にスルーだ。

そういえば生徒会のナンバーツが普通に副会長なのに対し、風紀委員では副長というのは昔からの決まりらしい。変な感じはするけど大した混乱はないからという理由で変えていないんだとか。

生徒会も副長にしようかな。かっこいいし。いや、むしろ俺がス

クールマスターで二番手はサブマスターでどうだろう？

……うん、強そうだ。

「……副長？」

「へ？ あ、私ですね……すみません。私は……めんどくさいからという理由からではなくて急ぐ必要はないと思います」

「……なぜだね？」

イライラしているのを隠そうともせず一二三四郎君が未咲を睨む。
おいこらお前、どうでもいいが未咲をいじめたら殴る蹴るなどの
暴行を加えるぞ？

「体育祭で必要なのは各種目の定員の設定や点数、さらに一種目当たりにかかる時間を試算することのはずですが、この会議中にできるとは思えません」

未咲の言う通りだな。

点数も時間も種目当たりの定員を決めないとどうにもできない。
そしてそれが決まらないとタイムスケジュールも予算も出せない、
ということだ。

と、そこで弓緋之が俺にそつと耳打ちしてきた。未咲の前でこう
いうのは困るけど今回は特例だ。

（かいちよー、定員の設定も時間の試算も点数の目安もこの前やって
ませんでしたか？）

（うん、やったぞ？）

（……なら、なんで言わないんですか？）

いや、だってなあ？

不真面目の代名詞だと思われてる俺が既に終わらせました、なん

と言っても納得されないだろうし、それなら次回に生徒会で計算してみまして言った方がましだろ。なによりそれなら生徒会全員が認められるしな。

そんな感じのことを弓緋之に伝えたら感動されてしまった。というか一部は弓緋之にやらせてたんだが気付かなかったのか？

（それは理解しましたけど……なんで未咲ちゃんに冷たくしてるんですか？）

（いや、罰として会話しちゃいけないだけだ）

（未咲ちゃんが、ですか？）

（いや、俺がに決まってるだろ？）

なんで逆だと勘違いするのかがわからん。

俺は未咲に罰を与えられるほどいいお兄ちゃんじゃないからな。

未咲が間違ったこととしても俺がフォローすればいい話だし、実際、これまで一度も未咲を叱ったことがない……まあ、叱るべきこともあんまり無いからだけだな。

……というか会議中ですら俺との間に鞆を挟むのかお前は……さすがにそろそろ傷つくぞ？

「じゃあ書記君は？」

「じ、自分はみ、未咲と同じ考えっす！」

……………野郎。

（未咲を呼び捨てだど？ 調子に乗りやがって……）

（ひいひい！？ か、かいちょー、佐本君も未咲ちゃんが好きなだけで悪気は、）

なるほど、そうかそうか。

彼は佐本君というのか。まあ、未咲に惚れるとは分かっている奴だと言わざるを得ないな。

そういうことなら仕方ないな。

「書記君、何組？」

「さ、三組です！」

一年三組の佐本だな……覚えてぞ。

（よし殺そう）

（だめですー！）

俺より未咲のことを好きでもないくせに未咲のこと好きとか言ってるんじゃないって話だ。

俺より未咲のことを大事にできるやつにしか未咲は渡さないからな。

（それって不可能に近いですよね）

（なら未咲はずっと俺の妹だ）

（あんまりベタベタしてると嫌われちゃいますよー？）

そ、そんなことは……ないはずだ！

兄妹の絆は恋人よりも固いはずだ！

「で、えっと最後の……君は？」

最後に影の薄い子に水を向ける。

どうやら未咲と弓緋之以外は俺が声をかけるまで気付かなかったように驚いていた。

「えっと……私は……皆が納得できて楽しめるのが……一番だと思います……」

ようするに好きにしろってことだな。

「そーだな。ただ声小さいから今度からはっきりしゃべれよ。じゃ、体育祭のことは話し合わずにこれで解散？」

「待ちたまえ！ 確かに僕の言ったできるところまで終わらせるというのは少数だったが、君たちの面倒だからやりたくないというのは副長の意見と同数だろう！」

む……言われてみれば確かにそうだな。
そうなる……

「そっちの子は全員が納得できる意見って言うていたわけだから……メンドイ二人、頑張る二人で……弓緋之おめでとう、お前が最後の一人だ」

「ええ！？」

「弓緋之君といったね？ 君は真面目で優秀な生徒と聞いている。もちろんこの場合はやるのが正しいと思ってくれるだろう？」

「か、かいちょー……」

「好きに答えろ」

とは言ってもウエルミの歓迎会があるしなあ……渡辺のやつも上手く教室確保できたみたいだし行かないわけにもいかないだろう。夜の学校で騒ぐのとか少し楽しみだしな。

「わ、私はこのまま帰っても問題ないんじゃないかなーって思います……えへ」

困ったように笑いながら弓緋之はそう言った。
これで面倒票が一票多いから俺らの案で決定！

「よし、帰るぞ！」

「会長、鞆は僕が持ちましょう！」

む、キラン君はなかなか気がきくじゃないか。

「な、なんということだ……優秀な弓緋之君までこの男に影響されているだなんて……！」

「いやそういうんじゃないですけど……そもそも既に終わってますし」

風紀委員側には聞こえないような声で弓緋之が呟く。

もし、弓緋之の呟きが委員長に聞こえていたら仕事は俺たちよりできると考えていそうな彼のプライドを砕いていたかもしれない。

悪いことは言わないから競うなら仕事より勉強にしてくれ。勉強ならいつでも負けてやるから。

「あ、そーだ、委員長」

「なんだ……敗者である僕を嘲笑うのか？」

「いや、意味分からんから。そうじゃなくて、教室貸し出し許可してくれてありがとな」

「……正当な理由があれば却下するわけがないだろう」

いや、歓迎会だからかなりの騒ぎになると思うぞ……まあ、これで歓迎会も開けるわけだしあとは教室に戻るだけだな。

……そうだ、未咲に晩飯いらないうって伝えないとな……しかし会話は厳禁となると……

「あー……ちなみにこれは独り言だけど、今日の晩飯は外で食って帰るかなー」

「！ 兄さ………ココ、今日うちに晩御飯食べに来ませんか？」

「うーん……今日はお父さんと食べることになってるから………ごめんね？」

「そっか、別に気にしないでいいです。自分の分だけ作るのが面倒なだけですから」

そっか………今日は未咲一人で晩飯か。

う、うーむ………すごく心配だ。知らない人についてっちゃ駄目だぞ？ 戸締まりもしっかりな？ 早く寝るんだぞ？ 寂しいからって泣かないでくれ、というか寂しかったら呼んでくれよ？

………今日は早めに帰ろうかな。

あ、ウェルミが主賓だから俺も最後まで残らないとダメだ。あいっには早く家までの道を覚えてもらわないと。

「あのっ！」

俺が会議室を後にしようと扉を開いた瞬間、未咲が声をあげた。

ま、まさか俺に反応させてペナルティを発生させようっていう罠か！？

「えと、その、独り言ですが………今日は兄様の好きなシチューを作ろうかなと思ってます………いつもの癖でちょっと多目に作りすぎちゃうかもしれません」

………可愛いやつめ。

「パーティーと違って話すのに夢中で結構食いっぱぐれるんだよなあ。家に食うもん残ってたら助かるかもな。もちろん独り言だ」

「かいちよー、大きな独り言ですね？」

弓緋以外の事情を知らない奴らが変なものを見るような目で俺たちを見てるけど気にしない。

未咲がちよっとでも喜んでいれば他はどうだっていいからな。

第六話

「さてと……」

会議も終わったことだし早くウエルミの歓迎パーティに行かないと。未咲がシチューを多めに作ってくれるとは言っても食いつぶぐれていい理由にはならない。

……というのも料理研に頼んでごちそうを用意させるなんて話を耳にしたからなんだけど……いや、未咲の料理以上にうまい料理なんて存在するわけがないけど、未咲にいくつか料理を持ち帰ってやりたいからな。

未咲は一人だと少ししか食べないから俺たちが家に帰ってからもう一回夕飯になりそうだし食べる量は加減しておこう。

そんな寂しがり屋な未咲も可愛い……こんなことを言うと未咲は寂しがってませんって強がって、それがまた超可愛いから……それが俺的幸せスパイラル。

さて、それじゃあパーティーを楽しむとするかな。

「よし、待たせたな！」

「「いや、誰も待ってないし」」

入って早々双子の草野真昼まひると深夜みよに否定された。

「……そう言うなよ草野。頑張って働いてきたんだぞ？」

……うん、働いたな。

最後に一二三四郎君に次から休んでいいと認められるくらいには頑張ってたはずだ。

「……そのまま生徒会室で仕事してればいいのに」

「なに……？ よーし、そこまで言うなら勝負だ！」

「よーし受けた！ ……なにで？」

「炭酸一気飲み」

「「パス！」」

ですよねー。

「じゃ俺の勝ちってことでお前らは一発芸かましてこい」

「「任された！」」

……負けでいいのかよ？

双子で周りから注目されることに慣れているからか、一発芸をやること自体好きらしい

なんだかんだで毎回クラスを盛り上げてくれている。

……一方で盛り上げはするけど自分で台無しにする奴もいるけどな。

「出席番号三番！ 阿久津亮改めMr. アツック、マジックやります！」

……アクツツじゃないのはアツックの方が本物とカタカナの形が似ているかららしい。

マジックショーの前座なんかをやったこともあるらしカードマジックに始まり、シルクハットから鳩を出したりと腕前はなかなかなんだけど……

「これで最後、馬を出します！」

問題はこれだ。

既にいくつかプロ級のマジックを見せて会場を盛り上げたんだからそれで満足すればいいのに……蛇足としか言い様のないネタをやるんだよな。

「はあっ！ あれ、鳩が出ちゃった……ほっ！ 今度は花が！」

こんな感じに失敗しているで、細かくマジックを織り混ぜるのは構わない。むしろ個人的にはこういうのも好きだし、クラスも盛り上がっている……ただ、

「ちょっと、机の中を探してみる！」

そう言って阿久津は教卓の影にしゃがみこみ……

「ヒヒイン！！！」

「「「「……………」」」」」

自らが馬の覆面を被って立ち上がった。

会場の空気は一気に氷点下だ。

……初めてやったときはその突拍子のない方向転換と馬のアホ面に皆が笑ったけど……四回も五回も繰り返されれば流石に飽きる。

「あ、あれ？ ひひーん……？」

教室の空気が冷めきっていることを肌で感じとったのか二度目の嘶きは控えめだった。
いなか

いつものことなんだから阿久津もそろそろ学んでもいい頃だと思うんだけど……

「「おらー！ どけどけー！」」

そんな感じに完全にすべって立ち尽くしていた阿久津が双子によって教室から蹴り出された。

うわーなんて悲鳴をあげながらも少し助かったような顔をしている……まあ、蹴り出されることで少しは笑いをとれていたからな。ある意味ここまでがワンセットなのかもしれない。

「今回はー！」

「なんとー！」

「「新ネタ仕入れてきたよー！」」

阿久津のマジックなど無かったかのように堂々と振る舞う草野。

……新ネタか。

毎度ながら会場を盛り上げられるだけのネタをよく思い付くよな。未だにこの二人がすべったところを見たことないぞ。

「「まずは……」」

さて、皆が双子に注目している間に料理の方をタッパーに詰めてしまおう……双子の新ネタも気になるが未咲の喜ぶ顔の方が見たいし。

「新ネタいつきまーす！」

「せーの……」

「「幽体離脱く！」」

「「「「おー！」」」」」

ただ、家に帰っても未咲との会話を禁止されているわけだから未咲に喜んでもらう方法を考えとかないとな……

「そしてそして！」

「幽体離脱、かゝらゝのゝ？」

「……多重影分身の術だってばよ！」

「」「」「ぎゃー！？」」「」「」

なかなか盛り上がってるな……今なら北京ダックもタラバも大トロも気付かれずに確保できそうだ。

右見て……よし。

左見て……よし。

一応上下も……よし。

「タラバ、ゲットだ……ぜ？」

俺がタラバに向けて伸ばした箸が弾かれた。

……どういことだ……？

まあいいか。とりあえず北京ダックを、

ばしん！

「なんだと！？　じゃあ大トロ、」

箸を伸ばした瞬間、視界の端に高速の何かが見えた。

甘いな……二度も見れば十分だ！

「と見せかけて北京ダックうー！！」

「あっ！」

「ふふふ、北京ダック、ゲットだぜ！」

ふ……つい熱くなってしまったな。

俺の左手のタッパーには北京ダックが十枚分。もちろん薄餅……
バオピン

あの肉を包む餃子の皮みたいな奴、それに野菜とソースも確保している。

……未咲への手土産その一完成だな。
次は、

「大トロ……と見せかけたフェイント！　というのは嘘でやっぱり大トロゲットお！」

「ああ！？　タネ君ズルい！」

うん。

大トロも普段は手が出せないから未咲も喜んでくれるはずだな。
さーて次は……

「タラバ……がない！？」

おかしい、さっきまでは少なくとも十杯分の脚があつたはずなのに今は皿すらない……

「うーん、うまうま……タネ君、タラバ蟹って美味しいんだねー。
私初めて食べたよ」

もちろん犯人はさっきから俺の妨害をしている………ウエルミ。

「とうかうエルミ、主役のお前が一発芸見てやらないと可哀想だろ……」

「え……っと、だってタネ君いないとつまないし、こっちの方が楽しそうだったし……」

「冷たいなー」

あいつらだってウエルミに楽しんでもらおうと……いや、勝手に

楽しんでるような気もするな。

「まあ、楽しければいいか」

「そだよ♪ あ、そーだ！ タネ君、これ美味しかったよ！」

「ほー……未咲に持って帰ってやろう」

「そ、そうじゃなくて……鈍いなあ……こうなったら……」

何をぼそぼそ呟いてるんだ……

まあ、俺もぼちぼち食べてはいるけど家に帰ってからのシチュ―が本番だからな……あんまり食べすぎると後で後悔することになる。

「タネ君……あ、あーん！」

「ん？ ウエルミ、なにやってるんだ？」

気付けばウエルミが箸で器用にバッテラをつまみ、俺の方にさしだしていた。

というか、そろそろこの料理についてツツコミを入れてもいいよな？

……絶対に二万円で用意できる料理のラインナップじゃねえぞ！

「……タネ君のぼか」

「いてっ」

なぜかウエルミに脛を蹴られた。

……俺なにもしてないよな？

「いやー！ お二人さんあつついねえー！」

「おわっ！？ いきなり何すんだコラ」

後ろからバチーンと俺の背中を叩いた輩を睨む……ってやっぱり

賢太か。

あんまり調子に乗ると……そのなんちゃってイケメンフェイス歪ませるぞ？

「たねえ！ お前って奴はあ……うえ……未咲様というものがありながらあ……うつぷ」

「え、なに？ お前酔ってんの？」

「おーう……酔いは酔いでも十六人の双子にぐるぐる回されてだなあ……おえ」

いや、完全に酒で酔ってるだろこいつ。

双子が八セットなんてうるさくてやってられないぞ。

てか賢太の中では完全に未咲は様付けで呼ぶことで固定されたのか？

……まあ、未咲ちゃんよりかは遥かにマシだけど。

「だいたいお前はあ……女みたいな顔しやがってー。俺の初恋をかえほげっ！」

「気色悪いこと言うな！ あれはお互いに黒歴史としてそっと封印しただろ！」

って、しまった！

ついとはいえ酔っぱらいにボディীবローなんて……！

「いい、拳持ってるじゃねえか……」

「吐くなよ？ 絶対に吐くなよ！？」

「……それって、前、フリ……か？」

前フリじゃねー！

「うっ……!」

「と、トイレ行ってこーい!」

「あ、アイルビーバック……!」

そのまま賢太は口を押さえながら出ていった……ふー、危ないところだった。

楽しい歓迎会が俺と賢太のせいであわや惨劇の夜だ。

賢太の位置的にあいつが吐き戻した先は未咲への手土産だったから助かった……俺も、賢太も。

あのまま吐いてたら賢太のイケメンもどきがイケメンになるまで殴るところだった……要するに永遠にだ。

「えっ!? そ、それ、本当……?」

ん、今のはウエルミ?

なんだ、俺と賢太が話してた間に石破に連れていかれてたのか。

悪戯っぽい表情の石破に比べてウエルミの顔には少しの怯えが見てとれるが……

「なんの話してるんだ?」

「た、タネ君! 私の座ってる席が呪われてるって本当なの!？」

「ああ、あれか」

……確かにあの席はずっと訳ありということで使用を自粛していたみたいだが呪われているかというとなんな気配はない。察知力が俺より優れている未咲ですら何も感じないんだから呪われているということはないはずだ。

ただ、座った生徒が貧血を起こしたりしたことは実際に何度かある。そんなこんなで証拠もないから俺と未咲は偶然とか思い込みとか、とりあえず悪魔の仕業ではないだろうという結論を出した。

「まあ、そういう意味では曰く付きではあるよなあ」

もしかしたら祓魔師どころか悪魔にすら判別できない力が働いているのかもな……

「それこそ本当の幽霊とか……さ」

「そ、そそ、そういうえば、あの椅子に座ると眠気が……！」

「そりゃただのサボり癖だろ……というかこの話、石破は前に調べてたよな？」

前にも誰か倒れて、その時に石破がいろいろ走り回っていたよう
な……

「あれってまだ一年生の頃だったのによく覚えてんねー。ほら、確かデブリの『隣の山田君の神隠し』の上映が始まった頃だよ」

「あー……ののしってそんな長い題名だったけか？　まあ、あの頃は未咲がいなかったからな」

ののし——もとい隣の山田君の神隠しは世界中から大絶賛された日本を代表するアニメ映画だ。個人的に山崎駿はそろそろ人間国宝になるんじゃないかと思ってる。

「未咲ちゃん関係無いじゃん」

石破が半目でツツコミを入れてきた。

そんなことはないぞ……未咲がいない間は特に学校で集中することがなかったし、周りのことも自然に頭に入ってきてたしな。

それでも普段は未咲の下校時間に合わせて迎えに行っていたけど……授業が終わる前から。

普通に考えてみれば俺もかなり問題児だな。

「そっか……それでひなりんどうだったの？　なにか分かったの？」
「もちろん！　と言いたところだけど空振りでねー。結局、その椅子に座ってたのは三代か四代前の生徒会役員の女の子……あれ、風紀委員だっけな？　それで、ちょうど今くらいとの時期……つまり体育祭の直前の打ち合わせの帰りに暴走していた乗用車に撥ねられたらしいってことしか、ね」

……やっぱり未咲と調べた以上のことは分からなかったか。俺があの席の隣だって知った未咲が慌てて調べ出したんだよな。

あの時の心配そうな未咲の顔……可愛かったなあ。

しかも最初から危険がなかったことは分かっていたことを未咲に伝えたら顔を真っ赤にして……未咲はいつまでたっても素直でいい妹だ。

「じゃ、じゃあその女の子が自分の席を奪われないように椅子に座った人たちを次々と呪い殺して……？」

「ウエルミちゃん……それ以上は言っちゃダメだよ？」

「ひええ！」

……いや、誰も死んでないから。

からかう石破もだが額面通りに信じるウエルミもウエルミだよな……いや、幽霊を信じる信じないって話じゃなくて。

「ま、その席に関して言えばデタラメ、」

——ぎゃー——！！！！！！

「!?!」

「あー……ったく。亮の奴、騒いだら怒られること分かってんのかな」

今のは賢太と……阿久津の声か？

石破が阿久津の声を聞き間違えるとも思えないし、二人が廊下で合流してもおかしくない……ただ、ふざけてたにしては真に迫っていたような……

調べた方がいいかもしれないな……いや、どうも俺たち三人以外に悲鳴に気付いた奴もいないみたいだし少し様子を見よう。

「亮も赤西君もなに騒いでるんだか……」

「ひなりんと阿久津くんは幼馴染なんだっけ？」

「腐れ縁だけどねー。昔から拓也も入れた三人で遊んでてさー」

「ふーん……どっちが好きなの？ ほらほら、おねーさんに聞かせてよ♪」

「うえー！？ いや、私は別にそんな……」

石破とウエルミはすぐにガールズトークに移ってしまった。

……嫌な予感がするのは俺だけか？

まあ、直前に呪いがどうこう話してたから過敏になってるだけかもしれないな。

とりあえずこのフォアグラソテーを食ってみようか。

「どうせ、」

がたあん！

「「出たー！ー！ー！……！」」

「っ！？ ……………げほっげほっ！」

「花氏！ 幽霊！ 幽霊でたよー！！」

ちょ、阿久津、おま、落ちつ、

「胤！ マジだ！ 信じられねえと思うが、ありゃあ酔っぱらいの幻覚なんかじゃ決してない！ あ、こら、お前聞いてんのか？ おい！」

賢太、お前もいい加減、

「た、タネ君！ ゆ、幽霊が出るなんて平気なのっ！？」
「って、いちいち俺を揺さぶるなあ！」

俺に掴みかかっていた三人の輪から強引に抜け出す……まずい、
フォアグラがカムバックしそうだ。

……それにしても幽霊ねえ。

「タネ君！ 早くお祓いしてよ！ タネ君祓もがあ！」

「ウエルミ、お祓いは生徒会長じゃなくて坊さんとかの仕事だぞ？
酔ってんのか？」

「むぐむぐむぐ！」

まったく……学校で祓魔師とか言わないでくれ。頭がおかしい奴
だと思われるじゃないか。よくて厨二病扱いだ。

日本では「うっ……腕が……静まれ……！」なんてことを言うキ
ャラだと思われたら社会的な意味で死亡確定なんだぞ。

「ウエルミ、分かったか？」

「……花氏、ハナちゃんの顔真っ青だぞ？」

「………きゆう」

「げっ！」

口塞いだつもりが鼻も塞いでたのか……ウエルミ、悪かった。お前の犠牲は無駄にしない！俺はお前の屍を越えていくぞ！

……何て冗談は置いといて。

「幽霊はないとしても不審者の可能性もあるしなあ。ちょっと見回りいってくるかな」

「お、おい胤！ そんな女みたいに細い体じゃ危ないぞ……！」

「じゃあ賢太も来い」

「だが断る！」

……なら最初からなにも言うなよな。それにひよろいとか言うな。幽霊相手に腕力なんて関係無いんだよ！

あれ……そもそも不審者だって思ったのは俺か。不審者相手に祓魔術は関係無いな……

「ということで賢太も来い」

「いやだって！」

どうしても行きたくないのかウエルミの影に隠れる賢太。なんちやってイケメンここに極まれり、だな。

そこまで怖がることないだろ。

「あの、それなら私がタネ君と行こっか……？」

「いや、そりゃだめだ」

「はう……」

がつくりと項垂れるウエルミ。初めて会った頃のお姉さん風な雰囲気はどこに消えた。

というか一応は主賓のウエルミが見回りとかおかしいだろ。

「よし、賢太よく聞け？　あ、ウエルミは石破と他行つてろ」

「な、なんだよ……？」

「さっきまで石破たちと話してたんだが、あの呪いの席には可愛い女の子が座ってたらしい」

「そ、それが？」

可愛いというフレーズに反応したのか賢太が顔をあげた。

「本当に幽霊なら、そのすげー可愛い女の子に会えるんだぞ？」

「ほ、本当に不審者だったら……」

「そして季節外れだけど学校に忍び込むような奴は変質者に違いない。校舎は暖かいし露出狂かもな。ただで裸が見れるなら……いや、もしかしたらその先も……」

「よし、出発！　胤！　俺について来い！」

単純すぎだろ……だいたい俺は変質者が女だとは言っていないぞ？
最初に女の子の話をしておけば騙せる……というか勝手に勘違いしないかとは思ったけど……賢太、お前はいくらなんでもバカすぎる。

「胤、なにやってんだよー！　生AVが逃げるだろ！」

「発想が飛躍しすぎだ……」

小学生でも——いや、小学生はAVなんて知らないだろうけど——
—そんな勘違いはしないぞ。

とにかく本当に超常関係だったときのために準備はするか。

俺にとっては幽霊なんか当たり前な存在だから超常ってのも変な感じするけどな。

「つと……これでいいか」

なるべく重くてしつかりしたものと思っていたが残念ながらモンキーレンチしか机に入っていなかった。

なんでそんなものが机に入っているのかといえば……なんでだ？

「お、おい胤……お前って女顔のくせに嗜虐嗜好あったのか……？
女の子には優しくしてあげないといけないんだぞ？」

「……はあ。お前ももう少し常識的な会話ができるようになればモテるのにな」

この流れなら普通に考えて不審者対策だろ。
どういう思考を展開したらこれでS Mプレイ的な発想に繋がるんだよ……

「ほら、行くぞ賢太」

「お、おう」

廊下に出れば既に大分暗い。

本格的に秋めいてきて日が短いというのもあるだろうけど、一番の原因は昨今の病的な省エネブームだろう。廊下の非常灯以外に光を放つものは何もない。

割り箸を使わない、ビニール袋を使わない……そんなことで温暖化抑制に尽力していると思ってるんだから日本人ってのもなかなかお気楽だよな。

日本のエコってのが一番原始的だって笑われているのを知ってるのか？

「原子力にも問題あるから推すわけでもないけど火力で主電力を賄うってのもな」

ちょうど俺が考えていたことと似たようなことを賢太が呟いた。
案外本当に同じことを考えていたのかもしれない。

「発電所か？」

「この前テレビで見ただけど日本では地熱発電が効率的なんだとよ。
物を燃やさないからクリーンで温暖化にもいいんだとき」

「ほー、そーい、メタンハイドなんちゃってのはどうなったんだ
ろうな？」

何年か前にお昼の番組で見かけたぞ。

「あー、日本の地下にエネルギーが埋まってるって騒いでたやつか。
どうなってるかは知らんけど」

こうすると家庭の二酸化炭素排出量が何割減ります！　なんて番
組はあるくせに火力発電主体の現状をどうにかしようって動きは全
くないんだよな。

「あべく石油王に脅されてるから火力発電をやめられないなんて都
市伝説も出来上がるくらいだしな」

「あれって嘘なのか？」

「いや、知らんけど」

確かに石油製品がこれだけ溢れてるんだから火力発電が止まった
としても日本はそれなりの石油消費国……石油王が脅しをかけるほ
どでもないかもな。車だつて多いし。

「発電形態が変わればエコもそこまで騒がれなくなって、結果この
廊下も明るくなるってのに……」

「……あー、結局そこに繋がるのか」

「な、胤、お前今俺のことバカにしてるだろ？」

いや別に普段からは想像できない真面目な話を始めたからどうしたのかと思えば、いかにも幽霊が出そうな廊下の暗さをエコのせいにして気を紛らせようとしたのかなんてことは考えてないぞ？

平たく言えばビビってやがるなんて思っていないな。全然思っていない。

「あ、てめっ！ やっぱバカにしてんだろ！」

「してないって。ただ怖いなら教室戻ってもいいぞ？」

「あの……」

とにかく賢太をからかう。

ある意味こんなのも日常茶飯事だ。たいていは途中で未咲に怒られてやめてしまうが。

未咲、心配しなくてもお兄ちゃんはこのな似非イケメンにやられるほど弱っちくないぞ！

「このっ……やんのかてめえ！」

「おー、いいぞ？ このランチで緩んだボルト閉め直してやんよ」

「あの……！」

「うっせえ邪魔すんな！」

「うわ、女の子にまで声を荒げるとか賢太くん鬼畜ー！」

俺たちを止めようとした女生徒に怒鳴った賢太を笑う。賢太も咄嗟だったらしく恥ずかしさからか顔が真っ青だ。

……真っ青？

「お、おおお、女の子があー！？」

「いや、大袈裟すぎだろ」

……それにさっきからいたよな？

「で、出たー！ー!?」

「おい賢太!? ……まったく失礼な」

予想以上にチキンだった悪友にため息を漏らしてから俺たちのすぐ側にいた女生徒を見た。

誰かと思えば一時間ほど前に見たばっかの顔だ。

確か風紀委員の……

「えーと……」

「……桐野舞子です。お友達、どうしたのでしょうか？」

「あー、幽霊の話してたからな。桐野さんに驚いたんだろう」

俺は随分前から気付いていたけど賢太はそうでもなかったみたいだ。桐野さんは小柄だし何かの陰にでもなっていたのかもな。

「あら……私の存在感が薄いせいで怖い思いをさせてしまったのですね……」

ズーンと沈んだような声で桐野さんが呟く。おい賢太、女の子には優しくしてあげないといけないんじゃないのか？

……あとでからかうネタができたな。

「それはそうとこんな時間まで何してるんだ？ 会議が終わってから随分時間が経ってるし部活もとっくに終わってる時間だぞ？」

「えっ！ えっ！ ……その、えっと……」

「はーん……生徒会長には言えないようなことだな？ 恋人でも

待ってたんだな？」

もう人も少ないのに学校にいるってことはもしかしてうちのクラスの誰かか！？

あのクラスには誰一人として恋人がいる男はいないと思っていたが……

「まあ、心配すんな。俺は生徒会長らしからぬ生徒会長って評判だからな」

別に不純異性交遊云々で告げ口したりはしない。そもそも禁止する校則もないし、ウェルミが俺たちの家に同居してることを認めていることからわかる通り、普通科自体が結構柔軟な教育方針だしな。

他の科は知らん。

「えとそうではなくて、友達を探しているんです」

「ん？ 友達？」

「はい……」

む、少し赤面？

なるほど、友達以上恋人未満ってあれだな。それなら俺の無粋な手出しは無用。早々に退散するでしょう。

「ま、あんまり遅くならないうちに帰るんだぞ。じゃ、またな」

「はい。おやすみなさい」

うーん、丁寧な子だなあ……こういうのを大和撫子っていうのか？
こんな子に好かれる男ってどういうタイプなんだろうな。案外、不良だったりして。

でも未咲はともかくウエルミと弓緋之にももう少しお淑やかにな
ってほしいよな。特別な関係でもないのにいきなり抱きついてきた
りってのはよくない。もちろん未咲はいつでもウエルカムだけどな。
……と、そうだ。

どうせさっきの賢太の怯えようからして賢太と阿久津は桐野さん
を幽霊だと思って逃げてきたんだろうけど……一応不審者が校内に
いるかもしれないってことは伝えておくか。

「桐野さん……あれ？」

振り返ったら桐野さんの影もなくなっていた。

なんだ、もう行っちゃったのか。

今から追いかけて桐野さんのラブコメを邪魔したくないし教室に
戻って賢太を笑いものにしてやろう。

第七話

「はぁ……ごちそうさまでした」

……一人での夕食は味気ない。

美味しく感じられないから実際に食べている量も少ないかもしれない……

いつもは兄さんが、最近になってからはウエルミさんも一緒だからうるさいと感じるくらいだったけれど今はその騒々しさが恋しいような気がする。

………ううん、そんな気がするだけ！

ウエルミさんはともかくあんな妹のことしか見てない人なんていてもいなくても同じ……というより私に実害があるかもしれない！

「なんて、ね……バカみたい」

別に兄さんが私のことを大事にするのは私を女として見ているからじゃない。そんなことは何年も前から知っている。

そして私も兄さんを男性として意識したりなんかしてない……でも、家族としての兄さんは優しいしカッコよく思えるときもあるから……尊敬はしてる。細身なのが少し頼りなく感じられるけど本当はそんなこともない。

だから自慢の兄、くらいは言っておいてもいいのかもしれない。

うん、私と兄さんはそういう意味でお互いに好き合ってる……本当に。

幼い頃は周りから流石に異常だと思われて距離を置いて育てられたことがあるくらいにはベタベタしてたかも。

もちろん血も繋がってるんだから恋愛感情なんかあるわけないけどね。兄さんが私を大切に思ってくれているから私にとっても兄さ

んが大切な存在になっているってだけで、当然それは逆のことも言える。

「それに……」

……兄さんがあなのは私のせい。

兄さんは忘れてしまっているけど、私と兄さんの違いがはっきり現れた八年前の”あの日”に私が言ってしまった一言が今でも兄さんを縛っている。そのせいで兄さんはいまだに誰かと恋愛関係を築いたこともないし、そもそもそういうものに興味を示さない。

ううん、兄さんがそうならないように私が仕向けている……兄さんを守るために。

この前のウェルミとの約束だってその一環だし、普段から母さんと父さんが家にいないのもそう。もし兄さんが矛盾に気付いたら苦しむことになってしまうから……

「本当は、私が我慢できればいいんだけど……」

むしろ、そうするべきなのは理解してるつもり。それでも、あの一言こそが私の本心だから……それを翻すのは嫌だし、なにより……怖い。

あの言葉をなかったことにしてしまったら今の日常が壊れてしまう可能性もあるから……だから、兄さんがウェルミを押し倒しているように見えた時は心臓が止まるかと思った。

……私はズルいのかもしれない。

兄さんに妹離れしなさいと言っているくせに、本当にそれを邪魔しているのは私……兄離れできない私。

……ココにも謝るべきかもね。

「我ながら本当にダメだな……」

七歳の誕生日に兄さんがプレゼントしてくれた一抱えもあるぬいぐるみ——モッピーキャットを抱きしめてソファに横になる。

商品名の通り、モップの先みたいな毛に包まれた猫はフワフワもこもことしていて抱き心地がいい。

あの時、兄さんはこの子と私が似てるなんて言ってたけど……美人だと言われるくらいの容姿だってことは分かっているけど私はこんなに可愛くはないし、こんなに純真そうな瞳もしていないと思う。

「……家でぬいぐるみを抱きしめてるなんて、佐本君が見たら幻滅しちゃうかもね」

学校での私は冷たく見えるみたいだから……

にゃー、なんて鳴き真似をしながら人形劇よろしくモッピーキャットを動かしてみる。僕はモッピーキャットのダンディ！……なんてね。

「ふふ……どの顔でダンディなんて言ってるのよ、えいっ！」

もさもさのモップな毛の隙間から僅かに見えるおでこのハートマークを指でつつく。

……佐本君が私に気があるのも知っているけど気付かないフリをしてる。別に彼のことは好きでもなんでもないけど告白されてもいないのに好きじゃないと伝えるのも変な気がするし……なにより無駄に注目を集めるのは嫌い。それに、兄さんに心配かけたくない。

昔、私にしつこく交際を迫ってくる人がいたけど兄さんが撃退してくれて……それから兄さんが私の送迎をしてくれたり気を配るようになった。去年の兄さんの出席率が低い理由は私のため。

……そういう色々に大して申し訳ないと思いつつ、それでも兄さんに頼りきりな私はやっぱりズルい。

「でも……やっぱり付き合うなら兄さん以上の人じゃないとね」

これをココに言ったら変な目をされた後に笑われたけど、男の人としても私に頼られたいんだと思うから……それならやっぱり兄さん以上に魅力があって頼りがいのある人じゃないとダメだと思う。ただでさえ私は兄さんに寄りかかりっぱなしだから。

でも……もしそんな人がいるなら早く私の前に現れてほしいな。

「そうなれば……これ以上兄さんを縛ることもなくなるし……」

ココやウエルミさんが兄さんにアタックするのも笑って見ていられるようになるかもしれない。

ウエルミさんは本気なのかまだ分からないけど……少なくともココは兄さんを……うーん、でも前に泊まりに行ったときは兄さんがいないのに本気で否定してたし、もしかしたらココもココで気持ちに気付いてないのかもしれない。

何で生徒会役員に立候補したのって聞いても本心から首をひねられちゃったし。

でも、それならそれで……矛盾するけどまだ本気になってほしくないかも。

「もう少し、兄さんに甘えてたいってのも妹としては当然あるわけ……」

外では絶対にこんなこと言えないけど、やっぱりもうしばらくは私の兄さんでいてほしい……私もなかなか学ばない駄目人間だなあ。

まあ、一人になると兄さんのことばかり考えちゃう時点で私も兄さんと同じなのかもね。

プルルルル

兄さん……かな？

いや、会話禁止っていうのを気にしてるだろうからそれはないよね。

「はい、もしもし……」

やっぱり違う人。

……兄さん、律儀に守るつもりなのかな？

「はい……いえ、母は出張で海外に。え、兄さんですか？」

……母の不在を知って兄さんに、ということは祓魔師関係なのかもしれない。

母さんは実力も認められていて一流扱いだから、その母さんに頼むような仕事が祓魔師としてまだ新人の兄さんに回されるなんてことはないはずだけど……

でも、最下級だとしても兄さんは母さんの息子だから……兄さんも同じくらいの才能を持ってると思ったなら代わりに頼むということもあるのかも。

それでも兄さんを過大評価している可能性もあるからこういう世界は難しい。

私は……祓魔師ですらないから戦うこと以外で役に立てないけど。

「え……！？」

ドクン、と血流が激しくなった気がする。

あり得ないと分かっているけど聞き間違いであることを願ってつい問い返してしまった。

「……天使、ですか……？」

……当然、その単語を私が聞き間違えるはずもない。それだけで心臓が握り潰されているかと錯覚してしまうほどの圧迫感。

半分、悪い夢を見ているような心地で受け答えをし、受話器をおいた。

「どうしよう……早く兄さんに伝えないと……！」



時刻は午後九時。

遠いところから通学してる生徒もいるし……終電とかも考えるとそろそろ解散したほうがいいだろうな。

家が遠い奴だけ早く帰ればいいってのも一理あるが……なんとなく不公平な気がするから全員が同じ時間に解散する方が後腐れもないだろう。自分が帰ったあとに面白いことがあったりするのはいしな。

「胤、俺達……阿久津たちと渡辺あたりで二次会行くけどハナちゃんとか来ないか？　というかハナちゃん来ないか？」

「え、えっと……」

「阿久津たちはわかるけど渡辺まで！？　……組み合わせには興味があるがパス。未咲が家で待ってるからな。お前らも早く帰れよ？」

いかにも俺はおまけというように誘い方だ。そんなついで扱いされて行くはずが……ということ、ちょっと興味深そうにしていたウエルミが変なことを言い出さないうちに断った。ウエルミより未咲の方が優先順位は高いからな。別行動をするにしてもウエルミ

がまだ学校から家までの道を覚えてないし。

それにしても阿久津・石破・宇都美・健太に渡辺か……何が起きるのか全く想像つかない……十中八九めんどくさいことになるだろうこと以外はな。

とにかく事件起こしたりすることだけは勘弁な。俺が生徒会長になって間もないのに仲のいいクラスメイトの非行なんかがバレたらやめさせられかねない。やめさせられなくても怖い風紀委員長に嫌味を言われそうだ。

「ま、そういうことでじゃあな」

「おう。またなー。送り狼になるなよ？」

「俺の家に行くんだし襲っても“送り”狼ではないだろ」

「そ、それって結局襲うの……？ でもタネ君なら……」

誰が襲うか！

………いや、逢った初日から未遂はあったけど……あの場合の被害者は俺だよな？

正直途中からの記憶がぼっかり欠落しているのが気になるが思い出そうとすると頭が痛くなるから……ただ、未咲にお兄ちゃんと呼ばれたことだけは魂に刻み込まれてるから問題はなにもない。

「ふー！ 楽しかったね！」

「まあ、楽しさだけを求めるなら六組入って正解だったな」

「へえ、やっぱり六組が一番楽しいクラスなんだ」

「……今年はそれとなく一組から六組までが学力順だからな」

大きな隔たりはないが、それでも比べてみるとクラスの数字がより小さいクラスの方が平均点が高い。

一組と比べて六組の平均点は大体十点くらいの差がある。もちろん低い方に。

……全く同じ授業を受けているんだから生徒の学力自体に差があるのは明白だ。

「ええ！？ わ、私そんなおつむ弱い子じゃ、」

「結局初日から授業を丸々寝て過ごしたやつが言っていることじゃない」

「いや、だから椅子に座ると眠くなるんだってばー！」

「……授業が終わった瞬間に目が覚めるくせに椅子に責任転嫁するな」

何が恐ろしいって終業ベルが鳴る前に授業が終わったり、逆に伸びたりすることもあるのにウエルミは完全に授業終わりに合わせて目を覚ます。

そこまでいくともう逆に仕方ないなと思ってしまいうくらいだ。

教師陣も引越しその他諸々で疲れているんだろうとか気を遣って起こさないし。

「好きに眠っていられるのも来週くらいまでだぞ」

「ホントなのにく。あ、ほら、あの椅子は呪われてるから仕方ないんじゃない！？」

「そりゃ都合のいい呪いだ。だいたい呪いで眠らされてるやつがそんなに可愛らしい寝顔なわけがないだろうが」

「可愛らしっ！？ って、女の子の寝顔見るのは反則だよ！」

ウエルミが飛び付いてきて俺の肩をがくがく揺する。

……褒めてやったのにどうして怒られないといけないんだ。

というか反則も何もウエルミがこっち向いて寝るのがいけないんじゃないのか？ あれだ。例えるならカンニングするなよーといったつつ黒板に答えを書いていく教師みたいな……そんな奴はいないけど。

「タネ君、携帯鳴ってるよ？ ……あ、彼女だなあ？」
「いないし」

にやにや笑うウエルミを手で追い払う。まったく、彼女なんかいたらウエルミを家に泊めたりしないだろうっての。それに俺には未咲がいる。

あれ？ そういえば歓迎会の前にサイレントモードにしたよな？ ……ということは未咲か。未咲からだけは音が鳴るように設定してるからな。電源を切らない限りは音で必ず気付けるように備えているんだ。

「もしもし？ ……あ」

これってもしかして未咲の悪戯ハニートラップじゃないのか！？
会話したから罰則追加♪ なんて…いや、うん。未咲はそこま
で悪戯っ子じゃないよな。

むしろ未咲のハニートラップになら喜んで引っかかりにいくから
たまには悪戯を仕掛けてほしい。

「未咲？」

というか電話に出たはいいけど何も聞こえない……もしかして何
かがあって助けを呼ぼうとしたけど電話が繋がったところで力尽き
たとか！？

いや、もしかしたら強盗に襲われてて電話をかけたけど犯人グル
ープに気付かれたとかか！？

くそっ、どうすればいいんだ！？

……少し、冷静になろう。興奮していたら助けられるものも助け
られなくなる。

まず、電話の向こうから物音は聞こえない。だから未咲が乱暴されているということはないはずだ。暴力にせよ性的なことにせよものの音を消すことはできない未咲に性的な暴力だと!?

「よし、薄汚い強盗ども。^{ドブネズミ}耳の穴かっぽじってよく聞けよ?

もしお前らが未咲に触れようものなら手先足先の関節をひとつずつ鋸で切り落としてお前ら自身に食わせてやるから覚悟しろよ?」

『兄さん、心配してくれるのは嬉しいけどそれは少し過激すぎじゃない……?』

強盗犯に向けて放ったメッセージなのに電話の向こうからは未咲の応えがあった。しかし向こうからはかすかに未咲の吐息が聞こえる。電話越しに聞こえる程息を荒くする行為なんて……

「未咲!?! 大丈夫なのか!?! 何があった!?! ちゃんと服は着てるか!?! 無理矢理何かをされたりしてないよな?!」

『に、兄さんの想像の中で私は何をされたの……? いや、えっと、兄さん、良く聞いてね?』

「あ、ああ……」

も、もしかして強盗とかそういうのは全部勘違いか?

でもその上で未咲が深刻そうな態度で俺に……いや、待て。電話十性的な行為の可能性十重要な報告^{ねどられ}NT^{ねどられ}R!?!

いや、俺と未咲は兄妹だから厳密には違うが……まさか行為の最中に俺に電話をかけるとかそういうプレイを強要されているんじゃない……ということはない!

「佐本、お前は俺を怒らせたぞ……? 関節を一つずつなんて生ぬるい。毛根ひとつひとつを熱したかぎ針でえぐり取って、」

『だから兄さんの中で私はどうなってるの!?! ……というか強盗

も佐本君もいないよ。それで、えっと……余計なことは考えないでいいからね?』

「……分かった」

強盗も佐本君もいないなら安心だ。

佐本君は俺の中でぶっ〇したい後輩ナンバーワンに堂々と座っているからな。

電話の向こうでは未咲が深呼吸を一つ……ああ、これを俺は荒い吐息だと勘違いしたんだな。

『えと……こ、校則違反の罰なんだから学校の外ではそれって全く関係ないはずだから別に私と会話しても罰則の上乗せとかそういうのはないからというか家で兄妹二人きりなのに会話が無いとかこれまで以上に近所さんに変な目で見られちゃうからお兄ちゃんは気にしないでいいんだからね!』

「お、おう……本当かつ!？」

というか未咲、大分子供っぽくなってるから落ち着きなさい。

いや……お兄ちゃんとしてはこれからお兄ちゃんと呼んでほしいけどな?

『そ、そんなに嬉しい……?』

「ああ嬉しいな! パーティで出た豪華な料理とか持って帰ってやるからいい子にして待ってるんだぞ! あと戸締りはしっかりと、知らない人は家に入れちゃだめだし電話でだって会話しちゃだめだからな!」

『あ、そうだ、本題は別に……』

「え?」

お、お兄ちゃんと会話したくて電話かけてきたんじゃないのか!

？　　そ、そんな……お兄ちゃんショックだぞ！
……いや、というか結構真面目な話みたいだ。
これだけ長いこと……といってもしっかりとした記憶があるのは
六年前くらいからだから普通よりは短いけど、それでも仲の良い兄
妹をやっていたら自然と相手の雰囲気は分かる。
俺と未咲なら……たった一度の呼吸だけで相手の気持ちはなんと
なく理解できる。

「未咲、怖い夢でも見たか？」

『違う……』

「母さんに何かあったとか？」

『それも、平気……』

「じゃあ、」

どうしてそんなに不安そうに……いや、怯えているんだ？

『天使が――』

「え？」

ドサッ

「あ、ちよつと待て、なんか変な音が………ウエルミ!？」

音の方向を振り返るとウエルミがうつ伏せに倒れていた。

息は荒いが意識は無い……受け身も満足にとれなかったのか手には軽い擦り傷ができている。

「おいおい……なんで血が出てるんだよ……?」

本来、ただの物質との接触では怪我をしない悪魔が転んだだけで

血を流すというのは弱っている証拠……それは祓魔師が相手の体力を見分ける一つの指標だ。

弱ることで体を構成している霊体が希薄になり、その内側に在る設計図とでも言うべきアストラル体が表出し、傷ついてしまうのだとか……なんてことを冷静に考えてる場合じゃない！

確かに未咲からの電話がかかってきてから急におとなしくなったし……いや、それも今はいい。

とにかく、どうしてウエルミはここまで弱ってる！？

『に、兄さんウエルミさんがどうかしたの！？』

「知らん。急に倒れた……ずいぶん弱ってるみたいだ！」

『うそ……もう、なの？』

……未咲はなにか知っているみたいだけど悠長に聞いている暇はない。

とにかくウエルミを早く家に運んでやらないと……

「未咲！ 一旦切るぞ！ 話は家についてからだ！」

『に、兄さ——』

未咲の返事を待たずに切る。

今は急いだ方がいい。アストラル体が露出するほどの消耗だと最悪の場合ウエルミが消滅するかもしれない。

厳密には肉体を持たない悪魔は物質界ともいべきこの世界で体調を崩すとその影響が顕著に表れる。大気の第五元素^{エーテル}の濃度が薄いためアストラル体を護る^{マテリアライズ}霊体の修復が困難だからだ。

せめてウエルミが物質化さえしていれば……いや、そもそも霊体が弱ること自体が稀なんだ。わざわざ不便な肉体を纏おうと考えるわけがないか。

「とにかく専門家に連絡を……」

どう頑張ったって人間が悪魔のことを完全に理解することはできない。

それなら、悪魔に診てもらえばいい話だ。

ウェルミを背負いあげてから、切ったばかりの携帯を片手で操作する。

今まで一度も使ったことのない短縮ナンバーを入力、通話ボタンを押す。

三度の味気ないコール音の後、待ち望んだ人物が電話に出た。

『やあ、胤君……この番号から連絡してくるってことは緊急のお困りごとかな?』

「至急……家に来てくれ」

電話の向こうから低い男声が応える。

声の持ち主は優れた医療技術を持っていたとされる悪魔ブエルの子孫を自称するラナト・ブエル・エナクルだ。こちら側の世界には珍しい悪魔の医者。

ブエルというのが貴族としてミドルネームなのか優れた医療魔法の使い手ということを示す称号なのかは定かではないが、腕は確かだ。

人間用のクリニックも経営しているため、世間的に見たら普通じゃない我が家の主治医でもある。特にお袋の怪我は魔法が原因だったりするから事情を知る悪魔の医者というのは都合がいい。

『君が急かすってことは……未咲ちゃんが体調を崩したのかい?』

「いや、居候の悪魔が倒れた。転んだ拍子にか分からないけど血も流してる……これってアストラル体が露出しかけてるってことなんだよな?」

『直接診断しないとわからないけど……それは確かに急を要するかも……分かった。急いでいくよ』

「頼む……」

ラナトは親父の友人でもあるため両親が留守にしているときは実質的に俺と未咲の保護者になってもらっている。

そういう付き合いがあったおかげで家の位置を説明しなくてよかったのは、時間に余裕がない局面では不幸中の幸いだったかもしれない。

「ウエルミ、しっかりしろよ……!」

背中のウエルミに声をかけるが当然返事はない。

さっきまで元気だったのにどうしていきなり……いや、原因の究明はラナトに任せよう。俺はウエルミに負担をかけないようにしつつ家まで急げばいい。

「なんでこういうときに限ってタクシーいないんだよ……!」

ウエルミも心配だが未咲までなにかに怯えてるってのに……嫌な予感ともどかしさを振り払うように足に力を込めて走る。今は急ぐことしかできない。

第八話

「はぁ、はぁ……着いた……」

家の外壁に手をついて少し息を整える。

さすがに徒歩で二十分以上かかる距離を一人抱えて全力疾走するのはツライ。

いくら悪魔が霊体だといっても重さはあるからな……現象としては幽霊に取り憑かれると体が重く感じるのと同じだ。ただし同じ霊体でも霞のような幽霊と違って悪魔のそれは密度が大きいから余計に重く感じる。

ラナトは……電話してから時間も経っていないしもう少し時間がかかるかもな。

玄関の扉を開けて座り込む。脚がつりそうだ。

「兄さん走ってきたの!？」

「未咲……ウエルミをリビングまで運んでくれ」

「う、うん……よいしょ」

気絶しているウエルミを片手で抱き上げて未咲がリビングへと去っていく。

……本当に、あの細腕のどこにそんな力があるのか不思議だ。

戻ってきた未咲にラナトのことを聞いたがやはりまだ来ていないらしい。

「……あ、来たみたい」

がちゃり

「やあ、おまたせ。悪魔の診察なんて久しぶりだから準備に手間取ってしまったよ」

「リビングだ。早く診てやってくれ」

未咲の呟きに少し遅れたタイミングでラナトが扉を開いて現れた。くたびれた白衣に伸び放題でボサボサの黒髪……それでもチョイワル風のオーラがあるのは悪魔ゆえか。長身なのも相まって海外の人気俳優だと言われても信じられる。

「それじゃ、失礼するよ」

普段はここに来るときはダルそうな態度でいるラナトも今回は仕事だからか真面目な顔でさっさと革靴を脱いで家に上がり込んでくる。

ラナトも親父と契約しているため、わざわざ俺たちが扉を開けなくても家に入ってこれる。契約とは言っても普段の二人はただの酒飲み仲間だが。

ラナトがリビングへと歩いていったのを後目に俺は玄関に寝転がった。

しばらくはここで休もう……ウエルミも女だし診察中に同席しない方がいいだろう。ラナトがなにかしようとしても未咲が止めるだろうし……なにより今日は疲れた……

「まさか歓迎会をいきなり開くことになるとは思わなかったからな……」

朝から生徒会の仕事をしていた上に、ウエルミが隣で堂々と眠るもんだから俺が寝るわけにもいかず……基本的に睡眠不足の俺には随分辛かった。風紀委員との会議も実がなかった割になかなか疲れたしな。

……それにしても、ウエルミはどうして弱っていたんだ？

まだこちら側の世界に来てから一週間も経っていないんだから、元いた世界との違いが体調に影響を与えたりしてるのかもしれないけど……そんな素振りは全然なかったよな。

肉体を持たない悪魔だから不調は精神的なものが原因だろうし、それなら無理をしていれば思い当たる節があってもおかしくないはずなんだが……

可能性としてはこちらに来る前からなにかしらの異常を抱えていたか、それとも特大の魔法を連続して使ったか……

「いや、それならウエルミ自身が気がつくはずか……」

ウエルミが自覚症状のようなものを感じていたとして……それならウエルミのことをサポートすることは契約内容に含まれているんだし、なにか一言くらいは言ってくれただろう。

それをしなかったということはウエルミにとっても想定外のことだった……？

「……ん？」

今日、ウエルミにおかしな素振りがなかったかを考えていたら視界に影が差した。

見上げてみればラナトがウエルミを見ている間に着替えたのか黒い……ニーハイソックスっていうのか？ それにつつまれた未咲の足があった。カモシカみたいな足だな……

もう少し視界を上にあげるとスカート……ではなくホットパンツが目に入った。

うんうん。

スカート姿を外の男なんかに見せるわけがないからな。

「に、兄さん、ラナトさんが来てって……」

少しじっと見すぎたのか未咲が頬を染めて一歩分離れた。
もちろん下心はない……単純に愛でただけだ。未咲もそれが
分かってるから怒らないんだと思いたい。

「ウエルミはどうだった？」

床に手をついて立ち上がりつつラナトがどういう診断をしたのか
を尋ねる。

「それが……詳しいことは分からないって。でも難しい顔してたか
ら……」

「……危ない状況かもしれないってことか」

「……多分」

人間が肉体を失うと死んでしまうように悪魔も霊体を失うとやはり
死んでしまう。死にかけの子供すら笑いながら診療するあのラナ
トが難しい顔をするというなら……今のウエルミはそうなくてもお
かしくないのかもしれない。

「とにかく、行ってみよう」

「うん……」

最悪の場合に対する覚悟も決めてリビングまで移動する。緊張の
せいか自然と早足になる。

「ラナト、ウエルミの様子は、」

「た、胤君！ ど、どうしてこの子は悪魔なのにパンツはいてぐふ
えあ！」

「えと……兄さん、私間違っていないよね？」

……うん。

ラナトを蹴り飛ばした姿勢のまま不安そうに固まる未咲の頭を撫でてあげた。

未咲がやらなければ俺が殺っているところだった。

「未咲ちゃんのスキンシップは相変わらず激しおふっ!？」

「に、兄さん!？」

……っは!？

なんかイラっとしてつい殴ってしまった。でも後悔はしていない。

「いやいや、というかスカートを捲ったのも八割強くらいはあくまでも治療の一環で……あ、悪魔とかけてるわけじゃないよ？」

いたた、と頬をさするイケメン……といあか患者のスカートの内側を覗く医者がどこにいる。それに残りの二割はなんだよ。もう一回殴ってもいいか？

「ぱ、パンツをはくと外から第五元素を取り込むことか難しくなっ
て、エーテル」

「少なくとも二人、パンツをはいて健康な悪魔を知ってるぞ？」

「あ、あー……うん、それでこの子んだけどやっぱり霊体が消えかかってる状態だ!」

取り繕ったようなシリアス顔でラナトが言った。

こいつ……強引に話を元に戻しやがった!

……いや、そもそもふざけていいような状況でもなかったんだが。

「それで？ ウェルミに何が起きてる？」

「うん、単純に霊体を構成してる第五元素エーテルがなんらかの理由で消失してる」

「それで……あの、ウェルミさんは助かるんですか？」

「第五元素エーテルってのは僕達悪魔や君達人間の魔力と同じものだから供給してあげるのはそう難しくないし、一応僕が供給しておいた……ただ……」

ラナトの言葉に俺も未咲も安堵の息を吐く。

どうやらウェルミが死ぬことはなさそうだが……

「まだこちら側に来て一週間も経っていないのに霊素欠乏が起きるなんて……ああ、この子の症状なんだけど、そんなの聞いたことがないんだ。だから原因が明らかにならない場合、魔界に送り還すしかないかもしれない」

「原因……か」

ラナトが分からないのに俺が分かんとは思えないがウェルミの身の回りで起きたことを考えてみる。

とはいえウェルミとは初登校だった今日を含めたほとんどの時間を俺か未咲が共有していた。唯一ウェルミが一人きりになったのは俺と未咲が会議をしていた時だけ……その時も数分で六組の連中と合流したわけだから……

「まったく分からん……外的な要因はなかったように思えるけど……」

「そうなるって先天的な疾患の可能性も出てくるね……」

「あの……私は外的な要因の可能性が高いと思います……」

「他の悪魔の仕業とかかな？」

外的な要因とはようするに魔法による攻撃だ。

でもこのところ他の悪魔とか妖怪とかそういう気配はなかったんじゃないのか？

俺は近くまで寄らないと分からないけど未咲の場合はそれなりの範囲内の人外存在を関知できる……その未咲が俺に何も言っていないということは外敵はいないはずなんだが……

「それが……兄さんが帰ってくる前に未来視さきよみと名乗る方から電話があつて……天使が私たちの前に現れると……ウエルミさんののもそれが……」

「それがなにかしらの影響を与えていると未咲ちゃんは思っているわけだ？」

「はい……」

天使……？

まさか……いや、でもこの話の流れだと天使ってのはまず間違はなくあの天使のはずだ……

もちろん悪魔がいるのだから天使がいてもおかしくはない。

ただ、悪魔が人間の敵と誤解されているのだから天使が人間にとって善なる存在だと言い切ることはできない。

それどころか天使は間違いなく人間にとっての敵だ。だから各国政府でも天使の存在を認めているものは少ない。

「どうして……天使が……」

「まあ、確かに天使が関わってくるなら外的な要因ってのもあり得るかな」

天使も悪魔と同じく霊体で構成されている。つまり天使も魔法を使えるし、それで誰かを攻撃することもある。ウエルミの霊体が急

激に損なわれたのも魔法による攻撃と考えるとそう不自然なこともなくなる。

そして一番厄介な点が悪魔と違って話の通じる相手ではないということだ。契約を守らないだけでなく天使自身の倫理観によってのみ行動するため、時に魔法によって大災害を引き起こすこともある。大災害を起こさなかったとしても天使によって人生を狂わされる人間は数多くいることだろう。

「でも魔法の気配なんて全くなかったぞ？　俺でもそれくらいは分かる」

「そうだね。でも……呪紋なら？」

「……なるほど」

……呪紋は設置型の魔法とでもいえるだろうか。あらかじめ決められた紋様を刻んでおき条件が達成されている間だけ一定の効果を発揮する。準備に手間がかかる上、効果も制限されていて不便だけど……確かに魔法のように大きな異変が生まれることは少ないし、感覚が鋭敏な者でもなかなか気付けないだろう。

「でも、そんなに都合よくウェルミを狙えるか？」

呪紋は直接刻み込まなければいけないという特徴に加え条件のクリアも必要になる……それこそ道ばたに掘った落とし穴と一緒で、狙った相手を確実に攻撃するということは難しい。呪紋の攻撃的側面があまり認められないのもそのためだろう。

大抵は気温のコントロールだったり微風を起こしたりといった生活に役立つちょっとした仕掛けのようなものだ。

「あ……兄さん、椅子！」

「椅子？」

「ほら、ウエルミさんの席の……じゃあウエルミさんが狙われたわけじゃなくて、最初から無差別で……？」

「そういえば胤君たちの学校では何度か不可解な失神騒ぎが起きていたね？」

「ということは……もしかして？」

ウエルミの席のどこかに呪紋を……？

それなら確かに呪紋の効果によっては座った生徒が失神するものも不思議じゃない。

……その場合の効果は間違いなく、

「「エーテル・コレクト第五元素の蒐集……」」

エーテル第五元素は悪魔にとっては生命力であるとともに魔法という攻撃手段を支えるもの。蒐集は呪紋としては割とポピュラーなものだ。

ただ、本来は人が気付けないほど少量のエーテル第五元素を集める呪紋を多量に仕掛けるのが普通で、人間が一瞬で失神し悪魔が一日で死にかけるとような物騒なものではない。

それは人道的ではないというだけでなく、あの学校の席のように曰くが付いてしまって逆に蒐集効率が悪くなるからだ。

だとすると仕掛けたのは若い悪魔、もしくはは道理を無視する……

「天使……なのか？」

「十中八九そうだろうね」

「言い切れるのか？」

「かのじよ未来視たちは嘘を言わないからね。彼女たちが言った言葉は必ず真実になる。このタイミングで君達が天使と関わるというならこれに関係してのことだろう」

未来視未来視というのがどういう存在かは把握しきれていないが呪紋を

使ったのは天使らしい。いや、使ったとするならだが……無差別な呪紋の使い方は確かに天使のもののように思える。ただ、もちろん呪紋が使われたというのが確定したわけじゃない。呪紋自体を見つけるまで早合点は禁物だろう。

仮にウェルミの失神が先天的なものだったとして、この件とは無関係に天使と関わることになったとき思い込みは邪魔……下手をすると命取りになるかもしれない。

「……一度、調べる必要があるな」

「兄さん、私も付いてくよ」

「ん、ん……いや、しかし……」

いくら未咲が戦えると言っても危険は危険だ……俺が未咲のことを守りきれるかどうかってのも怪しいし。

もし本当に天使が出てきた場合、まともな準備が出来ていない現状では自分のことで手一杯だ。もちろん命をかけて守るつもりはあるが……下手をすると二人とも斃される可能性もある。

「……連れて行ってあげれば？ 死にかけても僕が治すからさ」

「そうですよね！ ほら、兄さん！」

「いや、治るからって話じゃ……それに乙女の柔肌に傷がついたらだな……」

「僕は傷痕を残すような治療はしないよ？」

「いや、だからそういう問題じゃ、」

「とにかく！ 私も行くからね！」

「……………仕方ないか。」

可愛い妹にすぎりつかれて拒否できる兄なんていない！

「それで、天使のことはどうするんだい？ ああ、いや。僕のコ

とは巻き込まないでね。患者がいるから僕が怪我するわけにはいかないしね」

……ラナトには何十人という患者がいる。それを軽んじるのを医者としてのラナトに要求することはできない。

それにラナトが死んだら俺達を治してもらえないしな。

「……まあ、それは仕方ないか」

「とりあえず、この悪魔の子はしばらく様子を見よう。君たちには呪紋の当てがあるみたいだし……この家にいても霊素欠乏が起きるようだったらまた呼んでよ」

「……今日は助かった。ありがとう」

「……じゃあ僕は病院に戻るよ」

診療が終わった途端にラナトはいつも通り気が抜けた炭酸のようになり、そのままふらふらとリビングから出ていった。

医者として働いているときのラナトは男の俺から見ても魅力的なんだけどその仕事のスイッチがオフになった瞬間に頼りなくなるんだよな。親父の話では俺と未咲もラナトに救われたことがあるらしいけど……あの情けない姿を知っていると感謝しにくい。

「ウェルミさん……助かるってね」

「そうだな。まあ、一安心か」

未咲と短く言葉を交わすとまた部屋が静かになる。

……一応の治療は無事に終わったとはいえウェルミが健康になるとはいえない上に天使の問題もある。雰囲気が暗くなるのも仕方ない。

もちろんこの空気はどうにかしたいが……

「そういえば兄さん、その手提げ袋なに？　そんなの学校に持って
ってたっけ？」

「え？　あ、あー！」

未咲に指摘されるまで綺麗さっぱり忘れてた。というかウエルミ
が倒れたときに置いてかなかった俺偉い。

未咲が中学の時に家庭科のクラスで作ってくれた手提げ袋に入っ
ているのは今日の歓迎会での戦利品だ。

「北京ダック、大トロ握り、たらば蟹、サラダにティラミス……未
咲、どうせ夕食はあんまり食べてないんだろ？」

「いや、そんなことは……」

くううう……

「あう……」

可愛らしいお腹の鳴き声とほぼ同時に未咲の頬に朱が差した。
やっぱり一口二口食べてごちそうしましたんだな……季節の変わ
り目なんだから栄養を十分に摂らなかったら病気になるぞ。

……いや、もしかしたら体調を崩したから食欲がないのか！？

「未咲、ちょっと頭をこっちに……」

「ん？　うん……」

こつんと額同士をあてて熱がないかを確認してみる。目の前には
金髪と同じでやはり普通より色素の薄い鳶色の光彩がある。俺はご
く普通の黒髪黒目だったから昔は少し羨ましかった。

昔のことを思い出しても仕方がないから気を取り直して未咲
のぱっちりとした二重や長い睫毛、大きな瞳を見ながら額に意識を

集中させる。

……若干未咲の体温の方が低いかな？
よくわからないと言うことは同じくらいなのかもしれない。

「兄さんの目は真っ暗だね……飲み込まれそう」

「……普通、真っ黒って言わないか？」

「そうかな？　そうだね……でも、黒よりも黒い気がしたから」

未咲がくすくすと控えめ笑ったから安心して頭を話した。

体調を崩してるときの未咲はなかなか笑わない。意識してのことではないみたいだけど俺が未咲の笑顔を見てないなと感じたときは大抵それなりの病気になるっている。

最後は去年の冬ごろに未咲がインフルエンザにかかったときか。

「相変わらず一人での飯は嫌か？」

「そんなことは……あるけど。でも我慢するよ？」

「それならしっかり食えること。まあ、嬉しいけどな」

「えと……シチュー暖め直すね？」

「ん？　ああ、頼む」

……ふむ。

なんか今日の未咲はいつもより素直で大人しいな。いや、もちろんいつも素直で大人しいけど……殴ったり蹴ったりは愛情表現だからノーカウントだ。

やっぱり不安なんだろうな。

ウェルミのことと天使のことも。未咲は周りを大切にする性格だから。

「兄さんはシチュー熱いのが好きなんだよね」

「もう冷え込んできたからなー」

「そうだね……あ、マフラーとか欲しい？」
「作ってくれるのか？」

少し冗談めかして尋ねてみる。

でも確かに冬服も用意し始めないとな。今年は特に冷え込むみたいだし上着を買い足すのもいいかもしれない。

未咲にもなにか買ってあげないと。

「や……えと……兄さんが欲しければだけどね……れ、練習代わり作ったマフラーあげるけど」

「まじで！？　もらう！　超貰う！」

「……ピンクのハート柄だよ？」

なに……？

普通に考えれば、男がハート柄のマフラー……しかも恋人じゃなくて妹からのプレゼント。これは少し世間体が不味い。

……いや、しかし未咲の手作りは捨てがたい！

もらうだけもらって使わないなんて選択肢はあり得ないし……世間の評価と妹……俺はどっちを選べば！？

「ふふっ……」

「未咲？」

「嘘だよ。本当は兄さんも使えるように真っ白。黒にしようかとも思ったけどそれだと兄さんが全身真っ黒の不審者になっちゃうからね。あとで部屋に持ってくね」

……つまり、もらえるということか！
うん？

というか練習代わりにマフラーを作ったって言ってたよな？
ということは練習の他に本命があるわけで、しかもそれはマフラ

ーより手が込んでいるもの……セーターか？

そして未咲の性格的に練習のものを本命を渡す相手にあげるとは思えない。となると未咲が渡したい相手は俺じゃなくてそいつ……自惚れるわけじゃないが未咲と一番仲がいいのは俺……その俺よりも優先するということは……恋人！？

「じゃあ兄さん、いただきます」

「未咲、その前に大事な話がある……」

「えと……天使のこと……？」

「そんなことはどうでもいい！ 一度、紹介しなさい」

俺が、未咲を守る男かどうかを見極めてやる。頼りないと思っ
たときは……未咲には悪いけど再起不能にするしかない。

きつと、未咲は最終的には理解してくれるはずだ。

「えと……何の話？」

「俺に、隠すのか……？ そこまでして守りたいのか？」

「え？ だから、え？」

本気で分からないと言うような顔を作る未咲。そんな演技には騙
されないぞ！

……いや、少し冷静に考えよう。

未咲だって俺に認められない男と付き合えるとは思っていないは
ずだ。だから本当に好きなら隠さないで話すはず……ということは
未咲が気にしているのは相手の男じゃなくて俺か？

……未咲の彼氏は俺がショックを受けるような人物なのか？
だとすると……

ふと、未咲を呼び捨てにしたちよつとしたイケメンを思い出した。

「佐本お……やはり殺しておくべきだったか」

「え、なんで佐本君？」

「俺の妹に手を出すとはいいい度胸だ……二度と未咲に興味を持たないように毛根一本ずつ潰して出家させてやる……」

親父の知り合いに阿闍梨あざりにまでなった厳しい坊さんがいるからな……性根を叩き直してもらおう。

思えば最初からピリピリとした嫌な感覚はあったんだ。もっと早くに行動を起こしていればよかったか。

「兄さん、絶対に誤解してるけど……まあいいか」

「よし、それじゃいただきます」

「いただきます」

佐本の奴……いったいどうしてくれようか。

ウェルミのことと天使のことが解決したら真っ先に叩き潰してやろう……俺は執念深いから今のうちに覚悟しておけよ？

「ん、美味しく出来てる♪」

未咲がシチューを一口掬って口に入れるとたちまちその顔が綻んだ。

ん、今になって味を再確認するって……

「未咲、まだ食べてすらいなかったのか？」

「食べた……でも一人だと味が感じられないというか美味しくない
というか……」

「寂しがり屋め」

「だって、一人で食えることなんて月に一度もないし……うう」

言われてみれば確かにそうだな。

もう俺も未咲も高校生なんだから夜に予定が入ったりなんてことがあってもおかしくないはずなんだけどな。

俺に予定が入るときは未咲も弓緋之と食べたりしてるけど……：ういえば未咲の予定で俺が一人になったことは一度もないかもしれない。

まあ、未咲は本当に独りになることが嫌いみたいだからな。それこそ、夕食が喉を通らなくなってしまいうくらいに。

「兄さん。ウエルミさんとか天使のことはどうするの？」

「……まずはウエルミの席の周辺を調べてウエルミが倒れた原因になりそうなものがないか探す。なければ天使のことを政府に報告……あれば俺たちの手で決着をつけるために戦うしかないな」

「政府には任せられないの？」

花氏が管理祓魔師じゃなければ助力を請うことに抵抗はなかったんだけどな……

天使と管理地域の間に関わりが認められた場合、その天使は管理者だけの問題になる。天使によって刻まれた呪紋はその関わりの証拠としては十分すぎる。

そしてその上で手に負えないと判断して助力を頼んでしまうと管理能力不足とされてしまう……：分かりやすくいえば他の祓魔師などからナメられるということだ。場合によっては土地の分割や最悪没収までありうる。

……だから呪紋が見つかってしまったら俺たちの手で戦うしかない。

母さんの土地を簡単に没収するとは思えないけど……：代行だから弱くても仕方ないと思われるのも情けない。

「ま、見つからなければいいんだけどな」

「でも、見つからないと……：ウエルミさんに先天的な問題があった

ことに……」

ああ、そうか……そうなるとウェルミが帰ることになるのか。
呪紋があってもなくても悪いことだということにはかわりない……
…なんというか、希望が持てない状況ってのが一番救いがないな。

「どっちに転んでも不幸だ……」

「私は、呪紋が見つかった方がいいな……天使と戦うことになった
としたも」

「ま、天使も案外弱いかもしれないしな」

会ったこともないんだ。

慎重になりすぎても怯えすぎる必要はないだろ。

最後に天使が現れたのは八年前のヨーロッパ。その時は約百人が
行方不明になったとか言われているが……そもそも公式発表される
ものでもないし尾ひれが付いてもおかしくないだろ。

……まあ、公式発表されていないということは犠牲者は百人じゃ
済まなかったという可能性も……あるけど。

うわ、それを俺と未咲で倒せとか無理ゲーだろ！

「調べにいくのはいつ？」

「いつ天使が現れるかは分かってないんだし準備時間を長く取るた
めにもなるべく早い方がいいな。明日なら土曜日だから生徒も少な
いだろうし早速行くか。善は急げ、だ」

「……うん。分かった。準備はしておくね」

……まあ、未咲は楽観的に考えられないか。

八年前、未咲はお袋とヨーロッパにいた……というよりお袋も天
使討伐に協力したって話だし、実際に天使の猛威を目にしただろう
未咲が怯えるのも仕方ないな。

俯いている未咲の頭に軽く手を置く。

「兄さん……？」

「未咲、お兄ちゃんが守ってやるからな」

「無茶は、しないでよね……？」

それは聞けないな。

俺は未咲を守るためならなんだってするつもりだ。
お兄ちゃんだからな。

第九話（前書き）

急に（？）お気に入りが増えててびっくりです（汗

第九話

「兄さん、呪紋はあると思う？」

「ラナトの話ではウエルミの霊素が昨日の夜よりは回復してるみたいだから……やっぱあるだろうな」

今は学校へと向かっている道の途中だ。

普段のように未咲と何気ない話をしながら歩いていたが……学校が近付くにつれて未咲の不安も膨らんできたのか、とうとう呪紋の話が始まった。

未咲が家を出た時よりもさらに緊張しているのが見てとれる。

……そりゃそうだ。

天使との交戦なんて一人の祓魔師が一生に一度経験するかしないか……それも大抵の場合は自らの土地に天使が現れるのではなく他の土地に現れた天使をその管理祓魔師に雇われて戦うだけ……俺達のように戦わないといけない状況になることなんて稀だ。

「でも、ウエルミさんが回復してるとどうして呪紋があることになるの？」

「ほら、ウエルミの先天的な体質だったら霊素欠乏は体内の霊素が消費されたあと外から取り込めないから発生するわけだろ？」

「あ、自然回復してるってことは体質の問題じゃない……？」

「言い切れないけど……」

十中八九そういうことだろう。

ウエルミが授業中に眠ってたのも霊素を吸い取られていたからかもしれない。

学校の初日にいきなり倒れたとなると原因として可能性が高いのはやはり学校内……怪しさでいえばウエルミの椅子しかない。

「あ、雛里さん」

「え？」

未咲の視線を追ってみると確かに校門の前に石破が立っていた。隣には阿久津と賢太がいる。

休日は部活とかの用事がない限り学校敷地内は立ち入り禁止……ただ三人にそういう用事があるとも思えない。石破は新聞部だけど阿久津と賢太は帰宅部だから三人で揃う必要はないはずだ。

補講とかならあり得るかもしれないけど生徒会長のサボりが黙認されてる学校にそんな真面目な教師がいるわけがない。

「よお、お前ら何してんだ？」

「あ、花氏に未咲ちゃん……あれ、ウエルミさんはいないの？」

「生徒会と風紀の仕事できたからな。ウエルミはまだ寝てるよ」

「ふうん……ああ、私達はまた騒がれ始めた幽霊騒ぎを調べてみようかなって」

なるほど……だから幽霊を目撃したって騒いでた阿久津と賢太が一緒なんだな。

……ミスったな。

こいつらに学校に仕事で来たと言った以上は教室にいるのはおかしい……これじゃ教室にあるウエルミの席が調べられないな。

「兄様……ここは正直に言いませんか？」

「え？」

俺の失敗に気付いた未咲が任せてとでも言うようにウィンクをしてきた。人前だから口調はいつもより丁寧だ。

はあ……未咲、可愛いぞ……今のウィンクも心の未咲アルバムに

保存しておこう。

「雛里さん……実は……」

「実は？」

「私達も幽霊のことを調べに来たんです。なので協力しませんか？生徒会長と風紀委員の副長がいれば……分かりますよね？」

「うん……うん！　よく分かる！」

ぱあっと顔を輝かせた石破が未咲の手を両手で握り激しく上下に振る。

おいこら、未咲が手を痛めたらどうする。

「それで阿久津と賢太は大丈夫なのか？」

より具体的にいえば怖くないのか？

「ああ！　まだ日が出てるし未咲様もいるし！」

暗くなると怖いのかよ……

ちなみに未咲に手を出したら幽霊以上に怖いことが起きるぞ？

幽霊は驚かすだけでも俺は本気で殴るからな。

「あ、そう考えると幽霊も怖くなるかもな……」

「というか賢太、いつまで花氏妹のこと様つけて呼ぶの？」

「亮……お前も一度呼んでみるといい。これ以上しつくり来る呼び方はないから」

「んー……未咲、様？　未咲様、未咲様……未咲様！　なるほど……！」

「や、やめてくださいよ」

お前ら……人の妹の名前を呼んで悦ぶなよ。本当に痛くするぞ？
だがしかし照れる未咲が可愛いから許す！
……にしても人が増えたな。

今日いきなり天使が現れて戦うことにならないよう願うばかりだ。

「じゃ、まずはウェルミさんの席の回りを調べに行こうか」
「はいよ」

石破の号令に従ってのろのろと教室に向かう。
今更だけど休日に学校に来るのって複雑だ……別に居残りとか補習って訳じゃないのに妙に足が重く感じる。

「雛里さんもやっぱりあの席が怪しいと思うんですか？」

「うんー。未咲ちゃんは今の幽霊騒ぎがいつから起きたか知ってる？」

「割と最近だと……ただ詳しくは知りませんね」

わざわざ石破達の方にも付き合うなんて未咲は真面目だなあ。まあ情報交換は都合が良いから構わないけど……もっと俺にも構ってくれ。

でもやっぱり妙だよな。天使のことも幽霊のことも、どうしても席が中心になるんだ……？

二つに関係してることでもあるのか？

「えとね。家で昔の新聞とかを漁って調べただけど、よく知られてる交通事故で亡くなった生徒っていうのは六年前の生徒会長みたい」

「おい、昨日は三代か四代前って言ってなかったか？」

「勘違い勘違い。それで幽霊騒ぎはその生徒の学年が卒業する直前からなの。当時は一緒に卒業したいという思いから幽霊になったな

んて言われてたんだって」

……卒業できなかったのが心残りで成仏できなかったと。
多分席に取り憑く地縛霊とかだと思われたんだろう。そういうのは大抵は見間違えたただけなんだけど……

「不思議なのはこの時はまだ椅子に座った生徒が気絶するなんて話はなかったみたいなのよね」

「でも俺達が入学したところにはもう立派に使わずの椅子になってたよな」

「実際に肝試ししてた男子も失神してたし。ね、阿久津？」

「そういやそんなこともあったな……賢太？」

「や、やめろよ……というか無理矢理に座らせたのお前たちだろ！
」」

これまで失神した生徒の中には阿久津と賢太も数えられている。
一年の時に四人で二年六組の教室に乗り込んで先輩たちに止められるのも構わずに座ったんだっただけ。

まあ俺と石破は見て笑ってただけだな。そもそも最初から俺たちは座る気がなかったし。本当に失神するのか知リたかっただけ。
いやー、あの頃も楽しかったよなあ。

「あれはいい失神だったわ。というかあの時どんな感じだったの？」
「んー……あんまり覚えてないけど酷い立ち眩みみたいな感じだったなあ。膝から力が抜けるというか……」

石破の素朴な疑問に賢太が答える。

力が抜ける……ねえ。

やっぱり呪紋のせいなのかもしれないな。前触れもなく失神したってことは魂に影響があったと考えて間違いないだろう。

「兄様、やっぱり……」

「ありそうだな」

未咲と小声でやり取りする。

なんというか付き合っている二人が周囲に隠れてこっそりいちやつくところという感じになるのかもしれない。

ちよつとした背徳感と幸福感がある。

ああ、未咲可愛いなあ！

……と、少しは真面目にしよう。未咲に睨まれる。

「でも石破、幽霊を実際に見たってのは昨日が初めてだよな？」

「あれ、そうだけど……花氏も調べてたの？」

「いや生徒会に苦情が来ないからそんなもんだろうと思っただけ……なんで急に幽霊なんて……おいお前ら、本当に幽霊だったのか？」

「足がなくて透けてた！」

「服が白くて浮いてた！」

「でも髪長くて可愛かったよなあ……」

そ、そうか……息ピッタリだなお前ら……でも、こいつらが見たのが本物だとしてもどうして今更？

仮に昔の幽霊騒ぎが本物だったとして五年もブランクがある。それに当時と現れた季節も違う……地縛霊なら土地や物だけじゃなくて季節にも縛られるものだ。夏に現れなかった幽霊が夏に出てくるなんてことはない。

地縛霊じゃなかったとしても今までの五年間でまったく目撃されていなかったのが妙だ。

「さ、教室に着いたけど……どこ調べる？」

「椅子」

「まあ、そうよね」

これまでの経験則からいって失神は椅子に触れない限り起こらない。

例えば机に座る分にはまったく言っていないほど無害だ。

だから呪紋が刻まれているとすれば椅子……目のつかない場所と考えると裏面が妥当か？

「ほら、亮、ひっくり返して」

「お、おお俺！？ や、やだよ。触った瞬間気絶するかもしれないだろお……」

「大丈夫だって」

石破がいつものように阿久津に命令を出している。本当に飼い主と犬というような関係が出来ている気がする。

「兄様、いいんですか？」

「いや……よくない」

もし呪紋があったとしたら一日で悪魔であるウェルミの霊素を吸い付くしかねないほどの効果を持つ危険なものだ。

今までは失神程度ですんでいたけど、いつ触るだけで魂を吸い尽くすようなものになるか分からない……ここは触らせない方がいいだろう。

「石破、椅子を調べるのに五人もいらないしここは俺と未咲でやるよ。お前らは……鍵貸してやるから生徒会室でこの席に座ってたつていう生徒会長のこと調べてみてくれ」

生徒会報とかも揃ってるから調べられることは多いだろう。その

分時間もかかるはずだ……その間に俺と未咲で椅子を調べて可能なら呪紋を破壊する。

普通の人間が触るだけでヤバくても普通より霊素が多い俺達なら少しは大丈夫なはず……サイコキネシス念動力みたいに遠隔作用がある魔法が使えるれば楽だったんだけどな。

「生徒会室の鍵は……これだ」

「やけに鍵多くない？」

「他のは別のところだから気にするな」

部活棟や玄関口、屋上の鍵なんかが束ねてある重いキーホルダーから生徒会室の鍵を外して石破に手渡す。

この鍵セットは生徒会長が引き継いでいるものだ。代を重ねるごとに教師に内緒で作ったコピーキーが増えていつているらしい。今も無いのは校長室にプール、それに各更衣室くらいのものだ。

にしても生徒会長が保管しているものだから教師たちが鍵が増えていることに気が付かないのは仕方ないとしても……それでも三十個以上の鍵がついてるんだから少しは疑問に思えよな。

「サンキュ、じゃあ行ってくるねー」

「賢太も行ってこい」

「オーケー。じゃ、なんか面白そうなの見つけたら報告な」

「はいよ」

……面白くないものしか見つからないだろうけど。

もう探さなくてもどこかに天使の呪紋があることは予想がついてるんだ。それならここにあってほしい。

町中駆けずり回った後で天使と戦闘なんて自殺行為はしたくない……そもそも二人だけで天使と戦うのも自殺行為だけど。

「さて……未咲、やるぞ？」
「……うん」

常人よりは耐性があるとはいってもなるべくは触れないに越したことはない。とにかく触れている時間を短くするために手で掴まずに椅子を蹴りあげた。

上から見て呪紋が見つかからないなら裏側にある。それならわざわざ丁寧^{ざ丁寧}にひっくり返さないでもいいだろう。

「うお!？」

椅子に足が触れた瞬間、思った以上に軽かったのとは別の理由で体のバランスが崩れた。

倒れかけた俺を未咲が支えてくれる。

「兄さん大丈夫!？」

「ん、まあ平気だ……今のならセーフってところか」

それでも何かが体から抜き出されたような感覚はあったが……ふらついたお陰で未咲の慌てた顔が見れたからむしろラッキーだったということにしよう。

それにしても一瞬触っただけでも食欲に霊素を吸い取ろうとしてくるならウェルミが倒れたのも納得だな……むしろ一日中この椅子に座って死なないのは悪魔くらいのもだろう。他ならすぐ乾涸^{ひから}びてる。

「兄さん、これ……呪紋、かな？」

「だろうな……随分変わってるけど」

普通、呪紋は俺達が魔界と呼んでいる世界の文字だったり記号だ

ったりが組み合わされている。

しかし椅子の座面の真裏にギッシリと刻まれた呪紋はそんなセオリーお構いなしに日本語で書かれていた。

それも鉛筆や油性マジック、楷書に丸文字と多種多様な形式で……まるで寄せ書きのように。

「桐野、俺達は仲間だ——俊介」

「絶対に忘れないからね——涼子」

「舞子、約束通り一緒に卒業しようね——エミリより」

この他にもたくさんのが書いてあるがその全てにひとつの名前が共通して認められる。桐野舞子……この名前には聞き覚えがある。それもごく最近だ。

苗字だけなら、そして名前だけならありふれた名前ではある。でも同姓同名の生徒がそう数多くいるとは思えない。

だから未咲に確認する。

「未咲……風紀委員って何人だ？」

「え？ 三人だけど……？」

「やっぱりな……」

「兄さん？」

「生徒会役員も三人だ……でも昨日の会議の時、あの部屋には七人いた。じゃあ、あの子は誰だ？」

「……もしかして？」

「ああ、ウェルミの歓迎会やった夜に桐野舞子だって名乗ってた」

……そういえばあの会議の時、俺があの子に話しかけるまでは誰も気に止めていなかったな……まるでその瞬間まで存在していなかったかのように。後に本人は影が薄いと言っていたが……

あの場で気付いていたのは俺と未咲……そして弓緋之のように霊

感体質の生徒だけだろう。

「未咲、幽霊ってなんで人のことを驚かすか知ってるか？」

「……楽しいから？」

「違うな。他者に観測されることで自己を確立しようとするからだ。だから市井を騒がせる」

俺が話しかけたから彼女……桐野舞子は他の人にも観測できた。見られることで一時的に自分の力を増したのかもしれない。

恐らくこの寄せ書きに刻まれている桐野舞子と俺達が見た彼女は同じ人間……いや今はもう幽霊と言うべきか……

事故後の幽霊騒ぎ以降の五年間は音沙汰がなかったのに昨日になって現れたのはこの呪紋を通してウエルミの霊素を得たからか？

でも……なにか違和感が……

「で、桐野舞子を甦らせようとしているのが天使なんだろうな……」

「でも、なんの目的で？」

目的は分からない。

そもそも天使は俺達人間や悪魔とは違う思考の持ち主だって言うんだから目的が分かってても理解できるか怪しい。

とにかくこの天使は寄せ書きを使って第五元素エーテル・コレクトの蒐集の効果を持つ呪紋を組み上げた。

わざわざ寄せ書きを使ったのは吸い取った第五元素エーテルを呪紋の施刻者である天使に届けるのではなく、寄せ書きに込められた桐野舞子への想いを道筋にして甦らせるためのエネルギーとするためだろう。

「……気付いてしまったんですね」

「誰ですかっ!？」

……来たか。

身構えた未咲を背中に隠して声の持ち主を見る。

うちの高校の制服に身を包み、歩調に合わせてその短い髪を揺らしている。

そろそろ来るとは思っていた。ある意味ではこの呪紋こそが彼女の心臓だからな。

消えたくないなら楔である呪紋を守らなければならない。

「……桐野さん。いや、桐野先輩と言うべきか？」

「どちらでも……だいたい貴方の考えている通りだと思いますよ？それは桐野舞子という人間を甦らせるためのものです」

「なら施刻者に心当たりは？」

「それを刻んだ人ですか？……分かりません」

まあ、生前は一般人だったのにいきなり呪紋を刻んだのは誰だなんて言われてもわけが分からないだろうな。

ただ一度は死んだという自覚があってよかった。自覚のない幽霊は他人の目に自分が映らないことが分からないから突然の周囲との隔絶によって魂を狂わせ……悪霊化することもあるからな。

「あんたは生き返りたいか？」

「……そもそも生き返れるのですか？」

「……まあ、無理だろうな」

「そう……」

言いきった俺に対して怒るか泣くかするかとも思ったが幸い特別なアクションは何もなかった。

一度喪われた命を甦らせることは至難の業だ。出来るとしたらそれこそ神の仕業だろう。



ん、電話……石破たちか。なにか見つけたのかもな。

「未咲、ちよつと外出てるな？」

「あ、はい。分かりました……椅子はどうします？」

「あー……」

本当なら壊すのが一番なんだけど……本人の目の前でってのはな

幽霊だとはいえ死ぬのは嫌だろうし未咲もやりにくいだろう。

「よく話して納得して貰って、未咲が出来るなら壊してくれ。で
きるか？」

「任せてください」

「じゃ、桐野さんもそういうことで」

話の半分も理解できていないだろう彼女にも一言残して廊下に出る。

聞かれて困ると言うこともないだろうけど念には念を込めて、と
いうことだ。

「って切れてるじゃん……」

通話代ケチりやがったな……仕方ない、こっちからかけ直すか。

石破、石破……つと。

「……あ、石破か？　なんか見つけたのか？」

「電話に出るの遅いつて。亮たちと確認したけど生徒会長の名前分かったよ」

「桐野舞子……だよな？」

「あれ、知ってたの？」

最初は椅子を調べるのに都合がいいから幽霊探しに付き合うつもりだったけど……まさか本当に幽霊騒ぎ自体が天使にも関係してたとは……ということはこの騒ぎの原因はウエルミが転校してきたことになるのか？

ウエルミがああ椅子に座ったことで大量の霊素が桐野舞子へと送られ、その結果幽霊が目に見えるようになった。そしてその幽霊を甦らせようとしているのが天使……全部、繋がった……

「あとその時の写真もあったけど見たい？」

「そうだな……一回そっちに行くわ」

「そっちはなにか見つかった？」

「あー……いや、なにも見つかなかったな」

「本当に？ 怪しげな模様とかなにも？ 座面の裏とかちゃんと見た？」

……石破すげえな。

呪紋の存在どころか刻まれてる場所まで特定してきやがった。こだけ勘がいいなら才能によっては一角の祓魔師にもなれるかもしれない。

……いや、ひっそりと生活してる悪魔にまで迷惑かけそうだから駄目だ。街の平穏のためにも事前に食い止めないと……

「裏には寄せ書きしかなかったよ。桐野舞子って名前もそこに書いてあっただけだ」

「ふーん……あ、じゃあ寄せ書きがきつと幽霊の核なのね。この前オカルト本で読んだんだけど幽霊にはこの世に留まるための縁が^{よすが}必要なんだって」

「ほ、ほー。石破ってオカルトに詳しかったんだな……いやー意外だなー」

ま、ますますスゴいぞこいつ!?

本当になにかの才能があるのかもしれない……魔術が必要ない除霊くらいなら一人でやっちゃいそうだ。

「だから……幽霊には可哀想だけど椅子を叩き壊せば解決かな……?」

「ちょ、ちょっと待て! そんなことしたら祟られるかもしれないだろ!?!」

石破、お前本当は素人じゃないだろ!?

全部分かってて俺をからかってないか!?

うちのクラスには変わり者が多いと思っではいたけど……石破もただのゴシップ好きじゃなかったってことか……

「それもそだね……というか花氏も幽霊いるって信じてるんだ? 慌てちゃって変なのー」

信じる信じない以前に普段からそういうのを相手にしてるわけだしな。

「ま、幽霊なんていないんだから椅子を壊しても祟られないよ」

「石破……お前否定派だったのか?」

「だって見たことないもん」

ここまえて幽霊信じてないってむしろそれが信じられねえよ! ……ま、でも信じてないなら無理矢理解決しようとすることもないだろうし、

「だから後で椅子は壊すけど庇ってね。生徒会長様？」
「壊すのかよっ！？　なんで！？」

つ、着いていけない……幽霊を信じてないなら椅子を壊す必要もないはずだろ？

俺は何も間違えてないよな？
意味なく学校の備品を壊すんじゃないやねえ！

「えーと、それは、ほら、亮が怖がってるし……？」

「あれは怖がりつつも楽しんでるぞ……とにかくそっちいくから早まるなよ！？」　俺は庇わないからな！」

「花氏冷たい」

「冷たくない！」

むしろお前のためを思って言ってやってるんだぞ！？



「あ、来たね」

「おう……ってなんかいい顔してんな？」

「幽霊騒ぎ以外のネタもいろいろ見付けたからねー！」

「なんだそれ？」

前会長は引き継ぎの時に何も言ってなかったし、俺も見られて困るようなものは置いてないしな。

弓緋之かキラン君の秘密かなにかを見つけたのか……？

いや、さすがに石破も無関係な奴を巻き込まないだろうし……

「まあまあ……世の中には気にしない方がいいことってのもあるん

だよ……」

芝居っぽくニヒルに笑う石破が俺の肩を叩いてからそっと耳打ちをしてきた。

「……うまくいったら来週にでも焼肉奢ってあげる。未咲ちゃんも吊れてきていいよ♪」

「誰か強請るのか!？」

「うふっ」

怖いって!

一体なにを見付けちゃったんだよ!?

クラスメイトに焼肉奢れるだけの金がぶんどれるネタってのも微妙過ぎて分かりにくいわ!

「で、写真ってのは?」

「うん、ちょっと待ってね……えーと、亮、さっきのどこやったの?」

「えっと……確か六年前の最後の生徒会報に挟んでしまっておいたけど」

……なんで俺が見に行くって言うてるのにしまうんだよ。ボケてるのか? ボケてるんだろ?

よし、阿久津、ボケによく効くマッサージをしてやろうじゃないか。

「痛い痛い痛いー! これマッサージじゃなくてアイアンクローだ!!」

「ほーら、脳幹刺激してやってるから記憶も戻ってくるんじゃないかー?」

「いや無理……あ、河！ 河見えた！ 対岸に……祖父ちゃん！？」
「亮！？ あんたのお祖父ちゃんって亡くなったんじゃ……って花氏離して、顔が真っ青！」

「ほいほい」

いやー……なんだかんだで石破は阿久津に優しいよなあ。同じ幼馴染の宇都美とは扱いが違う。まあ、宇都美は器用で阿久津は手が掛かるからってのもあるんだろうけど……三角関係とかならないか心配だよなあ。

普段は俺と一緒に阿久津をイジってるのにこういうときは大袈裟に心配するし……乙女心は複雑ってやつか？

「で、賢太は写真がどこにあるか知ってるか？」

「ああ、上から二段目の左端から三番目の本の最後の方に挟まってる……」

「おう、助かる」

助かるが……こっちも向かないなんて、資料読むのに集中しすぎじゃないか？

「なに読んでるんだ？」

「え？ あ、いや、なんでも！ なんでもない！」

「……今背中に隠したものを出せ」

「ななな何もねえよ！？ うん、なにもない！」

「……………おらっ」

「うおっ！？」

いつもより強情だったから無理矢理どかした。

賢太の背後にあったのは……『特選、秘蔵写真集』……？

しかも美少女編……発行年月は……今年だと！？

「おい、賢太……」

「は、はひ……？」

「これ、どうしたんだ？」

「いや、それは……実は生徒会室に製本者の隠し場所があったな……」

「どこだ？」

こんなもの……全て焼き払ってくれるわ。

「い、言えるかよっ！ 俺だって四千円も払って教えてもらったんだからな！」

だいたいどうやって生徒会室に隠した……まさか内部犯……製本者はキラン君なのか！？

いやいやいや……あいつは一つ年下だけど俺と気が合いそうないやつだ。そのキラン君が俺を裏切るわけがない。

なら生徒会の鍵が不正にコピーされているということになる。

製本者よ……俺の居場所を侵すとどうなるかを教えてやろう。それに……

「この製本者は何も分かってない……！」

「み、未咲ちゃんが入ってないことか……？」

「当たり前だ……もちろん未咲をこの本に使われている写真みたいな際どいアングルで盗撮していたら死にたいと思うくらいの恥辱にまみれさせるところだが……」

写真どころか名前さえないだなんて……これじゃ未咲が美少女じゃないみたいだろ！

未咲は客観的に見てもこの学校でテッペン獲れる可愛さなんだよ！

「いや、お前が怖くて盗撮れなかったんじゃない、」

「盗撮じゃなくて正式に依頼しろって言ってるんだよ！ 撮影料は一枚五万円！ さらに儲けの1%も回収！ あと際どいのは全部NGだ！」

「……………花氏」

「ん、どうした石破？」

「いや、興味本意なんだけど……………ホントに私が未咲ちゃんを盗撮したことがあるとかじゃないんだけどね！ ……死にたくなるほどの恥辱って……………」

なにもしてないなら別に知らなくても……………まあ、石破は好奇心が人間になったようなもんだしな。一回気になったら聞かずにはいられないんだろう。

ただ、具体的にどうするかを考えてたわけじゃないからな…………

「まあ、まずは時代遅れのヤンキーみたいな服を着せる」

「う、うん……………」

おお、石破が動揺するとは珍しい。いや、俺としては別に女子ならしいんだけどな。

……………広めなければ。

「それで男子トイレの小便器にケツから押し込んで……………」

「お、押し込んで？」

「BGMに讚美歌でも流してみるか？」

うん、結構えげつない仕上がりだと思う。歌はウィーン少年楽団で決まりだな。最高にトラウマものだ。

「嫌だっ！ それは酷い酷すぎる！ ……で、データ消しとこ」

「……石破。今回だけだからな」

「わ、分かった！」

石破なら悪用しないだろうし別に消さなくてもいいけど。

ようするに夜のオカズに使われるのが許せないだけだ。可愛い可愛いと愛でるだけなら何も問題はない。男じゃなければな。

「とりあえずこれの製本者はお仕置きだな……どうせまた写真部だろう」

そういや石破は新聞部と写真部を掛け持ちしてたな……

「石破、何か知ってるか？」

「………私を部長にしてくれる？」

上目遣いで可愛らしく聞いてくる石破。媚び媚びなのが見て取れるけど今回は乗ってやろう。

……阿久津が動揺してるのが面白いしな。

「……まかせろ。写真部は俺に対して反抗的だし、石破が中から潰してくれるなら俺にとってもメリットはある」

「……お主も悪よのお」

「なに、お代官様ほどでは」

「………ハハハハハハ！」

写真部……これはいつか俺を脅迫してきた仕返しだからな？

………ってこんな黒幕ごっこしてる場合じゃねえんだって！

えっと写真は……上から二段目、左端から三番目だから………これか。

当時の生徒会での集合写真なんだろう。五人が横並びで写っている。桐野舞子も写真では隣の女子と腕を組んで笑っている。

……笑ってるとそれなりに可愛かったんだな。

それよりも気になるのは桐野舞子のとりの女子生徒……立ち居振舞いが堂々としている美人だ。

ダントツ、と言うほどではないが悪魔だと言われても納得はできる程度……天使の外見が悪魔とさほど変わらないとすると……

「石破、これ誰だ？」

「え？ いやこれが桐野舞子さんだってば」

ん？

いや、そっちじゃなくて……ああ、指の影になってるのか？

「いや、だからこっちの髪が長いのが桐野舞子さん。まあ、そっちの子がセンターで写ってるから間違えても仕方ないけどね」

「は？ ちょっと待て。この髪の長い女生徒が幽霊なのか！？」

「そ、そーよ？ 亮たちにも確認したし……ちなみにさつき花氏が指差してた子は風紀委員長だった片山エミリって子ね」

「なんてこった……」

くそっ！ どうして気付けなかった……！

阿久津と賢太から幽霊の髪は長いって聞いた時から違和感を感じていたのに……

俺の知っている桐野舞子はショートカットだ！

「くそっ！」

なら今、未咲と一緒にいるはずのあいつの正体は……いや、そんなの考えるまでもない。

六年前、桐野舞子と共に撮った写真から外見的特徴が全く変わらない存在……

人間以外に決まってる！
てんし

「未咲、無事でいろよ！」



「じゃあ、椅子ごと呪紋を壊しますね……どうか安らかに眠ってください」

「ええ………貴女が」

「………え？」

「さようなら」

第九話（後書き）

オリジナルはやっぱり時間がかかりますねえ……
叙述トリック！（

第十話（前書き）

おまたせしましたー！
本当におまたせしました。。。

第十話

生徒会室から六組の教室まではそれほど離れているわけじゃない。もし廊下が正常なら全力疾走すれば数十秒で辿り着くことも可能だ……要するに正常ではないんだけど。

廊下の異変には二階に下りてすぐに気が付いた。天井や壁、そして床からまでも人の脚ほどの太さがある石の槍が生えてきてるんだから気付かない方が難しい。

ネリ・トルム
「水弾……！」

魔力を節約するため、乱立する石槍のうち走る邪魔になるものだけを魔法で砕く。飛び散る破片は疑似物質化が解けて床に落ちる前に魔力に戻った。

本来なら人に魔法を見られるわけにはいかないから全ての石槍を破壊して魔力に戻すんだけど校内にいるのは石破たちだけ、しかも簡単には生徒会室から出られないように扉に細工をしておいたからしばらくの間は放っておいても魔法がバレることはないはずだ。

「それにしても……随分脆いな……」

石槍にはそれほど魔力が込められていないのか思った以上に呆気なく道はできた。もしかしたら天使の魔力にあてられて自然とこういう形になっただけなのかもしれない。

強力な魔力はそれだけで現実を変容させることがある。

ムディエ・ガルネ
ムディエ・ネリ
とにかく石属性魔法に対して効果的とは言えない俺の水属性魔術が、媒体となる水もないのに楽々と石槍を壊したことから考えると俺を妨害するために作り出したわけではなさそうだ。水を節約したかった俺としてはありがたい。

媒体は魔術の使用に必須ということもない。でもあればその分だけ魔術の効率がよくなるから直接戦うことになるまでは温存しておきたい。いくら蛇口を捻るだけで水が得られる国とはいえ、その蛇口がそこ中にあるわけじゃないからな。セコいようだけど天使や悪魔と違って絶対的な魔力の量が少ない俺たちはこうでもしないと彼らに対抗できない。

道を塞ぐ石槍をまとめて砕いて走って、またまとめて砕いて……それを繰り返し返させられた結果、走ったにもかかわらず普段の倍以上の時間をかけてようやく教室に辿り着くことができた。

「未咲！」

はやる気を抑えて扉を開けた瞬間、礫弾が顔の横を掠める。浅く裂けた頬からは血が滲み、背後の壁が円形に陥没した。

ムディエ・ガルネ
石属性魔法の特徴は魔法自体に働く強固な物質化だ。だから本来なら魔法の影響を受けにくい非生物の壁にも等しく礫弾が突き刺さる。

人間が悪魔を殺すために魔術を使うのと同じように悪魔は魔法を擬似的な物質にする方法を編み出した。これは物質界で人間と同じように生活するために霊体を物質に変換するための技術を応用したもので、不当な悪魔狩りが慣行されていた中世ヨーロッパで悪魔たちが生き残るために使ったものだ。

再び廊下に飛び退いて断続的に飛来する礫弾をやり過ごす。しばらくして礫雨は止んだ。

「行けるか……？」

一応、五発分の水弾をいつでも放てるように空中に待機させ身を屈めたまま教室に踏み込む。

無理に入らない方がいいのかもしれないけど未咲がいる可能性が

ある以上、入らないという選択肢は有り得ない。未咲を守ることは俺の役目だから。

「未咲……？」

……それなのに教室に未咲の姿がない。もちろん片山エミリの姿も。礫弾は条件設定で発動する罠のようなものだったのかもしれない。

未咲にとっては不意打ち気味の天使との遭遇だったはずだから無事に逃げられたとは思えない。その予想を荒れた教室の惨状が確信に変える。

教室には廊下のものとは比べる気にもならないほどの魔力が込められた石槍が至るところに生えている。それも廊下のような無策で雑然としたものではなく、明らかに敵を追い詰めるように意図されている並びだ。

未咲も抵抗したのか砕けている槍も多いけど……近くの一本から血が滴っているのは未咲が逃げられなかったということなんだろう。

「槍が密集してるところからは離れてるな……」

血に濡れている石槍は扉の近く。でも石槍が一番多く突き出ているのはあの呪文が刻まれていた椅子の周辺だ。あわよくば椅子を破壊しようと思っていたけど残念ながら密集した石槍に守られていて手出しはできそうにない。

多分未咲は襲いかかる石槍を纏めて碎き、隙を突いて逃げようとしたところで……となると傷を負ったのは足か？

未咲が怪我を負ったというのを知ってかえって頭の芯が冷える。ここで激昂しても時間の浪費、むしろ一秒経つ毎に未咲の危険が増えると考えた方がいい。

廊下に血の痕はないし、床に垂れた血をわざわざ拭き取ると思

ポケットに入っている携帯の着信音で思考が中断された。
知らない番号からの電話……？

……まさかっ！

「……片山エミリか？」

「あ……そっか、間に合わなかったか……」

「え？」

「それに、私の電話帳の一番はタネ君なのにタネ君は私の番号を登録してくれてないんだね……ちよつとショック」

「その声……ウェルミか？」

「うん、そーだよ？」

気がついたのか……？

いや、それよりも間に合わなかったって……？

「……なにか知ってるんだな！？」

「うん……まずは家で話そ？」

「ダメだ。未咲が連れ去られたから取り戻さない……」

俺は、未咲を守らないといけないから。未咲の兄だから……絶対に未咲に怪我をさせちゃいけないはずだったんだ。

「大丈夫。まだ未咲ちゃんは殺されないから……」

「殺されないってどういうことだ？ それにどこまで知ってるんだよ？」

「だいたいは……」

起きたばかりなら前からこうなるって分かってたのか？
……知ってたならどうして教えてくれなかったんだ！？

「ウェルミ……」

「冷静になってから家で話し合おう？」

「俺は冷静だ……だから今話せよ」

今だって電話しながら未咲が囚え^{とら}られている場所を考えてるし、もし片山エミリに出会ってしまったときの戦い方も考えてる。

「ううん。タネ君は冷静じゃない」

「冷静だって言ってるだろ！」

「っ……！」

語気を強めて冷静だって言うのもおかしい話だけど俺は冷静なんだ。

ちゃんと論理だった思考もできてるし自制だってできてる。

「……もう一度言う。俺は冷静だ。だから、」

「ううん。咲ちゃんが殺されるかもしれない状況でタネ君静なはずないよ。だって未咲ちゃんはタネ君の……一番大事な人でしょ？」

「だ、大事だから助け出すための方法を冷静に、」

「大事な人がさらわれて冷静でいられる人なんていないよ……？」

もしタネ君が本当に冷静なら、それは未咲ちゃん^の存在はタネ君にとって軽いものだってなっちゃうの分らないかな……？」

「……………」

……ああ、俺が冷静じゃないことなんて俺が一番判ってる。

頭は冷えてるかもしれないけどハラワタは煮えくりかえってる。

未咲を助けることよりも、どうやって片山エミリに後悔させてやろうかを考えてる。

「でも、それがどうした。早くしないと未咲は、」

「大丈夫。絶対に大丈夫だから帰ってきて……できる限りゆっくり歩いて、落ち着いて周りを見ながら……ね？」

「未咲は、」

「大丈夫。絶対に殺されないから安心して」

「……信じたぞ」

「うん。ありがと……じゃあ、待ってるね」

電話を切ってポケットに落とす。

周りを見ながらゆっくり、か……

「ああ、確かに俺はまったく冷静なんかじゃなかったな……」

まだ校舎内には賢太たちがいるのに戦うことしか考えてなかった。まずは一般人の安全を確保するのが俺たち祓魔師の仕事なのにな。

「よし、落ち着け。未咲は大丈夫だ。だったらまずは皆をどうにかしては学校から帰す。それに……」

他人を怪我させてまで未咲を優先することを未咲は嬉しく思わないだろうし。

未咲には笑っていてももらわないといけないから……だから未咲が望む最高の方法で未咲を助け出して幕を引かないとな。

「そうと決まったらまずはあいつらの所に行くか」

廊下を見ればさっきまでは地獄の剣山のようにところせましと生えていた石槍が跡形もなく消えている。

教室内の物は依然として残っているから、やはり廊下の物は片山エミリが意識的に作り出したわけじゃなかったんだろう。未咲を襲

うときに放出された魔力が一時的に石槍を作り出し、片山エミリが再び魔力を抑えたことで石槍の形状を保てずに消えたということに違いない。

なんにせよ一般人に魔法を見られる心配がなくなってよかった。勘のいい石破なんかに見られたら面倒なことになるに決まってる。そうだ、早くあいつらを避難させないと。わざわざ生徒会室に行くのも時間がかかる上、俺が一緒の方がかえって危険かもしれないから電話で連絡をとろう。決して面倒というわけではない。

「……………あ、もしもし石破か？ 今校長に会って久しぶりに生徒会室を見たいとか言い出したから鍵閉めて急いで帰れ」

「え？ いや、今日は校長来てないはず、」

「いや、来てる」

計画の前の調査は綿密に、というのがポリシーの石破のことだ。校舎には警備員以外がないことを確認していたから忍び込む日を今日にしたんだろうとは思っていた。

二学期が始まったばかりで運動部の大会とかもまだ無いから休日の部活もないし、補講なんかも無いことは俺も確認済みだ。

「いや、校長先生は奥さんが、」

「来てる」

「だから、」

「来てる」

校舎に誰もいないことを知っている石破を説得するのは時間がかかることは目に見えているから強引にいかせてもらうことにした。

電話の向こうで石破がかなり不満そうな唸り声をもらしていたが最終的には渋々帰ることを了承してくれた。

「じゃ、鍵は月曜に返してくれ」

「……貸しだからね？」

「はいはい」

俺に貸しなんて作っても踏み倒すことは分かってるはずなんだけどな。

とりあえず三人が校舎から出るのを確認したら俺も帰ろう。

このままウエルミの言ったことを無視して片山エミリを未咲を捜すことも出来くはないけど信じたって言っちゃったし……

「なにより悪魔を裏切ったらやっぱり未咲に怒られる」

まずはウエルミに話を聞こう。



「ただいま」

こんな状況でも暢気にただいまなんて言葉が出たことに自分でも驚いた。

ウエルミに言われた通りゆっくりと街を歩いてきたけど、当たり前にも暮らしている毎日が天使によって破壊されるかもしれない割には落ち着いてられたと思う。

俺が管理祓魔師代行という街を守るべき立場だということをウエルミが思い出させてくれたからかもしれない。

普段はうるさく感じる近所のクソガキの騒ぐ声もなくなるかもしれないと思ったら急にもったいなく感じた。

他の祓魔師や悪魔に助力を求めるにしろ求めないにしろ起点は俺。俺が失敗するだけで死人が出るかもしれない。

花氏の名誉を守るために祓魔師と呼ばない、なんてことを行って

いられる状況じゃない。

「とは言っても今から依頼をだしても遅いしなあ」

既に天使は現れている。今から他の祓魔師の到着を待っていたら三日四日はかかる。片山エミリが今までのような消極的な霊素の蒐集をやめ、積極的に、つまり人を襲って魂を奪い出すかもしれないと考えるとそんなに待ってられない。

もちろんその間は俺が時間を稼ぐ、という方法もあるにはある。ただし円滑なやり取りのために代行組織を介して依頼を出すことになるから依頼者である俺が死んでしまったら依頼者不在で依頼は取り下げられてしまう。

そうなる報酬もなくなるわけだからよほど正義感に溢れ実力に自信がある暇な金持ち祓魔師以外は早々に引き上げるだろう。もちろんそんな祓魔師はいるわけがない。

「結局、俺が戦うしかないわけだな」

天使は強力だ。一対一で戦って天使を制することができる祓魔師なんて数えられるほどしかないし、もちろん俺がその中に入るわけがない。

祓魔師を名乗れるとは言ってもランクは最下級。それはつまり人外を見破り一つ以上の攻性魔術を使えるということしか示さない。

これで天使を相手取るなんてレベル1でラスボスを倒そうとするようなものだ。いくらゲームと違って作戦などの要素が入るとはいえ基本的な戦力が離れすぎていればどんな知謀智略も意味をなさない。

救いがあるとすればウエルミと未咲がいることくらいだな。

「ウエルミ、入るぞ」

ある程度は覚悟も決まった。

それならあとは具体的にどうやって戦うかを考えるだけだ。

「ふえっ!？　ちょ、ちよっと待つ、」

「ん?　……お」

一度ドアノブを捻ってしまったらあとは扉を開くだけ。これはもう人間の無意識な合同だからその途中で待つてなんて言われても待てるわけがない。

無意識に対して扉を開くのをやめるなんて意識が間に合うわけもなく扉は開け放たれた。

そしてウエルミも声以上の具体的な行動にできるほど落ち着いていられる状況でもなかったらしい。

結果的に俺の視界には淡いブルーの下着姿のウエルミが飛び込んできた。

学年的には同い年の高校生と比べて豊かな胸に引き締まったウエスト。尻も下品なほど大きくはないが不満を覚えるほど小さくもない。スラリとした長い手足もどこかのモデルみたいだ。ウエルミの身体は成熟した女の雰囲気醸し出して、ことスタイルに至っては未咲よりも優れているかもしれないと思わずにはいられない。

「……………」

さらにウエルミの手はショーツの紐にかけられていて、これから脱ごうとしていたことが用意に想像できる。やけに近くに居るのは扉を押さえようとも思っただのかもしれない。

例えば自分の部屋でも全裸になる理由はないはずだ。ただ悪魔は下着を着用しない文化を持つ。そう考えると部屋で全裸になる習慣があってもおかしくはないのか……?

「えと……」

「あ」

……かなり際どいところまでショーツが下ろされていることに気付いてようやく俺は目を逸らした。

程よく健康的に引き締まった腹部の白さが眩しかったけどなにも言わない。いや、言えない。ヘソにドキドキしたりもしていない。

「えっち……」

「つく……!」

俺が目を逸らした瞬間、すぐさまベッドに飛び込んでシーツを体に巻き付けたウェルミに涙目で抗議される。

「ヘンタイ……!」

「ぐう!」

それなら初めて会ったときのウェルミの態度はどうなんだと言いたくなるけど既に散々からかってウェルミの中でも黒歴史になっているのを知っているからあえてつつきはしない。

なによりノックをしなかった時点で俺のせいなのは明らかだから言い返すことはできても弁解はできない。

「けだものっ!」

「ぐはあっ!」

反省している一方でいいもの見れたとも思い出してしまうから良心に罪悪感という名のトゲがチクチク刺さる。

世の中にはこの罪悪感や背徳感に興奮する猛者がいるらしいが幸

いなことに俺にその素質はなかったようで一安心。

「シスコン！」

「……あ、それは普通に平気だ」

……割と本気で枕が投げつけられた。

そしてウエルミがさらに目覚まし時計を掴んだのを見た俺には部屋から逃げ出す以外の道はなかった。

そもそも最初から部屋を出ればよかったことにはウエルミが着替えを終えて部屋から出てくるまで思い至らなかった。

「えっち」

「いや、悪かったって。まさか全裸になってるとは思わなかったんだよ」

リビングのソファでウエルミを待っていた俺にネグリジェから私服に着替えてきたウエルミが恨みがましそうな目を向けてきた。俺もそれが冗談半分ということは分かっているから軽く返す。

「ぜ、全裸じゃなかったもん！」

「下着姿も全裸も変わらないだろ……というか着替えるのに下着まで脱ぐ必要があるか？」

「あ、汗かいてたかもしれないからついでに！……へ、変なことばしてないからね！」

「変なことこって……いや、言わなくていい。まあ、下着をつけててよかっただろ？」

「う、うん……やっぱり変な感じするけど……」

「慣れろ」

……人間社会の中で普通に生活したいならそれしかない。

ウエルミを含め悪魔たちはいまいち理解してないみたいだけどノ
ーブラはまだしもスカートでノーパンなのは完全に犯罪なんだから
な？

「で、でもオトコノコ的には嬉しくない……？」

「いや、いきなり知らん奴のスカートがめくれてケツ丸出しだった
らドン引きだろ」

「でもタネ君と私は知り合いだよね……？ 初めてあったとき可愛
いって言ってくれたし私のならタネ君は嬉しい？」

ソファアの背もたれ側から身を乗り出してきたウエルミの顔は赤
い。

ウエルミのを見て嬉しいかどうかと言えば……

「つて、こんな話してる場合じゃないだろ！」

「きゃっ」

さっきまでは街をまるごと守ろうって思ってたのに台無しだ！
だいたいウエルミが戻ってこいって言うから未咲を置いてきたん
だぞ。こうして無駄な時間を過ごす間にもかしたら未咲がなにか
されるかもしれないだろ！

「そうだ未咲だ！ 俺のとなりに未咲がいないなんて！ 行くぞウ
エルミ」

「いや、えと、タネ君ダメだって！」

「いや、俺は止まらない！ 未咲待ってるよ！ すぐ助けるからな
！」

「いいから！ もうちょっと、もうちょっとだけ！ そしたら私も
行くから！」

ええい、手を離せウエルミ！

未咲が寂しい寂しいと泣いてたらどうする！

ああ、待ってろよ俺の可愛い未咲。お兄ちゃんが必ず助けてやるからな！

「もー！ 落ち着いていつもみたいになったと思ったらー！ 千枝さんも早く電話くださいよお！」

「ん？」

「きゃ！」

俺が急に腕の力を抜いたためにウエルミがバランスを崩して床に転ぶ。

結構痛そうな音が聞こえた気がするけどそんなことは今は置いて……千枝さん？

「おい、千枝さんってのは……」

「うん！ お義母^{かあ}さん！」

「おい……」

今の変なニュアンス込められてただろ……俺はウエルミを貰う気なんかないからな？

少なくとも俺が認めるくらいの男と未咲が結婚するまで俺は独身を貫くからな！

「それじゃ一生無理だよ……」

「未咲が結婚できないとでも言うのか！？」

「うん、タネ君のせいだね……タネ君が認めるような人なんているのかどうか怪しいよ」

「それじゃ未咲が結婚できないじゃないか！ 未咲もウェディングドレスに心ときめかせる女の子なんだぞ！ 小学生の頃の夢はお兄

ちゃんのお嫁さんだったんだぞ！ 可哀想じゃないか！」

「……ナチュラルにお兄ちゃんのおって書けるあたり似た者兄妹だよ
ね……」

あの頃の未咲は可愛かったぞー。いや、もちろん今でも可愛いけどな。でも小学生の未咲はもう本当に天使……は今の状況にいい表現じゃないか。とにかく可愛かった！ マイ・プリンセス・未咲だったんだよ！ 何をするにもついてきてくれてなー。

「それっていつの話なの？」

「俺が小学校四年生くらいだな。未咲は三年生で。俺たちは幼稚園の頃からその時まで離れて暮らしてたから余計に可愛く感じてなー。いや感じるものにも未咲は可愛いんだけどな？」

でも未咲が日本に戻ってきて俺にずっと私のお兄ちゃんदैいてねって言われたときの俺の感動といたら……あれほど全ての景色が美しく見えた日もなかったよな。

「へー、別々で……意外。二人とも離れ離れで暮らしてたらずぐに死んじゃいそうだけどなあ」

「いや、ウサギじゃないんだしさすがに死には……いや、今なら死ねるな」

未咲がいなくなったたら心配で飯が食えなくなりそうだ。

うん、だから未咲の夫は俺に心配されなくらい強くて社会的にも安定してて性格よくて未咲を愛してて……とにかく立派な奴じゃないとダメだ！

そうじゃないと俺が未咲を心配しすぎて死ぬ。

「昔はどうだったの？」

「あゝ、未咲が戻ってくる前のことはあんまり覚えてないんだよねー。思い出そうとも思わなかったし」

「あ、いや記憶喪失とかじゃなくて、」

ん、電話……？

「あ、タネ？　元氣してる？　なんか大変らしいけどどうなのよ？　あ、こつちと日本じゃ時差あるんだっけ、今大丈夫なの？　というかタネって何歳だっけ？」

受話器を手にとって耳に当てた瞬間、まるで友人に話しかけるような気安さで矢継ぎ早に質問された。

うまく口を挟まないと向こうの独壇場になるあたり、どちらかといえどかなりタイミングかシビアなピッチングマシーンに近い。返事をしてまともな応えが返ってくればヒットだ。

「というか私分かる？ いや、さすがに分かるわよね？ え、もしもし？ 繋がってる？ 繋がってますか？ おーい……まあいいや」

「いや、よくないだろ」

なことになってるって聞いたけど、」

「ちょっとなにしてんのよー！ 仮にも世界的な祓魔師の私の息子が天使ごときに遅れとらないでよねー。あ、でもタネって攻性魔術

一つしか使えないか。じゃー仕方ないかなあ」

「あー……ああ、すまん」

一言返せば四倍の量にして話しかえてくる。それが電話の向この女……それが花氏千枝。俺と未咲の母親だ。

一度離せば誰でも分かるくらいパワフルで強引な性格をしてる。

「まあ、タネは大丈夫。強くなるよ。んでまあ天使だっけ？ 倒すんでしょ？ それなら食卓の裏に封筒貼り付けてあるから悪魔の子に渡しなさいな。ちよつとはタネの助けになるでしょ」

「は？ え？」

そんな重要そうなものがなんで食卓の裏にあるんだよ！
重要じゃなくても食卓の裏に貼り付けるんじゃない！

「あ、ごめん。なんか怪物が出たらしいからちよつと退治してくるわー。じゃ」

「ちよ、え、いや、母さん!？」

「おー、久しぶりにタネに母さんって呼ばれた!」

いや、そんなに喜ばんでも……だいたい久しぶりなのは俺が意識して呼ばなかったりするわけじゃなくて連絡がとれないからだろ……母さんから連絡が来るときは未咲しか家にいない時だし。なんてわざとか。俺より未咲の方が可愛いから仕方ないな。納得だ。

「あ、そーだ。タネ」

「ん？」

「頑張れ♪」

「……おう!」

言われなくてもやってやる。未咲は俺の大事な妹だからな。絶対に助け出して見せるさ。

「じゃ、またね！」

「風邪には気を付けろよ」

どっちが親なのかよく分からない、というよりどっちも子供に思えるようないつもの掛け合いをしてから電話を切る。

母さんは性格の通りパワフルで力強い祓魔師ではあるがところどころ抜けているところがある。

あと一歩というところで転ぶし、オニギリ弁当に海苔を忘れる。炊飯器のスイッチを入れ忘れるくらいのことは週に一度は必ずあると言っている。

子供っぽいし抜けてるし……それなのに戦いになると誰よりも速く飛び出して先陣をきるとか……

「タネ君。封筒ってこれかな？」

「あ、聞こえてたんだな。じゃ、中身見るか」

母さんが用意したなら役に立たないってことはないだろう。話せば話すほど信じられなくなるけどあれでも世界屈指の祓魔師なんだから。

「でもタネ君、帰ってきてから全然慌てないね」

「そうか？」

「未咲ちゃん、心配じゃないの？」

「そんなわけないだろ？」

「それならなんで……」

ウェルミが封筒の中身を出しながら不思議そうに俺の顔を見る。

俺としてはウエルミが不思議そうにしてるほうがよく分からない。

「だって俺、ウエルミを信じるって言っただろ」

「へ？」

「未咲は大丈夫なんだろう？　だったら必要以上に焦らなくていい」

「あの言葉だけで……？」

まあ、そうなるか。

ただウエルミが嘘をつく理由なんてないし、それなら未咲は無事だってことだ。ウエルミだって根拠がないわけじゃないんだろうし、それなら信じて何も問題はないだろう。

「そっか……」

「で、封筒の中身はなんだったんだ？」

ウエルミが封筒から取り出したのは一枚の紙。手書きで文字が書かれているのは分かるけど生憎と内容を読み取ることにはできない。使われている文字が魔界のものだからだ。

「あ……これ」

「なんて書いてあるんだ？」

上から下までを読んだらしいウエルミが息をのんだ。

余程のことが書かれているのかとも思ったけどウエルミは驚いてこそのものの深刻そうではない。

「えとね。この紙には魔法が封印されてて破った人がその魔法を使えるようになるみたい……？」

「……そりゃすごいな」

魔法や魔術は複数の言葉を組み合わせて紡ぎ出す。

例えば俺が使える水弾^{ネリ・トルム}は水という意味の言葉と弾丸という意味の組み合わせたものだ。

もちろん組み合わせるだけなら誰にでもできる。ただし使うとなると話は別で魔法・魔術を構成する言葉を理解しなければいけない。この理解も単純に意味を知っていればいいということではなく、どちらかといえば体の感覚で理解するというのに近い。

だから魔術を一つ覚えるというのは言葉を一つ理解するという意味になる。言葉の組み合わせの数だけ効果はあるから実際に使えるようになる魔術は複数ある。

母さんが残していった紙はその言葉を無理矢理理解させるものらしい。

「そんなものがあるなんて聞いたことないけど……副作用とか無いよな？」

「んー……私も実際に見るのは初めてだけど副作用なんてあるわけないよ。だからビリッと！」

副作用はないらしい……ただ未知のものに遭遇すると臆病になるのが人間というもので、さらに言えば普通は努力して覚えるものをズルして覚えている気がして後ろめたくなる。

とはいえ今まで他の被魔師以上に頑張っても弾丸^{トルム}以外の攻性言語を扱えるようにならなかったのも事実で、それを考えると少しくらい今までの努力が報われてもいいような気も……

「……えいっ！」

「おああ!？」

ビリビリビリッ！

紙の端を掴んだまま考え込んでいた俺に対して焦れったく感じたんだろう。ウエルミが俺の両腕を掴んで強制的に紙を破った。

紙を破った人にとってことらしいけどこの場合破ったのって俺か？紙に触れていたのは俺だけど破るって意思是ウエルミのものだぞ……？

「あ、タネ君見て！」

「ん？」

「ほら、紙が光ってる！」

ウエルミに言われて紙を見ると確かにぼんやりと光っているような気がする。そしてその光を見ているうちに頭の中でなにかがカリとはまった。

「ん……ぴていえ？」

ふと、脳裏に言葉が浮かんだ。

無理矢理知識を詰め込まれるのだと思っていたけど、むしろ既に知っていたものを偶然思い出したときのような自然な感覚だった。

「ウエルミ、ピティエって集めるとか収束とかそういう意味で合ってるか？」

「う、うん……あ、じゃあそれが新しい言葉？」

「みたいだな」

さて、問題はここからだ。

言葉だけが分かっても組み合わせは自分で考えなければいけないし魔術としての特性は使わないと分からない。

端的に言ってしまうえば戦いの中で見つけるしかなさそうだ。

「タネ君。水弾^{ネリ・トルム}はどの程度使えるの？」

「そうだな。同時に十発撃てるけど水量の上限は合計でだいたい五リットルだな。触媒^水があっても上限がなくなって連射ができるようになる程度かな」

「……やっぱり」

「なんか気になることもあるのか？」

「えっ！？ ううん、なんでもない！ ただそれだけ使いこなせてるのはやっぱり千枝さんの家族なんだなって！」

そりゃバカの一つ覚えみたいの一つの魔術だけ使い続ければ熟達して当然だろ。

俺だって最初からここまで使いこなしてたわけじゃないんだし。まあ、もしかしたら人よりも限界値が大きい可能性ってのはあるかもしれないけどな。

「しかし母さんって悪魔の間でも有名なのか？」

魔界からきたばかりのウェルミまでが知ってるってことは魔界にまで名前が知られてると……？

いったい何をしでかせばそこまで名前が広がるんだ。いや、あの人のことなら魔界に行ったことがあっても不思議ではないか……？ もちろん物質の割合が大きい人間は霊的構造体の集合ともいえる魔界に入ることとは不可能だけど。

「まあ、そーだねえ。聞いた話では百人以上の悪魔と契約してるらしいよ？」

「マジか……」

いくら率先して悪魔と契約する管理祓魔師とはいえその数は確かに異常だ。

悪魔人口は世界中でも精々十万を超さない程度。それに対して祓魔師は一千万人はいるとされている。もちろんその中には俺みたいな見習いや悪魔以外の人外を専門としている祓魔師もいる。それでも悪魔より祓魔師の方が多い現状で百人もの悪魔と契約するというのは並大抵のことではないだろう。そもそも、普通の祓魔師の一生の間に会える悪魔の人数の平均が五十人程度。契約するとなると十人でも多い方だろう。そこから母さんの異常さが分かる。

ちなみに少し俗な話だけど保護・支援するという名目で悪魔と契約した場合、管理祓魔師は国から悪魔一人につき月額五万円を支給される。その半分は悪魔に支給することが義務付けられているものの、それでも母さんに支給される額は月に二百五十万円。もはや働く必要すらない。

もちろんウエルミの言うことを信じるならだし、さらにその百人のうちの何割が保護・支援の契約を結んだ悪魔なのかは分からない。何が言いたいかと言うと、それだけ貰ってるのに俺の月のお小遣いが五千円ってのはさすがに少ない気がする。というかウエルミが来月から受け取ることになる支給額の二割だぞ？

バイト？

未咲との時間が減っちゃうじゃないか。

「さてと……行くか」

「あ、その前に私からも渡さないといけないものがあるんだった」

「またパワーアップアイテムか？」

なんかゲームのラスボス前みたいだな。村長が三番目に強い伝説の剣くれたり雑貨屋のおばちゃんが秘薬をくれたりとかそんな感じの。

「そこまでスゴいものでもないんだけどね……タネ君がっかりするかも」

む、俺の期待が大きすぎたのかウエルミが少し気まずそうに笑う。でも戦闘に役立つもののはずだからやっぱり期待はするぞ。なんて悪魔から貰うものだからな。

古今東西悪魔から受け取る物はスゴいお宝だと決まってる。

「やー、お宝じゃないんだけどさ。はい、これ」

ウエルミが懷から取り出したのは目視するのも難しいほど細かな模様が描かれた三枚の紙。

模様は細かく、俺じゃ読み取することは出来ないけど呪紋なんだろうという推測はつく。

「効果は？」

アンチ・マテリアライズ

「強制的な物質化解除と次元歪曲。天使を魔界の牢獄に幽閉するためのもの……もともとは人間界こっちで問題を起こした悪魔に使うものだったんだけどね」

「なるほどなあ……それにしてもすごい効果だな」

強制的に物質化を解除するのは天使に抵抗されるからその強力な魔力に打ち勝たなきゃ達成できない。次元歪曲に至っては物質世界と霊的世界という本来なら決して交わることのない二つの世界を繋げる大魔法だ。それがこんな小さな紙に込められているとは……

「でもなんで俺に？ 天使に使うなら魔力の量が多いウエルミが使った方がいいんじゃないか？ 俺だと十中八九天使の抵抗に打ち勝てないぞ？」

「大丈夫。それは特別製だからタネ君の魔力は必要ないの。ただ地面に押し当てて相手を封印するって意識すればそれだけで発動するよ」

ただ一分くらいのタイムラグがあるからそれまで呪符を守らないといけないけど、と付け足してウエルミは学校のある方向に目を向けた。これから起こるだろう天使との戦いを想像しているのかもしれない。

天使も悪魔も同等の魔力量を誇る。そんな存在がまともに戦ったら酷いことになるかもしれない。倒すことじゃなくて封印することを選ぶのもウエルミが本気を出せないからだろうな。

「ま、俺が頑張るしかないか。未咲は俺の妹だし、この街には俺達の家があるんだからな」

「わ、私だって未咲ちゃんと友達だもん！ それにいずれはこの家は私の家になるんだし……」

……これから冗談ではなく何千人の人間の命を懸けた戦いが始まるっていうのに緊張感を吹き飛ばすようなことを言っただけで頬を染めているウエルミは見なかったことにした。というより聞かなかったことにした。

まあ、俺もかなり緊張感を失ってると思うけど……緊張で思考が固まるよりかはいいことだと思っておこう。

第十一話（前書き）

そろそろ第一章クライマックスですねー。

第十一話

……………いや、確かに緊張しすぎないのはいいいことだと思うぞ？
過剰に緊張していたら視野狭が狭くなって大事なことを見逃すし、
とっさの判断もできなくなるからな。

しかし……………しかしだ、

「だからといってこれは緊張感が無さすぎるだろう……………」

目の前にあるウェルミの横顔を見ながら呟く。

横、ではなくて目の前だ。それもあえていうなら上。

「だってタネ君が自己加速の魔法使えないから……………」

「し、仕方ないだろ。どんなに試しても使えないんだから！ それ
に攻性言語は弾丸^{トルム}しか使えないって言ったじゃないか……………」

「うーん……………まあ、そればかりはタネ君のせいじゃないもんね」

「はつきり才能がないって言われた方がましだ……………」

「えっ！？ あ、ううん！ 違くって！」

フォローされても余計にへこむだけだ。さき覚えた収集^{ヒティエ}が二個目
なんだからな……………これで世界最高峰の祓魔師が母親なんだから情け
ない。

「だでもタネ君ぐためにこうしてるんでしょ？」

「……………戦いの前に心が折れそうだ」

「えへ。私はイロイロと漲ってきたよ？ こんな機会なかなかない
もんね♪」

「しょっちゅうあったら嫌すぎる……………」

美少女と言っても差し支えない女の子にこんな……………こんな……………

プリンセス・ホールド

「お姫様抱っこだ？」

「言葉にはしたくない微妙な抵抗を察しろ！」

「まあまあ、誰にも見えてないんだしいいじゃん♪」

そういう問題じゃない……いや、待て、やめろ、落ち着け、認識
障害を解くんじゃない！

……認めたくないけど現状において俺は完全に弱者だ。ウエルミ
の気紛れで今の俺の姿が世間に知られる。

学校に急がないといけないから加速しているウエルミに運んでも
らうしかない。おまけに人には見えないように認識障害までかけて
もらっているんだから文句は言うべきじゃないのも分かってる。

それに背中に負ぶさるよりお姫様抱っこ前に抱えてもらうことを選んだのは俺だ。もち
ろんいざという時にウエルミが投げ捨てられるようにって考えがあ
るんだけど。

ウエルミにしか見えてないんだし、ウエルミが変な誤解をすると
も思っていないから冷静に考えてみれば本当は何も問題はない。

それでも俺が抵抗するのは……

「タネ君、顔赤いけど……もしかして調子悪いの……？」

……調子は悪くない。それどころかさつき魔術をひとつ使えるよ
うになった影響か、身体の中の魔力が活性化しているようすら感じ
られる。

俺の顔が赤いのは……より正確に言えば、俺が恥ずかしがってる
理由は一つしかない。

「……いい匂いするんだよ」

「え？」

秋空の下、俺達は全力疾走している。相対的に吹き付ける風も強くなっている。周囲の匂いなんて気にしてられないような状態だ。

……それでも嗅ぐことができる匂いといえば一つしかない。

首筋がチリチリするような感覚を覚えながら覚悟を決めた。

「ウエルミの髪の毛がな……」

「ふえ！？ えー！ー！ー！？ ……あ！？」

「おわあ！？」

俺の言っている意味に気付いた瞬間、ウエルミが俺を上にもぐり投げた。

筋力ではなく魔力で投げられた俺の体は十メートルを超す高さで一度止まって……

「うおおおおお！？」

自由落下を始めた。

いくら恥ずかしかったからって投げることないだろ！

死ぬ！

天使と戦う前に俺死んじゃう！

「タネ君！」

下にいたはずのウエルミの声が真横から聞こえ、俺の体はいつの間にか脇に抱えられていた……女の子にお姫様抱っこをされた挙句に片手で軽々と抱えられるなんて、この数分間で俺のプライドはズタズタだ。

文句を言おうとしてウエルミの方を向き、そしてその深刻そうな表情を見て何かが起きたことを悟った。

「罨がはられてたみたい」

ウエルミは地面ではなく街路樹の枝に音もなく着地。そして、俺達が走っていた場所を見ると十数本の石棺がアスファルトを突き破って屹立していた。あと一秒でも反応が遅ければ串刺しにされていたかもしれない。

そうならなかったのはウエルミが罨の存在に気付いてくれたお陰だ。きっと魔法が発動する兆候を刹那に感じとったんだろう。罨も魔法の兆候の察知も人間には真似できないから……不本意ではあるけどウエルミに抱えられていて正解だったかもしれない。

「……相手は石を操るみたいだね」

……あ。

「ああ、うん。すまん、言い忘れてた」

「もー、タネ君知ってたなら……ううん、知ってても変わらないかな」

どうしようかとウエルミが地面を睨む。

「学校までずっと罨が続いてるのか？」

「……多分。それも一種類じゃなさそうだね」

ウエルミは人間には見ることができないものを見ているかのような目付きで学校までの道を辿っていく。本当にどうでもいいことだけど学校までの道は覚えてたんだな。

「もう、覚えてるよう！」

「いや、すまんすまん……それで、どうする？ このまま木の上を

移動するか？」

街路樹は学校に着くまでずっと続いてるはずだ。

「うーん……でもその状態で学校に近付いたら狙い撃ちにされちゃうから……」

「確かに」

「罠を強制的に発動させちゃうのと近くのビルから校庭まで直接飛び降りるのどっちがいい？」

学校に一番近いビルっていうとSTC本社ビルだよな？

軽く見積もっても五十階はあるし距離も一キロくらい離れてるぞ？

「無茶じゃないか？」

「できるでさる。任せてよ♪」

「……早いのはどっちだ？」

「ビル」

「安全なのは？」

「罠は発動させきれないかもしれないし、ビルからだど気付かれた攻撃されるからどっちも同じくらいかなあ？」

ウェルミは軽く言うけど人間としては両方とも等しく死ぬ危険性があるってことだ……それなら早い方が危険が少ないかもしれないな……というか冗談じゃなく急がないと。

未咲が無事というウェルミのことを信じているけど心配なのは変わらない。それにウェルミが言ったのは殺されないというだけだ。傷つけられるかもしれないし、結果的に死んでしまうこともあるかもしれない。

「ビルのが……いいよな……」

「じゃあ行こっか、お姫様？」

「俺はさっきみたいに脇に抱えられてもいいんだけど……」

「却下！」

「じゃあ、やっぱり罨を解除する方向性で、」

「だから、却下♪」

お姫様抱っこ、気に入ったのか？

どうせ気に入るならする方よりされる方にすればいいのに……いや、やってやるとかそういう話ではないけど。

「タネ君はお姉さんの香りを堪能しなさい♪」

「……キラじゃないって」

顔、赤くなってるしな。



「うわ、風つよい」

「このビルはここら辺で一番高いからな」

風ってのは基本的に高い場所の方が強くなる。しかもSTC本社ビルの周囲には半分ほどの高さのビルしかないから風を遮るものがないもない。地上から今いる屋上までと高さは二百メートルくらいありそうだし風速も何倍かにはなってるんじゃないか？

「それにしても絶景だな」

立ち入り禁止の札を無視して腰の高さほどの手すりを乗り越えろと街がミニチュアの用に見える。忙しなく歩く人はまるで……

「人がゴミのようだねー」
「こら」

不吉なことを言うんじゃない。それにどうせなら俺が言いたかった！

まあゴミというには小さすぎて……あえて言うなら働き蟻が近いかもしれない。

ふははは！ この国の経済を支えるために頑張ってくれたまえよ！
「ん？」

視界の一部が歪んで……？

それにまた首筋がチリチリする。下を見すぎて頭に血が上ったか？でも視界の歪みの位置は同じ。他の方向を見ると普通にビルから見る景色が見える。となると俺の目のせいではなくて……

「……ウエルミ、あそこ、なにか見えるか？」

「ん？ どこー？」

「ん、見えないか。なんか景色が歪んでるように見えるんだけどな」
「え……？」

歪みの中心点、ビルの端から頭を突き出してギリギリ見える位置を指差した。

歪みを注意深く見てみると水面のように揺らいでいるのが分かる……光の屈折だとすると建物の中から暖かい空気でも……

フィテイルト

「氷盾！」

「おわ！？」

ウエルミ、いきなり耳元で大きな声を……

ガキユイツ！

「なっ！？」

ウエルミが作り出した氷の盾が高速で飛来した弾丸を受け止めた。氷に食い込んだそれは河原に落ちていそうな手の平サイズの小石。教室に突入したときに飛んできたのと同じだ。

信じたくはないけど俺達は攻撃を受けてるらしい。

「遠隔攻撃……そっか、ビルも石で作られてるから……」

次々と放たれる礮弾を花のような形をした氷の盾で防ぎながらウエルミが少しずつ後退する。

この屋上から学校までは一キロほどの距離がある。石を媒体にして射程を伸ばしたんだとしても滅茶苦茶すぎる……

「タネ君！ このまま真ん中まで戻ろ！」

礮弾はビルの壁面から放たれているみたいだから当然射出角度に制約がある。ちようど手すりを越えた辺りで砲撃は止んだ。

「いやぁ……驚いたな」

「驚かされたのは私だよ！」

「お？」

追撃はないと判断したのか、油断なく意識を集中させていたウエルミが氷の盾を消して俺が座った場所まで歩いてきた。

一先ずは命拾いしたみたいだけど……ウエルミはなにに興奮してるんだ？

驚いたというなら俺も相当驚いたんだけどな。

「タネ君あれが見えたの!？」

「あれってなんだ？」

「えと、魔法になる前の魔力って言えば伝わるかな……普通とは違うものを見たんだよね？」

さっきの歪みみたいなやつのことか？

どうやらウエルミの口ぶりからすると普通は見えないものこのことらしい……というか俺にもさっき見たのが初めてだったから予想通りでもあるけどな。

ただ、どちらかといえば風邪で視界が狂ってたわけじゃないことに安心した。未咲を助けるってときに体調が万全じゃないなんてゾツとしない……

「でも悪魔だって兆候は分かるんだろ。そんなに驚くことなのか？」

「スゴいよ! 視覚的に基点を捉えられるなんて! 私だって嫌な予感がするくらいだもん!」

「ほ……ま、嬉しい誤算ってところだろ？」

「うん、じゃあ私も張り切っちゃおう!」

じゃあ？

というかそんなことより悪魔のウエルミが本気なんか出したりしたらヤバいんじゃないのか!？」

当然、向こうは手加減する理由がないから本気で魔法を使うだろうし……悪魔と天使の正面衝突とけ洒落にならないかもしれない……

「タネ君、とりあえず水を集めてみて」

「ん、ああ……水よ、集まれ」
ネリ・ビティエス・イレ

収集は初めて使う攻性言語のはずなのに使い慣れている日本語のように自然に発音することができた。

軽く前に伸ばした両手の先に水が生まれ始める。

「ん……？」

「どしたの？」

「いや、これ本物の水だ」

普通、魔法や魔術でいうところの各属性——水や火、風などはこの物質世界でいうところのそれらと同じものじゃない。物質化することですべて擬似的に同一の特徴を持つようにはなるけどそれも一時的なことだ。

それなのに両手に集まり続ける水は本物……どういうことだ？

「収集は攻性言語ってことにはなってるけど実際には攻撃魔法を補助するための媒体を手に入れるためのものだからね。まあ、悪魔で使ってる子は見たことないけど……」

「そもそもあれほど魔力あれば媒体いらないもんな」

……あれ？

じゃあなんでウエルミは水を集めさせたんだ？

水は氷の魔法の媒体にもなるけど……必要あるのか？

「まあ、見ててよ」

貰うねー、と軽く言ってウエルミが俺の集めた水を自分の目の前に移動させた。俺が空中に留めていたときはふよふよと不定形だったのにウエルミが操りだした途端に綺麗な球体になる。これも技術の差なんだろうな。

見るだけで制御の方法が理解できるとは思っていないけど、それ

でも自然とウエルミに注目してしまう。

「た、タネ君……見すぎ。照れちゃう……」

「あ、悪い……他人が魔術を使うところなんて見たことないからな」
「魔術じゃなくて魔法だよ。でもそれならタネ君の魔術は我流なの？」

……ややこしいな。最初にツツコミを入れたのは俺だけだ。

「いや、一応は母さんに教えてもらったけど……」

母さんの魔術は構成からしてかなり強引で大雑把、その上構築の早さは誰よりも早かったからまったく参考にできなかった。

だから基本的には自分で資料を漁って覚えた魔術を母さんに見せてアドバイスを貰う形だったな。

「ふうん、それなら私の魔法が初めてなんだね……ますます頑張っちゃおうかな♪」

「ま、街を壊さない程度にな……?」

「分かってるよう!」

ウエルミはむむむと唸り声をあげたあと目を瞑って胸の前の水球に意識を集中させた。

それでも拗ねているのか唇は尖っているけどやぶ蛇になりそうだから黙ってよう。

「……凍れ! フクテニクイレ ヴエダ 棘! エルテ 複写、アックス 膨張、テナン 変形——」

ウエルミの言葉に合わせて球体だった水が凍り、一面から棘を生やし、増え、膨らみ……最終的には雄々しい西洋の竜が具現化され

た。

もちろん本物の竜ではなく形だけのハリボテだけど……威圧感は十二分にある。

「すげえ……」

氷の竜は本当に動き出すのではないかとくだらない妄想を抱くほどに精巧に造られていた。氷の彫刻ではなく冷凍保存した竜だと言われた方が信じられる。

どんなにそれっぽくなくても悪魔は悪魔か……

「ありがとうー♪ でも本番はこ、れ、か、ら……ふふ♪」

普段は似合わない言動なのにこういうときだけはむしろしつくりする。狙ってないでやってる時はウエルミに照れがないからかな。さて……ウエルミはどう俺を驚かせるんだろう。

「……一匹の氷竜」
ウン・フイテンクルアト

ウエルミの最後の一言は今までの声高な詠唱とはうってかわって静かだった。

しかし、それがもたらした変化はこれまで以上に大きい。最初は地鳴りのような……そしてやがて周囲の空気を吹き飛ばしそうなほどの轟音。その音の発信源はまさしく竜の彫刻だ。

「……吼え、た？」

「うん。一時的に竜の意識をこの中に封じ込めたの。意識の持ち主は私が魔界で飼ってるペットだから安心して」

「竜が……ペット……？」

「うん。ねー、くーちゃん！」

ウエルミがその氷の竜のクーちゃんの背に飛び乗ると、彼……もしくは彼女が喉の奥からクルルクルと声を漏らした。

そんなほのぼのとした空気とは反対に、その竜は流麗にして冷厳。そんな言葉が似合うような姿だった。動く前まではただ感嘆の対象だったものが一時的にはいえ意思を得たことで畏れにも似た感情が自然と沸き上がる。

悪魔や天使も人間よりよほど強い存在だけど、この竜ほど遠い存在ではない。人の姿をしているかどうかだけでここまで変わるのか……

「どしたの？ 早くのってよー」

ただ呆然と立ち尽くしているとウエルミを乗せた竜が静かに寄ってきて俺の目の前で丸太ほどの四肢の膝を折り、絨毯ほどもある翼を畳む。

乗ってもいい、ということか？

いや、主人であるウエルミが乗れって言うてるんだからいいんだろうけど……

「その前に、こいつのフルネームは……？」

「え？ えっとクーデレちゃんだよ？ これでもまだ四歳の女の子だから怖がらないであげてね？」

「あ、ああ……」

そっか、クーデレ……ああ、クーデレか！

確かにウエルミに対して素直だし、俺が乗るのを大人しく待ってくれている。確かにクーデレの素質はあるかも……

「グルルルル……」

いや、ないな。絶対ない。

だって俺のことを面倒だから早く乗れよみたいな目付きで睨んでたし！

しかも明らかに唸ってた！

「ほーらー！ はーやーくー！」

「お、おう……クー、乗るぞ？」

翼の付け根に手をかけてなんとかウエルミの後ろの空いている鞍に跨がる。氷で作られた身体のはずなのに寒さは感じず、むしろその身体からは血の通った体温を感じた。

「くーちゃんを呼び込みやすい体を作るのに氷を使っただけだからね。くーちゃんの意識が宿った時点で氷じゃなくなってるから」

「んん……？ 見た目は氷のままだぞ？」

「うん。見た目以外は氷じゃないの！」

よく分らんけど……まあ、凍えないで済むならそっちのほうがいいか。

ウエルミが作り出した氷がどう変わったのかのかを考えるのは今じゃないだろうし。

「じゃ行くよー！ くーちゃんお願い！」

ウエルミが声をかけるとクーが一声鳴いて翼を広げた。象ほどの大きさもある巨体はその重さを感じさせないままにふわりと浮かび上がり学校に向かって滑空する。

それなりの速度なのに風圧を感じないのは何かの魔法の効果が働いてるからなのかもしれない。

「タネ君。さっきみたいな変なもの見たら魔術で撃ち抜いてね。私は突入の準備するから」

「ああ、って早速……！」

前方数十メートルよ距離に浮かんだ空間の歪みに向けて拳程度の大きさの水弾を放つ。

内心で密かに心配していた魔力同士の反発による爆発は起きず、歪みは呆気ないほどに消えた。

「魔法は魔力の流れが乱されると不発になるからもっと小さな弾でも平気だよ」

「でも念には念をだな……」

「うーん……ここで楽をしたからって未咲ちゃんが助けられなくなるわけじゃないよ？」

「……ウエルミ、意外と鋭いかもな」

俺自身が意識してなかった気負いを指摘してくれる……分かってる。

——必要最低限の魔力で必要最低限の効果をだす。

そんな当たり前のようなところ魔術に携わる者にとっての基本だ。最低限の魔力で最大限の効果を狙っても必ず誤差が生まれる。逆に至ってはただの魔力の無駄遣いだ。

だから今は未咲を助けるために力を抜かなきゃいけない。

「よかった……ウエルミがいなきゃ未咲を助ける前に死んでたかもしれない」

「それは大丈夫……あの子は無闇に人を傷つけたりしないから……」

「あの子……か」

「あっ……」

「だから未咲の時も大丈夫だって言ったのか？」

ネリ・トルム

水弾を撃ちながらの問いかけにウエルミがうつむく。

……どうして悪魔のウエルミが天使である片山エミリを知ってるんだ……？

「天使も魔界から来てるんだな？」

こちら側の世界に来たばかりのウエルミが俺たちより先に天使と、それもついさっき確認されたばかりの片山エミリと知り合うのは考えにくい。

だとするなら人間界に来る前、つまり魔界で知り合っていたと考えるのが自然だ。もちろん天使の世界と魔界が繋がっているという可能性もあるけど……どちらにせよこの世界と繋がっているのは魔界しか確認されていない。だから二人は魔界で知り合う以外の可能性は薄い。

ただ気になるのは未だに世界の共通見解が『天使がどこからくるかは不明』となっていることか……魔界から来ているんだとしてどうして悪魔たちはそれを隠すんだ？

「ごめん、エミリとのことはなにも……」

「それは俺が信用できないからか？」

我ながらセコい聞き方だと思う。人間のこと好きな悪魔にこんな聞き方をしたら苦しめる。それを分かった上で質問するのは未咲のためだ。

もしウエルミが片山エミリのことを思うあまり未咲は無事だというなら救出を急ぐ必要がある。ウエルミが嘘をついたとは思ってもないけど無意識に願望が言動を変えることはある。つまり片山エミリに未咲を傷つけてほしくない、というのが片山エミリは未咲を

傷つけないというように……

「ちがっ……ううん、こんなこと信じてもらえないよね……だって、私とエミリは友達だったんだもん」

「まあ、俺にとって重要なのは未咲の無事だからそれさえ確認できればな」

未咲の安否に比べたら天使がどこからくるのかとか片山エミリとウェルミの関係とかはどうでもいい。それに聞きたくなったとしても未咲を助けたあとでゆっくり聞くな。

「で、どうなんだ？ 未咲は無事だと思うか？」

「……ごめん。わからないよ……むかしのエミリなら絶対に必要以上で怪我させない。でも……」

「でも？」

「エミリの翼が黒くなってたら……わからない……」

翼の色……天使の羽は白いって言うくらいだから黒くなると墮天使か？

もともと悪く言われてる天使が堕ちたらどれだけ残虐になるんだよ……八年前の天使だって翼が黒いとかは特に伝えられてないってことは白かったんだよね？

あの事件がここ半世紀で最も被害を出したって言われてるわけだし……なら、八年前と比べたら断然おとなしい片山エミリも白いはず……多分。

「あ、あのねタネ君！」

「ん？ ……っと危ね」

前に座るウェルミの影になって見逃していた歪みを撃ち抜きなが

ら話を促す。

「話せないことがあるのはタネ君のせいじゃないの。その……魔界にも決まりがあつて」

「天使のことは話しちゃいけないって？」

「ふえ？ ……な、なんでわかったの……？」

そりゃ、どうも天使は魔界から来てるはずなのにそれが悪魔から語られたことはないってことは悪魔が口止めされてるからしかないだろうよ。

もちろん契約とかを利用すれば聞き出そうと思えば聞き出せるだろうけどそこまでして知りたい話でもないな。

「ま、話せるようになったら聞いてやるよ」

「うん！」

「というかそれまで生きてられないかもな……」

「うん？」

魔法の前兆が見えるおかげで行程が目前というところまでは順調に接近できた。目算でも残りは五十メートル程度だろう。

ただ、ここまでまったくの無傷で到達したことが相手を焦らせたのかもしれない。

「タネ君、どうしたの？」

「いや、なんというか……」

今まで散発的だった歪みがここに至って整然と並び始めている。それは最早俺の視界を埋め尽くすほどで小さいのが沢山あるのか大きいのが一つだけあるのかすら分らない。

俺が水弾^{ネリ・トルム}で消せるのは一度に十個が原因だから焼け石に水だろう。

この状況をウエルミに伝えるなら……

「ウエルミ、前方に歪みが沢山あるからまとめて吹き飛ばしてくれ」

「え、ええ！？ ど、どれくら、」

「信じてるぞ？」

「ふぁ……うん！」



「ん……うう……？」

突然の轟音に意識が覚醒させられた。

目を開いてもなにも見えないような暗闇。

「ここ、どこ？」

黴臭くて肌寒い……風はないから室内だとは思うけど……手足が拘束された状態で地面に座らせられているから分かりにくい。

床がざらざらしてるからコンクリートを直打ちしてる部屋かも。

学校内だとすればいくつかある倉庫の内の一つかな。

私がこんなことになってるのは兄さんと別れた途端に桐野舞子に不意打ちされたから。逃げようか兄さんを追おうか迷ったときに右足を貫かれて、その時に殴られたか何かで気絶したのかな。

「まさか桐野舞子が幽霊じゃなくて天使そのものだったなんて……」

強い気配は感じなかったから見事に騙された。最初から人間だとは思ってなかったけど城南高校は立地的にも混ざり者が多いから気にしてなかったし……だから彼女が幽霊だって兄さんに言われたときはすぐに納得できた。それほどまでに彼女の人外の気配は薄かつ

たから。

「兄さんのポンコツ……」

そもそも兄さんが私に余計な先入観を植え付けなければこんなことにはならなかったかもしれないのに……！

「まあ……自業自得かな……」

母さんと違って魔術は使えないけどそれでも感覚は普通の祓魔師よりも優れている。だから兄さんの間違いには私が気付かないといけなかったのに……

そして気付けなかった結果、こうして真っ暗な部屋に監禁されている。それもしつかりと手足を拘束されて……

後ろ手に回された両腕からは冷たい感覚がするから手錠がはめられてるんだと思う。それも手首と肘の上の二ヶ所。両足は全く動かないし、感触からして太腿から足首までベルトみたいなもので縛られてるのかも。

力が込められないようにされている辺り、私を拘束した相手はかなり手馴れているみたい。

「でも魔法が使われてないならこの程度の拘束……」

力が上手く入らないように縛られてる脚は後回しにして、まずは手首の拘束具から壊そうかな……

手錠の鎖ごと引き千切れないこともないけど輪が肌に食い込んで痣になりそうだから手首のものの鎖を指で潰して連結を解く。肘につけられてるのはどうしようもなさそうだから腕力で引き千切った。自由になった両手で脚の拘束具を壊して……

「これで晴れて自由の身、と」

ブレスレットみたいになってる手錠も壊して外して放り投げる。

私も魔術を使えるんだと勘違いしたから魔法じゃなくてこういう拘束具おもちゃを使っただろうけど……素直に魔法を使っておけばよかったのに。

もし魔法で縛られてたらどんなに低レベルなものでも私じゃ外せなかった。でも物理的な拘束なら私には意味がない。私の方が存在としての強度が強いから。

「そう、だから私は決して力が強いんじゃない！」

と、ふざけてる場合じゃなかった。とにかく早く逃げ出して兄さんに会わないと。

私が電話で黙り込むだけで兄さんは変なこと想像して怒るのに浚われたなんてことになったらどうなるか分からない……もしかしたら怒りすぎてかえって冷静を装ってるかも。それで無茶なことをしでかして……

「一刻も早く兄さんに会わないと！」

ウェルミさんも倒れてるなら兄さんを止められる人が誰もいない！

兄さんバカだから天使にだって真正面から挑みそうだし、私は直接兄さんを助けられないけど落ち着かせることはできるはず。

とにかくここから抜け出して……

「……あれ？」

なんとか手探りで探り当てた扉はうんともすんとも言わない。

普段の力を抑えてる私なら何も不自然なことはないんだけど……

ということはこっちは魔法を使ってるってこと？

「……焦れたいなあ！」

半歩さがってから気合いを込めた回し蹴りを扉に放つ。

「……ったゝゝ！」

扉はびくともしないでむしろ私の蹴り脚が痺れた。

「もう……どうということ？」

扉の強度を高めるだけの魔法なら蹴破れるはず。扉が壊れないようにされていたとしても周りの壁ごと壊せると思うし……うーん、兄さんと一緒に魔術を勉強してればよかったかな？

魔法が原因ならもう一つ手段がないこともないんだけど……

「あれは……恥ずかしいからヤダ」

誰に言い訳するでもなく、間違えても私自身がその手段を肯定しないように釘を刺す。あれは、絶対に、ダメ！

扉が開かない程度で私の羞恥心を売るわけにはいかない。それなら建物ごと壊して脱出する方が……

「あ、そっか。壁を壊せばいいのか」

そうと決まれば……

「せー、のっ！」

再び回し蹴りを放つ。

ただし、今度はさっきの扉から一メートル横の壁に。

物質的な硬度は扉より壁の方が上。だけど魔法がかかっていないなら私にはどれも同じ。私の右足は鉄筋をぶちぶち引き千切りながらコンクリートの壁を砕く。

「うわ、眩し……」

あり得ないけど壁を蹴破った右足に傷がないのを確認して、壁の大穴から廊下に出る。

「部活棟の倉庫だったんだ……っ痛!？」

「きゃっ!？」

突然、鈍く痛み出した腕を見ると右腕に青痣が……兄さんに気付かれたら怒られちゃう。

ってあれ？

今、私以外の声が聞こえたような……というか他人の気配もする。今日は誰もいないはずとかそういうのは後回しにして……これは、いけない。

学校内での近付きにくいけど美人な一年生っていう周りの評価はできれば目立ちたくない私にとっては望ましくないけど、それでも昔みたいな怪力女よりかは数千倍マシ……もし私が壁を砕いたのを目撃されてたら……

そんな私の危惧は相手を見た瞬間に払拭された。

されたけど……その代わりに違う問題が生まれたかもしれない。

「……あ、どうもー」

「……あの、幽霊、ですか？」

我ながら頭の悪い質問だとは思う。それでも聞かずにいられなかったのは長い黒髪の少女の足が透けていたから。

「え、私が見えるの!？」

「……見えないのに話しかけるわけじゃないですか」

第十一話（後書き）

今月始めに全文改稿をしたばかりですが未だに表記揺れが目立つのでまたやらないとダメそうですねえ

第十二話（前書き）

今回は少し早めでしたね！
VS 天使前編です！

第十二話

「いってえ……」

「あたたた……失敗失敗……」

「失敗って……あのなあ……」

校庭の土が舞い上がる中、俺とウエルミは備品倉庫の陰に隠れていた。

あの時——つまり俺には対処できない量の歪みが生まれたとき、ウエルミがとにかくメチャクチャな威力の魔法を使って空間ごと歪みを消し飛ばした。ゲームなら戦略級、とか大軍殲滅、とか言われるレベルだった気がする。

魔法を物質化していなかったから歪みを打ち消した反動による突風だけで済んだけど、もし物質化を伴った魔法だったら校庭の半分ほどは決れ、さらにその周囲も数十メートルにわたって凍り付いていたかもしれない。

……そういえばウエルミの称号は氷の第三級。初めてあった日、喫茶店でウエルミ本人は他の悪魔より器用だったからなんて言ってたけど器用なだけでそれだけ強力な魔法の使い手と認められるわけがないよな。

そして気が付いたら俺とウエルミは空中に放り出され、慣性の法則に従って校庭に墜落していたわけだ。

「というかクーはどこに消えた……?」

気付けば俺たちが墜落する羽目になった原因である竜がいなくなっている。目を凝らして土煙の中を覗いてもその巨体は見当たらない。ウエルミの魔法に驚いて逃げたか?

「あ、くーちゃんなら魔界に還したよ？」

「え？」

「ほら、さっきの魔法を使うには時間が足りなかったからタネ君に用意してもらった水を……ね？」

「ああ、なるほど」

ウエルミの説明はかなり端折られていたけど言いたいことは伝わった。

つまりウエルミはクーの意識を魔界に還して、空になった体を――正確にはその中に含まれていた水を媒体にして魔法を使ったと言うことだろう。

「要するに俺が痛い思いをしてるのはウエルミのせいだと……」

「で、でも急いでたから仕方ないじゃん！ 私だってちゃんと痛い思いしてるし！ ……それに歪みがどの程度広がってるかも分からなかったからなるべく広範囲に影響を与えようと思って……」

「広範囲、ねえ……まあ俺たち以外に被害がないからいいけどさ……」

いくらなんでもあの範囲が広すぎだっただろ……これで校舎を破壊していたりしたらどこかにいるはずの未咲が巻き込まれていたかもしれないし、解決してから事後処理でも頭を悩ませることになってただろうな。

でも罨が張られた空域を飛び抜けたのに致命傷もないまま突入できたってのはベターな結果かもしれない。

とにかくまずは未咲を探し出して、

「随分、無茶をするのですね……」

「エミリ！」

「妹さんを閉じ込める間に乗りこまれるとは思っていませんでした」

晴れつつある土煙の向こうから聞こえた声にはウエルミが真っ先に反応した。

どうやらウエルミの言う通り片山エミリは未咲を必要以上に傷付けていないらしい。生きているなら無理に助け出す必要もない……もちろん、未咲の救出は最優先だけど。

「さっきの魔法はウエルミですか？」

「そ、そうだよ？」

親しみが込められた微笑みにウエルミが少したじろぐ。ウエルミの話しでは魔界での二人は友人関係にあったらしいから理解出来なくもない。ただ、この状況にはかなりそぐわない表情だ。

片山エミリはその表情を消し、今度は呆れたというような様子でため息をついた。

「らしくないですね……まあ、そのお陰でウエルミを傷付けずに済んだのでしょうけど」

「ぐ……らしくないっていうなら滞空魔法だってエミリらしくないじゃん！ 苦手なくせに！」

「必要なことならなんでもしますよ」

「なら私だってそうだもん！」

えーと……どうなってるんだ？

問答無用で攻撃されても慌てないように準備していたのに目の前の光景はただの口喧嘩……いや、それ未満。ただの友達同士の会話だ。

「……ん？」

あ、これなら未咲を探しに行けるんじゃないか……？
よし、二人ともそのまま大人しく……

「生徒会長……タネさん、動かないでください」
「ぐっ……」

だめか……いや、でも行きたい！
今までは我慢してたけど一度行けそうだと思ったからもう耐えられない！

ああ、未咲！
怪我してないかとか寂しくて泣いてないかとか不甲斐ない兄ちゃん
でゴメンとか言いたいことがどんどん溢れてくる！

「あなたの妹は人質です。私の要求を飲んでくれるなら喜んでお返し
いたしましょう」
「……要求？」

ふざけてられる状況じゃないな……いや、もちろん未咲への想い
に嘘偽りも冗談も含まれていないけど。

「ええ。タネさんだけでなくウエルミですが……私の邪魔をしな
いでください」

「桐野舞子の蘇生……だな？」

「はい」

「それなら……」

……蘇生は限られた悪魔にしか認められていないから本来なら認
めることは出来ない。

天使がどうなのかは知らないけど天使だからって許していいわけ
でもないし、悪魔のお目付け役でもある祓魔師にはそれを止める義

務がある。人外に対しての警察官というところか。

ただ、まあ、なんというか条件によっては認めてやらないこともないというか……だって未咲を返してくれるって言ってるしなあ？

「ただ、死人が出るかもしれないってのはなあ」

今までは運よく失神どまりで済んでいたけど、ウエルミは死にかけたわけだし……

「それはありません。あの呪紋はただ霊素を吸うのではなくて殺さないように一定の量を残すようになっていきますから。事実、今まで失神以上の状態になった生徒はいなかったでしょう？」

「でもウエルミは……」

「私もまさか悪魔が座るとは思いませんでしたから……あくまで残す霊素の量は人間に必要な分となっていたので霊体の悪魔にとってはまったく足りなかったのです……私個人の感情としても、あなたを説得するためにも、ウエルミが死ななかったのは幸運でした」

ウエルミが死んでいたら哀しいし、俺とこんなふうにより取りすることもできなかったからってことか。回りくどい言い方をしないで素直に言えればいいのにな。ウエルミの前で素直に言うのが恥ずかしいのか？

「どちらにせよ今度からは悪魔が座っても大丈夫なようにしましょう。どうでしょうか？」

「ふーむ……誰にもバレないか？」

「少なくともあなたたちが初めて気がついたのは確かです」

ということとは母さんも気付いていなかったか黙認していたってことになるよな？

だったらだ……俺も気付かなかったふり、でいいんじゃないか？
いや、だってほら俺は母さんの代理だから母さんが気付いていないのに気付いてしまったなんて恥をかかせるし黙認していたならその意思を尊重する必要が、

「ダメだよ、タネ君」

「え？」

戦わずして未咲を助けられるんだぞ？

そもそも戦ったとしても俺たちが勝てる保証なんてものはないし。勝てたとしても無傷でなんてことはありえない。俺は痛い嫌だしウェルミだって嫌なはずだ。しかも相手は相手で幸せ。

全員が納得する利害関係があるんだったら使わない手はないだろう。チキンとか言うな。

「ダメなものはダメなの……これが、私の目的だから」

「目的？」

「こっちにきた天使たちの消滅、もしくは魔界への封印。それが私の役目なの……秘密にしててごめんね？」

なるほど、な。

「……つまりウェルミは未咲を助けるためにきたわけじゃないってことか。役目とかそんなものはどうでもいいけど未咲を軽く扱うのだけは許せないな……」

「へ？」

俺の第一の目的は未咲を助け出すことだ。

相手を絶対にどうにかしなきゃいけないっていう理由もないことだし俺にとっての優先すべきものが変わることはありえない。

「ウエルミが言ってるのは未咲の救出と片山エミリに勝つことのこと
ちらかしか選べない場合は未咲を諦めるってことだろ？」

「あ……って違うよ！ 未咲ちゃんも助けてエミリも魔界に戻すの
！」

「どっちかといえど？」

「どっちかといえど！ ……えと、どっち、も？」

「そんな中途半端な答えは認められないな」

「じゃあ未咲ちゃん！ 未咲ちゃんを助けるよ！」

「約束するか？」

「うゝ……約束、します」

渋々、涙目になりながらウエルミが頷く……これでウエルミは俺
を裏切れない。我ながら性格悪いな。

「……まあ勝てば官軍！」

「無様ですね……昔のあなたからは考えられません」

「ううゝゝゝ！ タネ君のバカあ！」

そもそもウエルミと片山エミリは仲が良かったんだろ？

何でわざわざ戦いたがるのか理解できない。

「つてことでお膳立てはしてやった。こっちで戦いたがってるのは
ウエルミだけだからあんたは一言だけ言えばいい。そうすりゃ全部
解決だ。言うべき内容は分かってるよな？」

「分かっています……ウエルミ、あなたが私に挑むなら私は花氏未
咲を殺します」

そう、そう言えばウエルミは戦えなくなる。

片山エミリと戦うということは未咲が殺されるってことに……っ

ておいコラお前！

「いい度胸だ。俺の未咲に指一本でも触れてみる？ 口塞いで生ゴミ置き場に閉じ込めてやるよ。腐臭の中で鼻息以外を許されないのは苦しいと思うぞ？」

よりによって未咲を殺すだといつ。未咲をやるならその前に俺をやりやがれ！

「あの、ウエルミ？ 私は何か間違えたのでしょうか？」

「ううん……あれはタネ君の病気みたいなものだから気にしないでいいよ」

病気とは何だ病気とは！

例え建前でも妹を殺すとか言われたら怒っちゃうのが兄と言う生物なんだよ！

「……ま、一件落着くことで未咲を連れて帰るか。おい、未咲はどこだ？」

「もう……タネ君甘すぎだよ。あんなに怒ってたのに私たちが知り合いだって分かった途端……」

その時、ウエルミは片山エミリに背を向けて微笑んでいた。役目がどうだとか言っただけで戦わなくて済んで安堵しているんだと思いたい。

もちろん俺もいざとなれば戦わざるを得ないとは思っていたけど、戦わないといけない理由がないなら戦わない。敵と味方が友達同士ならなおさらだ。

そして、だからこそウエルミは背後の片山エミリの笑みが代わったことに気付けなかった。

「そうですね。笑ってしまいたくなるほど甘いです。まあ、それは、」

「ウエルミ！ 狙わ、」

れてる、と最後まで言うことはできなかった。叫んだところでウエルミの背後に発生していた魔法の歪みを消えなかっただろうし、なによりウエルミに伝える必要がなくなったから。

部室棟の方向から放たれた弾丸が偶然にも歪みを霧散させ、さらにその弾道上にいた片山エミリを吹き飛ばしたからだ。

魔力に作用する弾丸、これだけで射手は特定できる。必要なときに必要なだけ。そういう少し厳しめ判断で気を効かせてくれるのは……

「未咲……」

俺の自慢の妹以外に存在しない。

「エミリ！？ タネ君どういうこと！？ エミリを騙したの！？」

やはりウエルミも悪魔だからか騙すということに過剰な反応を示す。

ついさっきまで戦おうとしていたのはウエルミなのに、今は裏切られたかもしれない友達のために怒っている。

動揺しているウエルミに落ち着くようジェスチャーをして未咲がいるであろう方向を目線で示す。

「今のは未咲だ……そっか、自力で逃げ出せたのか」

部室棟の屋上から片手を挙げる未咲が見えた。その腕はどこから

持ち出したのか無骨なライフルらしきものを抱えている。

俺が助け出そうと思ってたのに少し残念だ……無傷だってことは嬉しいけどな。

「まさか……未咲ちゃんだから約束は破ってないって……？」

「そもそも約束したのは俺とウエルミだけだし、戦いたがってたのはウエルミだろ？　なにより一番最初に裏切ったのは向こうだよ」

「そ、そんなわけ……！」

「……やっぱ天使相手に話し合いでの解決は無理なのか」

昔から天使の価値観は人間や悪魔のそれとは大きく乖離している、なんて言われるほどだからな。昔はうちの生徒として普通に過ごしてたんだろうし大丈夫なんじゃないかって思ってたけどああまで明確な攻撃の意思を見せられたらな……

まさかこの緊迫した空気の中で攻撃魔法意外を使うなんていう勘違いしてくださいと言わんばかりの行動をとると思えないし。

未咲が狙撃したのは偶然だろうけど歪みが見えていた俺からすれば幸運以外のなものでもない。さすが俺の女神様だ。

「そんなわけない！　エミリが裏切るなんて……！」

「少なくともウエルミの後頭部に向けて魔法が放たれそうになっていたのは事実だ。理由は本人に聞くしかなさそうだけど……わざわざ面白くない話をする必要もないだろう」

未咲の銃弾を額に喰らって吹き飛んだはずの片山エミリは無傷のまま立ち上がった。

きっと未咲のライフル事態は祓魔用の調整がされていないものだったから大したダメージにならなかったんだろう。精々が片山エミリの霊体を覆っている擬似的な肉体を傷つけた程度だ。未咲が悪魔殺しの素質を持っているとは言っても武器が調整されていなければ

あんまり意味はない。

ダメージは無かったものの驚きはしたらしく数回、それこそニキ
ビを気にする女子高生のような気軽さで額をさすりながら笑う。

「人の話を遮るなんて乱暴ですね……」

笑っていた口が高速でなにかを呟いた。

それとほぼ同時に未咲の立っていた屋上に大きな歪みが生まれた。
……大丈夫。未咲なら対処できるはずだ。

未咲は母さんの仕事に付き合って海外に渡ったり、家でも普段か
ら拳銃を振り回すほどだ。俺よりもよほど荒事には慣れている。

俺は未咲を、片山エミリは自分の魔法を信じた結果、屋上から離
した視線がまた真正面からぶつかり合う。

「……意外です。妹を溺愛しているあなたならすぐにでも怒り狂う
かと思ったのですが」

「あいにくと無駄なことはしない主義でね」

「つまり力量の差が分かってしまったので尻尾を巻いて逃げ出すと
いうことでしょうか？」

「ジョークとしては三流だな」

「本気なのでですから当たり前でしょうね」

「今のはなかなか面白いぞ」

「あらあら、もう一つくらい耳の穴を増やして差し上げた方がよろ
しいのでしょうか？」

「……ははははは」

「……うふふふふ」

前哨戦とばかりに口撃しあう……もちろん天使と人間の間にある
差なんて最初から分かっている。

それよりも今はこいつに隙を見せないことの方が大事だ。一瞬で

も気を逸らそうものなら百舌鳥モズの早贄えよろしく串刺しにされる。

「……ウエルミ、もう分かっただろ？」

「うん……分かった」

ウエルミは泣いたのかもしれない。

俯いていた顔をあげて片山エミリを睨みあげた。

「エミリ……もう、許せないからね？」

「普段ならば第三級のあなたと戦うなんてゴメンですけれど……ウエルミ、恨まないでくださいね？」

二人の視線が重なった瞬間、その中間で石の槍と氷の槍が互いを砕き合った。その一合だけに終わらず槍は次々と屹立する。

……速い。

片山エミリの方はまだしもウエルミに至っては魔力の歪みすら確認できない程の速さだ。それでも互角のやり取りということはウエルミはまだ迷っているのか……だから石槍の迎撃に徹して自分から仕掛けないのか？

「いや、これは……」

迎撃だけで手一杯なんだ。手助けするべきなんだろうけど……下手に手出しするとかえって邪魔になりそうで動けない。

「ウエルミ、苦しそうですよ？」

「つく……」

でも構成が速いのはウエルミなのにどうして押されてるんだ？
ウエルミ程の腕前はら急ぎすぎで詰めが甘くなってるなんてこと

はないはずだ。

ムデイエ・フイト

ムデイエ・ガルネ

それに氷属性魔法は石属性魔法と同じくらい強固な物質化魔法を放てる。片山エミリがウエルミ以上に強力な魔法の使い手という可能性もゼロではないけど第三級に匹敵するヤツがポンポンいるとも思えない。

それなのにウエルミの作りだす氷の槍が石槍を砕くより、逆に砕かれる方が多い。

「タネ君……水、出せないかな……？」

「水？ ……媒体か！？」

そういうことか……！

自力だけで戦わないといけないウエルミに対して片山エミリは地面を媒介にしているから……媒体があるなら二人の間の魔力の差も関係無くなる。それどころか片山エミリの方が……

「た、タネ君、まだ！？」

「あ、ああ、すまん！ ネリ・ビティエスイレ 水よ、集まれ……」

ただ、俺が集められる量なんてたかが知れてる。
今のうちにまとまった量の水の用意する手段を見付けないと。

「目の前でビティエのんびり収集だなんて……バカにされているのでしょうか？」

目の前にいくつかの歪み……多分、囲まれてる。目の前の歪みを潰したとしても後ろから攻撃されるだろう。

「ウエルミ！」

集めた水をウエルミに投げる。状況が状況だからサッカーボール程度の量しか集められなかったのは勘弁してくれ。

そして同時に俺の周りを礫弾とそれを撃ち落とす氷弾が飛び交う。うん。ウエルミ、信じてたぞ。

「あつ、まず！」

ウエルミ！？　まずってどういうことだ！？

「タネ君避けて！」

「避けてってそんな無茶、なああああ！？」

顔面に向かって飛んできた弾丸をブリッジの要領でなんとか避ける。背骨あたりに嫌な感覚があったけど命あつての物種だ……や、やっぱり痛い……

「タネ君右に転がって！」

「右って俺にとってのうおおお！？」

俺にとっての左じゃねえか！

地面をゴロゴロと転がる俺に衝撃で舞い上がった砂が降りかかる。さりげなく着弾した跡を確認してみると地面には黒い穴がいくつもあいていた。避けなかったらハチノスにされてたっぽい。

「でもまあ……これでなんとか勝てそうだ」

片山エミリ、いつまでも自分が強者側に立っていると思うなよ？　この際、最初に俺に向かって飛んできた弾が氷だったことは無視する。片山エミリの優位性を崩す作戦は思い付いたけど素直に待つてはくれないだろうし……なにより後手に回ったら実行が厳しくな

る。

こっちから動くしかない。

「ネリ・トルム
水弾！」

薬指と人差し指を立てた右手を片山エミリに向ける。右の薬指と人差し指が示す意味は十。それにしたがって水弾が十発放たれた。ネリ・トルム拳程度の大きさの水弾が全て片山エミリの顔に向かって飛んでいく。

弾道は微妙にズレているから水弾が壁になってこっちを見ることができないはずだ。仮に体を動かして無理にこちらを見ようとしても、そんなに大きな隙を見逃すウェルミではない。

だから今の内に、

「一旦逃げ……後方に転進！」

「ふええ！？ あ、タネ君待って！　　というか素直に逃げるって言うおうよ！」

男が敵に背中を見せられるわけないだろうが！

俺が思い付いた作戦にはウェルミか未咲が必要だ。それもできれば両方揃う方が望ましい。まずは未咲がいるはずの部室棟の屋上に向かおう。

「ウェルミ！　部室棟の屋上まで俺を運べ！」

「……お姫様だっこでもいい？」

「この際なんでもいいよ！」

というか緊張感を持って緊張感を！

後ろをついてきていたウェルミが隣に並び、俺の首と腰をつかんで抱えあげる。そして部室棟の外壁まで走ったところで跳躍し直接

屋上に降り立った。

向こうからも俺たちの居場所が分かってしまったけど、魔力の歪みを見ることが出来るならこの距離で対処はできる。

「未咲！」

すぐさまウエルミの腕を振りほどいて屋上の中央に座り込んでいた未咲に駆け寄る。

見たところ外傷はない。でも未咲の場合だとそれはなんの判断材料にはならない。

「未咲、大丈夫か！？ 何があった？」

「兄さん、戦いの時は……先に何があったのかを聞きましょうよ。でもありがとうございます」

屋上の隅でエミリからの攻撃に備えているウエルミを認めた未咲が口調が途中で変えた。

未咲の制服が所々破れて入るものの、やはり傷は見当たらない。拐われたときに貫かれたはずなのに怪我がないということは……

「使ったのか？」

未咲には普通の人間には……それどころか悪魔にすらない特殊な力がある。強すぎる腕力もそれにあたるけど、俺が話題にしているのはそれとは別の異能といってもいいほど強力な力。

「……二回だけです。兄様は心配しすぎです」

「二回だけって次使ったら……！」

「使ったところで死ぬわけじゃありません……」

完全治癒能力……未咲が持っているのがそれだ。未咲の意思によって自分の身体を正常な状態に戻す力。ただし強力な力だからラナトから使うのは一日に二回だけと言われている。

もし三回使ったら負担の大きさから未咲が昏睡状態に陥るかもしれないと言っていた。

「とりあえずこの話は後にしましょう？ ウエルミさんも居ますから……」

「分かった。ただ、顔色悪いぞ？」

「ああ、それはアレを運んできたからです……」

アレがなにかはすぐに分かった。いや、分からさせられたと言ってもいいかもしれない。

未咲の視線の先にあったのはそもそもの始まりとなった呪文が刻まれた椅子……そして、その椅子に申し訳なさそうに座っている黒髪長髪の女生徒——正真正銘の桐野舞子だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9916u/>

小悪魔えくそしすた！

2011年12月1日23時48分発行